



『ラドクリッフ図書館（オックスフォード大学）の設計図』

Gibbs, James. *Bibliotheca Radclifiana.*

Oxford, for the Radcliffe Trustees, 1737

オックスフォードのボードリアン図書館を訪ねると、ゴシック様の建造物を周囲に配し、円柱形の三階建て屋上にさらに円錐形の二階の天井をもつ建物が突然眼前に現れる。1749年にラドクリッフ図書館として建設され、いまはラドクリッフ・カメラと称され、ボードリアン図書館施設の一部として、主に閲覧室として使われている建物である。一見ちょっと変わった姿形をしているが、ジェームズ・ギップズ（1682-1754年）という18世紀英国の著名な建築デザイナーの設計によるものである。

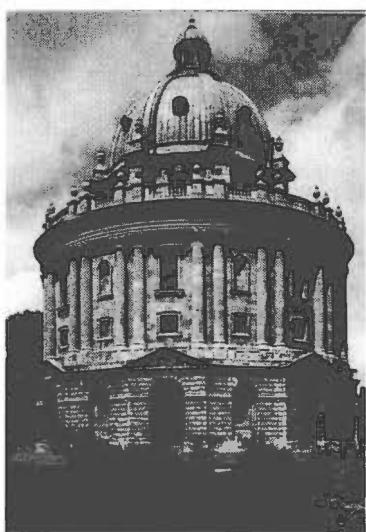
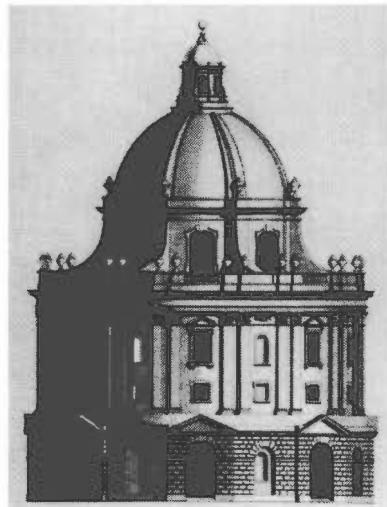
ギップズは生涯に、ケンブリッジ市議会の Royal Library とオックスフォード All Souls College の Codrington Library そしてこの Radcliffe Library の三つの図書館を設計し、工事監督に携わったが、彼はこの他に市庁舎、学校、教会、礼拝堂、病院、ホール、住居などの建造物や公園、庭園、記念碑などを手がけた。作品一覧¹⁾によると、英国中の30以上の地域に 180 以上現存している。

Radcliffe Library は、彼の手がけた多くの建造物の中でも傑作中の傑作であったようだ。オックスフォード大学は、この図書館の竣工と開館を祝って、二日間にわたる開館式を行っている。

『ラドクリッフ図書館の設計図』は1740年に刊行されているが、本資料は、1737年に120部制作されたもので、五葉の銅版画（550×380～475 mm）からなっている。これを原案としていくつかの修正、変更が加えられ、現存のラドクリッフ図書館は、1749年に完成している。

1) Friedman, T. James Gibbs. London, Yale University Press, for the Paul Mellon Center for Studies in British Art, 1984. p.289-326

（渋川 雅俊）



MEDIANET 3

目 次

新所長挨拶

コンピュータを利用した教育

桜井治彦……1
小林啓孝……2

〈特集〉 山中資料センターと蔵書の再構成

慶應義塾大学山中資料センター——一年を経過して——
医学メディアセンターにおける保存書庫の活用

酒井啓自……4
酒井由紀子他……6

学生用コレクションを対象とする

日吉メディアセンターの蔵書再編成について
終わりなき闘い

宮入暁子……9
風間茂彦……11

ある夏の日《スタッフルーム》

材料化学分野の情報検索——米国留学の体験を通じて——
日吉メディアセンター利用実態調査報告

角田浩子……13
磯部徹彦……14
武正恒……17

学生スタッフから見たメディアセンター

各地区学生スタッフに関する調査

佐野 卓哉(三田) 片桐 啓(日吉) 室田 典良(湘南藤沢)

MediaNet 編集部……18

石井 秀教(日吉)

関口 英樹(三田)

WWW を用いた利用案内

SFC におけるインターネットを用いた利用案内について
医学メディアセンターの非図書資料雑誌の扱いについて
検索のコツ——学情と業務検索と OPAC を使いこなす——
本の匂いと手ざわり《ティールーム》
小さな本を追い求めて《スタッフルーム》
日吉ギャラリーの誕生——メディアの多様化と図書館——

金子 康樹……26
筒井 利子……29
五十嵐 由美子……32
小沢 ゆかり……35
岡部 光明……45
三瓶 美和子……46
衛藤 駿……47

MEDIANET レポート

1. 図書利用券と利用者管理——新学生証交付を機に——

図書利用券・KOSMOS 利用者管理の現状と今後の課題

木下 和彦……50

日吉メディアセンター——新学生証への対応——

木下 和彦……53

湘南藤沢メディアセンターにおける入館システム

木下 和彦……54

2. オリエンテーションの新しい試み……

河野江津子(日吉) 酒井 明夫, 長島 敏樹(理工学) 藤井 康子(三田)

木下 和彦……55

松本 和子(湘南藤沢)

3. コンピュータの新しい利用環境……

高橋 幸久, 持田 裕人(三田) 宮国 彰郎, 降旗ゆかり(日吉)

木下 和彦……59

芳岡 史郎(医学) 小林 啓樹(湘南藤沢)

マネージメント&リソース・センター《ティールーム》

藤島 清太郎……67

慶應義塾情報スーパーハイウェイの構築

大賀 裕……68

CD-ROM データベース検索サービス——キャンパスネットワークからの利用/

検索システムとネットワークの構成——

清野 早苗, 沢木 敏郎……72

コンピュータとのつき合い《ティールーム》

吉野 直行……79

イギリス NACSIS-CAT プロジェクト

関秀行……80

目録情報の週及状況

週及事業室……83

振り返れば...《スタッフルーム》

玉村 文子……86

米国の大uateにおける情報処理環境《海外レポート》

高橋 幸久……87

<資料>

メディアセンターに関する書誌……90

スタッフによる論文発表・研究発表……90

年次統計資料(計算室統計を含む)……93

『ラドクリッフ図書館の設計図』 渋川 雅俊…表紙裏

編集後記……102

<表紙> デザイン 石田恵子

<カット> 酒井明夫, 中島直子

MEDIANET 第3号 * 1995年11月1日発行 * 編集人 石黒教子 * 発行人 渋川雅俊

* 発行所 慶應義塾大学メディアネット本部 〒108 東京都港区三田 2-15-45

* 電話 03(3453)4511(内線 2501) * 印刷所 (有)梅沢印刷所

新所長挨拶

さくら いはる ひこ
桜井治彦
(医学メディアセンター所長)
(医学部教授)

加藤隆一前所長が3月末に定年退職されたのを引き継ぎ、4月1日から医学メディアセンター所長になりました。医学部ではメディアセンターを含め、任期が今年の9月末日までとなっている職務が多いので、この文が掲載される頃には次の新所長が誕生しているかと思います。しかしこ数カ月所長として、またその前の数年間を副所長として勤務した者として、いくつかの所感を述べさせていただきます。

医学部では医学メディアセンターを長い間北里図書館と呼んで親しんで来ました。福沢諭吉先生と共にこの医学部の創立者であった北里柴三郎先生のお名前をとり正式の名称を北里記念医学図書館と言います。私は最近は雑務が増えて閲覧室を利用する機会が減っていますが、これまでにこの図書館の中で過ごした時間は医学部の学生だった頃から今までの約40年間に相当な量になります。古いけれど風格のある北里図書館の建物の狭く暗い書庫や、静かで落ちついた閲覧室で、世界の文献を読みながら味わった興奮や頭に浮かんだ研究上の数々の着想のことを思うと懐かしさと感謝の気持ちが湧いてきます。その図書館が年を経てメディアセンターと呼ばれ、私が運営の責務を担うようになったことには若干の感慨があります。

北里図書館は知る人ぞ知る日本で有数のレベルの高い医学図書館であり、しかも最も利用し易い施設であるという評価がずいぶん昔から定着しています。他大学やあちこちの研究機関の人々がよくこの図書館には通っていました。現在も幸いにして文献の購入に当たられる予算はわが国では高い方の位置を占め、サービスの質も高く維持されていることは嬉しいことです。しかし私にとって

は懐かしいこの建物も現在の図書館の機能を支えるにはあまりにもスペースが足りない状況になっています。統計資料によると、書庫や閲覧室の面積ではわが国で下位に属するようです。それにもかかわらず使い易さが保たれているのは、何よりも職員の努力があるからであろうと思います。

ところでこれから医学図書館がどうあるべきかという間に正確に答えるのは難しいことですが、私どもの医学メディアセンターが激しい変革の時期にさしかかっていることは間違ありません。最近は閲覧室に行くと、学生達が世界の医学文献を検索出来る CD-ROM からどんどん文献を探し出して論文書きに挑戦している姿がみられます。自分のパソコンにダウンロードして利用している学生もいるようになりました。ここ数年のうちに、信濃町キャンパスのすべての研究室から情報スーパーハイウェイを経由し、あらゆる情報収集手段を駆使して目的を達成することが可能になるでしょう。

そこでこれから図書館業務では、従来と同じ程度の情報提供の支援を目的とする限り、より少ないスペースで足りるようになることも考えられます。勿論従来通りに印刷された媒体がまだ当分の間は中心であり続けるとは思いますが。しかし徐々に重要な機能として、キャンパスの構成員や地域の人々に対して開かれた快適な勉強場所として、また情報処理や情報教育の方法論に関する研究の場として意味を持ってくるのではないかでしょうか。医学の領域では人の肉体と精神について、日々膨大な新知識が生み出されています。それらはすべて人間というコンパクトな存在に関する知識ですから、医学に携わる者としては、何一つ無視してよいというものはありません。とても追いつかないでの、専門外という言葉で逃げていることも多いのですが、出来るだけ正しく深い理解を目指して努力しなければならない立場にいるのが私達です。そのためには医学メディアセンターにとって、新しい一次情報に効率よくたどりつくことを支援すると共に、自ら学ぶための第一級のメディアを提供することが大切な課題になるでしょ

卷頭言

う。これは今後の教育の中心課題の一つに他ならず、メディアセンターの役割は、今後変化しながらもキャンパス内で益々重要になっていくと思っています。多様な将来のメディアセンター業務を遂行するのに、どのような建物とマンパワーが必要かを検討し実現に向けて計画をたてるべき時が今なのだと思われます。

コンピュータを利用した教育

こ はやし よし たか
小 林 啓 孝

(三田メディアセンター副所長)
(商学部教授)

私は1994年11月から三田メディアセンター副所長に就任した。私の担当は計算室なのでコンピュータを使用した教育の経験を通じて得た雑感を記すことによって新任の挨拶としたい。

私は、1994年度に商学部において「会計情報分析」という2単位半期の講義を春、秋学期に担当した。内容は初步的なものであって、Lotus 1-2-3を使用して仮想の財務データを加工したり、日経 NEEDS から財務データを引っ張ってきて、それを Lotus1-2-3 や SAS で加工するというものであった。講義の経験を通じて次の諸点が指摘できる。

第1に、パソコン上の表計算ソフトの操作については、それなりに理解してついてきているが、大型コンピュータの使用になると理解度が急速に低下してしまうことである。特に、DD名をファイルに割り当てる操作が理解しにくく、また、この操作の実行をよく忘れていた。その結果、データセットが読み出せなかったり、プログラムや実行結果を書き出せないと騒ぐ学生が毎回いた。

第2に、こちらが思ってもいなかった操作をする学生や前回までの学習を消化していない学生がいて、ある学生の問題解決に携わっていると、その間にまた別の学生が私を呼ぶという具合に、ト

ラブル処理に時間を相当割かれ、なかなか本来の講義ができないというのが実状であった。

第3に、通常の講義では見られない現象であるが、「どうも有り難うございました。」と言って教室を出る学生が少なからずいたことである。

第4に、春、秋学期とともに最終講義日にアンケートを採ったが、どちらの場合も学生の評価は高く、中には、慶應に入って以来最高の講義であったとする学生もいたほどである。

冒頭にも書いたように、この講義ではきわめて初步的なことを行っているにすぎない。また、トラブル処理の時間が多く、予定した内容さえも十分に消化したわけではない。それにもかかわらず、学生から上記の第3、第4の反応があるのは何故なのであろうか。

第1に考えられるのは、自ら操作をすることを通じて、主体的に何かをやったのだ、何か学習したのだという実感を得たためではないかということである。

第2に考えられるのは、トラブルシューティングや学生の間を回っての操作上のアドバイスを通じて、教師を身近に感じ、教師と触れ合ったという実感を得たためではないかということである。

ちなみに、「会計情報分析」以外でも、教室で問題を解かせ、学生の間を回りながら、時々アドバイスをするというスタイルをとった場合、講義に対する評価が高くなっている。

私のささやかな経験を通じて、情報処理教育に対する課題を指摘すれば次のようにになる。

課題は大きく短期的な部分と長期的な部分とに分かれる。短期的には、学生にコンピュータリテラシーを本気になって身につけさせたいと思うなら、第1に、相当数のアシスタントを投入しなければならないということである。そうでないと、教師はトラブルシューティングに追われてしまって、肝心の講義がなかなか進まないという事態に陥ってしまう。第2に、コンピュータを使用しなければならない課題を課すような講義を増やすことである。このような講義の増加は学生の参加意識が高まるなど学生の満足感を増す方向に作用す

ると思われる。また、学生は否応なくコンピュータを使用せざるを得なくなり、コンピュータ使用能力も向上する。第3に、操作性から言って、教育に当たってはパソコンをメインにするのがよいと思う。第4に、コンピュータの使用を前提とする講義が増加した場合、大学側がパソコン教室を用意し、そこにパソコンを設置しておくという対応では限界があるので、学生側にパソコンを持たせるという方向に進むべきと思われる。

時間が経過していけば、コンピュータの操作は誰でもができる当たり前の技能になっていく。問題は何のためにコンピュータを使用するかなのである。コンピュータを使って伝えるべき何ものか、解決すべき問題・課題がなければ、コンピュータの操作に長けていたところで意味がない。長期的には、コンピュータを使用する目的として大学は学生に何を伝えたいかが問題となるのである。

メディアネット研究会

平成6年度

第4回（平成6年9月26日

於 三田メディアセンター）

報告者 渋川雅俊「慶應義塾における高度
情報化政策の進展について」

第5回（平成6年10月31日

於 三田メディアセンター）

報告者 風間茂彦「保存書庫の運用」
島本光信「山中資料センターの運
用」

第6回（平成6年11月28日

於 三田メディアセンター）

報告者 高橋幸久「（海外研修報告）米国
の大学における情報処理環境につ
いて」関秀行「（海外研修報告）
二つの国の大学図書館」

第7回（平成6年12月16日）

見学先 大日本印刷株式会社
マルチメディア・スタジオ

第8回（平成6年2月2日

於 三田メディアセンター）

報告者 金子史世「電子図書館システムに
ついて」

第9回（平成6年3月13日

於 三田メディアセンター）
報告者 中島紘一「国際センターの活動に
ついて」

平成7年度

第1回（平成7年5月15日

於 三田メディアセンター）
報告者 金子康樹「機械可読データファイ
ル（MRDF）の提供について」

第2回（平成7年6月14日

於 三田メディアセンター）
報告者 細野公男「電子図書館II—ヨー
ロッパにおける電子図書館事
情—」

第3回（平成7年7月10日

於 三田メディアセンター）
報告者 斎藤信男「ネットワークの新展
開」

特集 山中資料センターと蔵書の再構成

慶應義塾大学山中資料センター

——一年を経過して——

きか
酒 井 啓 自
(山中資料センター駐在員)

1. はじめに

慶應義塾大学山中資料センター（以下、山中）は、平成6年8月17日より資料提供サービスを開始し一年を経過した。

山中の資料数は8月末現在で、三田メディアセンター（以下、三田）から移管された単行本（1961年以前）およそ99,000冊、医学メディアセンター（以下、信濃町）から移管された単行本（1944年以前）およそ17,000冊と雑誌（1969年以前）およそ58,000冊である。今後の予定として、9月末に理工学メディアセンター（以下、矢上）から雑誌（1964年以前）、来年3月に三田から雑誌が入り、来年度に残った書架に日吉からの資料が入ることになっている。

移管された資料に対する利用実績は、平成6年9月から平成7年7月までの11カ月で、三田の貸出が509件788冊、信濃町の貸出が130件198冊、信濃町の雑誌を対象としたファクシミリによる文献複写送付が3,743件25,867枚であった。これららの運用業務に携わっている人員は、専従2名である。一年間で行ったその他の作業としては、移管資料の配架調整および移管内容の確認作業が上げられる。配架調整は、移管当初の配架から運用に適した配架へとほぼ3カ月を要した。その間、山中要員が触らなかった資料は、三田からのU本（教養図書）を除いて無い。

山中の業務を担当者は、1. 資料運用、2. 資料保存、3. データ整理の3点として捉え、以下に記

述する。

2.1 資料運用業務

主業務として位置づけられる資料運用には、貸出と文献のファクシミリによる送付とがある。貸出はファクシミリで受け宅急便で送付している。山中で受け付けた翌日には各メディアセンターに届いている。ファクシミリによる文献の送付は、現状では信濃町の雑誌に限られている。原則として受付即応処理を行っているが、申込件数が多い場合や、1件の送付枚数が多い場合を考慮し受付から2時間程度の余裕をみてもらっている。至急の場合には、その旨を申しそえもらえば遅くとも15分後には流しはじめることができる。現在、山中には2台のG4ファクシミリ機がある。これは、9月末の矢上からの資料移管と、来年3月に予定されている三田からの資料移管を考慮した設置である。一日の最大送付量は、文献枚数にして1,000枚の処理が可能である。文献一枚を送るのに平均40秒の送信時間を要している。写真が含まれると一枚送るのに1分以上要する場合もある。資料運用に関わる1日の平均作業内容は、信濃町から20件の文献依頼を受け100枚を送付し、三田から2件の貸出依頼を受け宅急便で送付することである。平均すればこのようになるが、申込が50件／日を越える場合もある。これまでの送付枚数最高値は457枚／日であった。

2.2 資料保存業務

具体的な作業は、信濃町の雑誌の落丁・破損資料を調査し、定期的に送り返し修復を依頼している。また背表紙、請求番号の破損については山中で修復作業を行っている。文献申込に対する謝絶の多くは、欠本及び欠号である。その補充は難しいと思われるが、担当者としては隙間は埋めていきたいと考えている。

設備的には、年間を通じて書庫内気温は摂氏20

度、湿度は55%に維持されている。資料にとって最高の環境といえる。

2.3 データ整理作業

移管された資料の基となる書誌に関するデータはあるが、20年以上を経過し、紛失した資料もあれば破損した資料もある。これらを調査しできるだけ正確なデータの把握をしたい。しかしながら今のところ、KOSMOS 接続の予定はたっていない。

申込者の勘違いや記載ミスで、書誌事項が間違っている場合も、資料が古くなればなるほど多くみられるが、山中には二次資料もない。山中という遠隔地にある資料を、都心にある資料とかわりなく利用できる環境を創り出すために必要な作業であると考え、dBASE III により簡単なソフトをくみ、書誌データの入力を始めた。基本データの入力により、誌名の間違いはある程度調査が可能となっている。完成までにはまだ時間を要するが、少しづつではあるが着実に進めている。

3. おわりに

山中に移管される資料は、基本的に20年以上を経過したものである。国際医学情報センターの毎年の利用頻度調査によれば、医学関連雑誌の推移は、発刊翌年が利用のピークとなり、以降年々低下していく傾向にある。20年を経過した資料が利用総数に占める割合は、2~3%に過ぎない。これは分野によっても異なるであろうし自然科学と

人文系では違うであろう。しかし、たとえ2~3%の利用であっても必要とする研究者にしてみれば、その文献が100%であることから、提供する側も最善をつくしていかなければならないと考えてい



る。文献情報を扱う分野では保管スペースの不足により、資料をいかに廃棄するかが大きな課題となっている。CD-ROM や光ディスクによる資料保存も急速に普及してきている。保存書庫の増設や、資料を倉庫に預けるなどの方法を実施している大学図書館もある。確かにスペースの問題は切実である。欧米には500万冊を擁する図書館が幾つもある。山中が200万冊を擁する資料センターとなる日がいつになるかは知れないが、そのための準備は惜しまないつもりでいる。山中に着任当初、三田から移管された資料を整理していく2冊の本を見つけ感動した。1冊は河口慧海のサイン入り寄贈本、1冊は鉄斎の画集である。慧海は若いころ文庫本で読み、その行動力に驚かされたし、鉄斎は小林秀雄の「鉄斎」で名前は知っていたが絵を見たことがなかった。富岡鉄斎の名前は、現代の美術史には出てこない。資料にも流行がある。流行と、価値そのものとはあまり関係がない。山中にある資料には、人の寿命をはるかにこえたものも少なくない。間違いなく宝の山である。これらの資料と出会えたことは私にとって幸いである。



編集部注：筆者は国際医学情報センター情報資料部
山中資料センター担当課長

医学メディアセンターにおける 保存書庫の活用

酒井由紀子
田中知之
佐久間公子
(医学メディアセンター)

1. はじめに

医学メディアセンターは、メディアネット全体の資料保存施設として建設された山中資料センターに図書館の所蔵資料を別置し、1994年8月からファクシミリと宅配便による資料提供サービスを開始した。本稿は、保存書庫活用のケーススタディとして、計画立案から現在の運用状況までを具体的に報告するものである。

2. 移送資料の選定

資料移送の準備、別置資料の運用、さらに図書館内の資料再配置に関する計画立案には、1993年10月に設置されたパブリックサービス側の担当者を中心とした6名のワーキンググループに事務長が加わり、これにあたった。

医学分野では単純に出版年の古い資料ほど明らかに利用が少ない。移送対象資料の選定で必要だったのは、利用の効果すなわち館内のスペースをできるだけ大きく取り戻すために、何年の資料まで移送可能かという判断であった。山中資料センターの収容量に移送効率と将来の移送分も加味して、対象は、旧分類図書（1944年以前出版）約17,000冊、雑誌（1969年以前出版）約58,000冊の計約75,000冊と決定した。1993年11月の協議会の承認を受け、本格的な準備作業が開始された。

3. 準備作業

準備作業は資料管理の面から先行して行った。1993年12月末までに、重複と医学分野以外の主題

の雑誌の除籍、旧分類図書の蔵書点検を終了させた。いずれも現物が手元になければできない作業であり、これが最後の機会であった。雑誌の蔵書点検は、KOSMOS導入以後初めて行うもので、後述の計測作業と同時進行としたため、準備と手順の検討にはかなりの時間を要した。これらの作業は、利用者への配慮から閉館はせず、1994年3月末からの約1ヶ月間に全職員が割り当てのタイトルについて実施した。なお、点検・計測用リストの出力や、移送後の配置場所データ変更などのバッチ処理はメディアネット本部の図書館システム担当に仕様を提示して依頼した。

資料移送作業で最も重要でありかつ困難であったのは、その大部分を占める雑誌の移送が、単に資料を棚から棚へ移動させる平行移動ではなかったという点にある。すなわち1944年以前のものは地下書庫、1945年～1969年のものは4階書庫と、別々のフロアに配架されていた雑誌を、山中においてはタイトルのアルファベット順に配列し直して配架する方式としたため、1944年以前のAという雑誌のあとに、1945年以降のAという雑誌を配架し、次に1944年以前のBという雑誌、続いて1945年以降のBという具合に、タイトルごと、年代別に雑誌を繰り込んでいく形となったことである。さらには、数年後には書庫スペースが再び限界に近づき、資料移送が必要となることを予測し、その分のスペースをあらかじめ空けておくことも計画された。このため準備段階で、各雑誌タイトルごとに、その書架上での幅を実測して表に記入し、次回移送が予想される年代（1970年代を想定）の分は、そのスペースを空けた状態で、山中の書架図面上に割りつけるという作業が必要となった。

移送作業は7月下旬から開始され、山中への移送資料の搬出は約1週間で終了した。その後、医学メディアセンター内の資料の再配置を含めて8月前半で作業は完了し、8月17日より山中資料センターの運用が開始された。

この間も、利用者にはなるべく不便をかけないという観点から、開館状態のまま現に作業中であ

る部分のみを利用停止として作業を行った。

利用できない部分が発生することについては、広報誌「きたさとニュース」に予告記事を掲載したほか、図書館内各所に掲示を出したり、各研究室にも文書を配布するなどの方法で、周知徹底を図った。特に館内掲示は、作業の進行状況に応じ頻繁に内容を更新した。

4. 運用状況

山中資料センター別置資料の利用処理方法は、図1のように行っている。カウンターでの受付は、複写の場合午後3時までに申し込まれたものは、当日中に渡すことを原則とし、それ以降の申込みは翌日の渡しとしている。貸出は届いた時点で、申込み者に連絡することにしている。

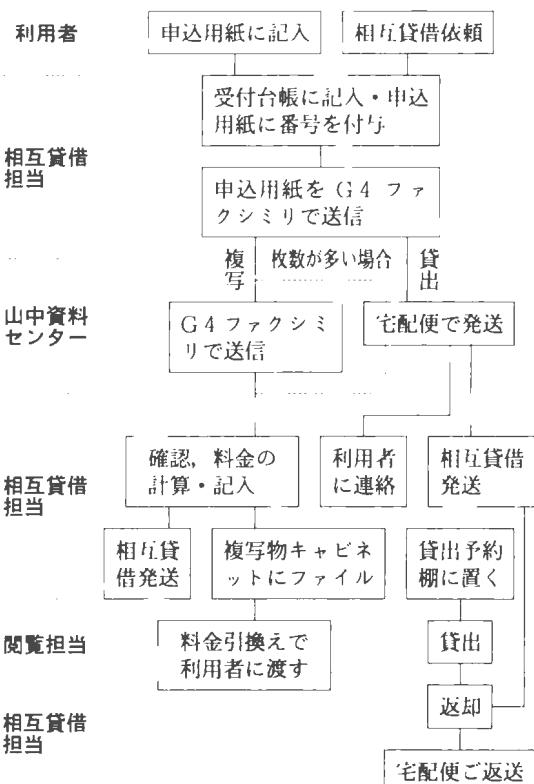


図1 处理方法

複写料金は館内における複写と同様のあつかいをとり、学内者30円/枚、学外者55円/枚、その

他100円/枚、(民間企業の依頼は受けない)としている。このため、送受信にかかるファクシミリ代や、宅配便料金は医学メディアセンターの負担となる。経費の節減を考えると、利用者の要求に応じて、電話料金の安くなる夜間を利用するなどの措置が考えられる。ちなみに、山中資料センター運用開始以来、1995年7月末までに医学メディアセンターが負担した経費は、宅配便代、合計約48,000円、専用ファクシミリの電話料金、合計約139,000円である。(山中資料センター側の経費は含まない。)

今年度の資料利用状況は7月31日までで1,620件の申込みがあった。その内1,568件(96.7%)が複写依頼で、貸出に比べると圧倒的に複写の申込みが多い。

これまでの運用上の問題点としては次の2点があげられる。

まず、山中資料センターにある他地区の資料を利用する場合、直接山中資料センターへ申し込むシステムをとっていないことである。このため、塾内便での送付という無駄な手間をとっており、入手までに時間がかかることになる。理工学、日吉と資料移転が進めば、当然塾内の話し合いが必要となってくるであろう。

次に、申込み受付時にKOSMOSでの所蔵確認作業が必ずしもできないため、申し込んだ結果欠号だったというケースが意外に多いことである。2時間後に取りにきた利用者はがっかりすると共に、同じことを別の申込み用紙に再度記入しなければならない。今後、カウンターでの対応および、相互貸借業務への連動を検討すべきである。

5. 評価と課題

資料別置の結果、冊子体資料の書架には3年分の余裕を得た。また懸案の利用のためのスペース、特にコンピュータ機器の設置場所を広く確保し、新しいサービス展開の基盤を得ることができた。利用者の反応はおおむね好意的である。利用の少ない資料を対象とし、利用体制を整えたこと

が大きな要因だが、もともと館内での複写もカウンターでの申し込み方式で、利用の盛んな相互貸借も同様のサービスであることが幸いしている。別置資料を利用する際の問題点として、複写申し込みが集中するとG4ファクシミリの記憶容量を越え、受信に多くの時間がかかることがある。

資料管理面では、準備関連作業の見積りの甘さが反省点である。旧分類図書は記録がすべて紙の形で、カードや原簿が不備な上に、現物の破損がひどく、点検に断続的に1年半の時間と多くの修

理製本費を費やした。予定していた複本の除籍作業は判断の難しさから中途で断念、閲覧用カードの点検もしていない。雑誌の蔵書点検は、事後のデータや背文字の修正、現物の再確認などの作業を、1995年8月現在も続けている。

今後の課題としては、山中資料センター内の資料の重複に対して塾内の分担保存をどうするかという問題がある。さらに医学メディアセンターでは、医学図書館のネットワークの中での分担保存という視点も重要である。将来を見越した分担収集や保存・廃棄の基準の必要性を感じる。

こんなことから あんなことまで

- ◆『手持ちのリストをデータベースにしたい』『目録を作成したい』『報告書をまとめたい』などなど……
- ◆『インターネットに情報を載せたい』『出版の企てがある』などなど……
- ◆『自分でデータベースを検索するのは面倒……』

そんな時、お電話下さい。

情報処理、デザイン・印刷、文献検索



DESIGN & INFORMATION NETWORK

株式会社 伸樹社

〒101 東京都千代田区三崎町3-6-12 MMKビル2F
TEL.03-5276-6770 FAX.03-5276-5677

学生用コレクションを対象とする日吉 メディアセンターの蔵書再編成について

みや いわ あき 三
吉 入 晓 子

(日吉メディアセンター課長代理)

1. はじめに

社会変化の大きな波がさし迫っている。「マルチメディア」がその原動力である。高度情報化の進展は学術情報流通に変貌をもたらし、あらゆる文明現象の収蔵庫としての図書館の歴史に「館」を越え情報要求のインターフェースとしての役割を加えている。一方、変貌する図書館にあって変わらないのは、「館」において増え続ける蔵書と収納スペースとのせめぎあいである。

メディアネットでは、各メディアセンター収納スペース狭隘化対策の一つとして、保存書庫である山中資料センターを1994年10月正式稼働した。日吉メディアセンター（以下、日吉MC）においても1996年度に山中資料センターへ蔵書の一部移管を計画している。移管資料の選定に関しては、慎重な検討が教員側と行われている。

増え続ける情報と有限の収納スペース。ネットワーク時代の到来を踏まえ、日吉MCでは、これを契機として、学生用コレクションの見直しを考えている。現段階では私見をまじえて述べることとする。

2. 蔵書再編成の必要性

日吉MCの図書館棟は、1985年4月収容能力学生用20万冊、研究者用20万冊、計40万冊として新築された。当時、一般教養課程の学生を主たる利用者とする学生用コレクションは、専門課程コレクションに対し学習用コレクションと位置付けられ、蔵書再編成作業により蔵書数の上限を常に20万冊とすることが予定されていた^{1,2)}。つまり保存機能より利用者に新しい使いやすい資料を提供することが優先されていたのである。収納ス

ペースの制約からくる蔵書規模設定、日吉MC研究者用コレクションとの関係及び塾内での役割に根拠をおくワーキング・コレクション維持は、以来日吉MCの学生用コレクション運用に課せられた課題というべきものであった。この10年の除籍結果を見ると新築当初における他機関への保管転換が数量的に目立つ他は、亡失、破損・汚損、改版、重複によるものが主な状況である。定期的に行う積極的な除籍は、メインコレクションとは別に、選書時より廃棄を想定して若い利用者にリアルタイムな情報を提供するコレクションに対してのみである。

蔵書は確実に増えている。書架専有率は、学生用コレクション（図書）約86%，同（雑誌）80%である。研究者用コレクションは、Metcalfeによる書庫管理を視野に入れた書庫限界専有率86%を超えている現状にある。

更に、メディアの多様化、カリキュラム改定による新しい教育環境変化、利用者のニーズの多様化に対応した学生用コレクションを構築していかなければならない。学生用に洋書を積極的に選書することも開始している。山中資料センター開設によって、収容能力の限界を理由に資料の廃棄を強いられる状況は緩和されたが、収納スペースは無限ではない。学生用コレクションを常に利用実態に即した、更に環境変化に対応できる、活性あるワーキング・コレクションとするためにも、研究者用コレクションとの保管における調整も念頭に入れた上で、継続的かつ計画的に、学生用コレクションの見直し作業を開始する時期が到来していると考える。

3. 蔵書再編成の考え方

蔵書の再編成とは、利用度の減少した資料の保存書庫への移動、複本調整、不要図書の除籍等の資料の再評価を意味する。従って、蔵書を構築する選書と表裏一体の作業となる為、その作業母体は図書館図書委員会がその責を負うことになる。委員会事務局が中心となり、教員、他の委員の協力も得て、十分検討した上で方針をたて、実施す

る必要がある。

除籍には最も注意を要するが、そのうち物理的な理由や明確な事実に基づいているものは特別な基準は必要としない。例えば、利用度の減少した重複図書、内容が逐次または改版等によって改訂され利用価値を失った図書（但し、史料的価値の認められるものを除く）や代替物の入手可能な破損・汚損図書であり、魅力あるワーキング・コレクション構築のためには、積極的な処理が必要とされるものである。一方、利用頻度の低くなった図書、資料的価値を失った図書、史料的価値の認められない図書という場合の蔵書再編成には、より注意が必要である。なお、学生用コレクションは、購入単価からみると比較的安価なものが多く、また類書が多くあるのが特徴であり、教科書、授業で指定された図書や希望図書の他は、特定の図書を求められることが少ない利用状況にある。また、電子メディア化された資料（特に二次資料、参考図書類）は、若い世代を利用対象としている日吉では、抵抗感が少なく、受入が今後促進される状況にある、その際は冊子体の利用との関係でも個々に対応が必要である。

4. 学生用コレクションと蔵書再編成（案）

① 教科書……大学教育の参考書として執筆されたもの。日吉では積極的に収集。複本あり。

最新の内容を保つよう努力し、常に資料の入れ替えを行う。改定版に対する旧版及び学術の発展、法律・制度、教育内容等の変更により内容が現実にそぐわなくなったと判定された資料は除籍する。保存する場合、複本の冊数を限定する。

② 一般教養書……大学生が読むにふさわしいと思われる啓蒙書、文学書等。

開架書庫の状況、資料の利用度を勘案し、止むを得なければ閉架書庫へ一旦移動し様子を見る。なお、閉架書庫利用については、研究者用コレクションでの利用の関係で流動的状況にある。その後の保存は日吉 MC 研究者用、他地区の所蔵を考慮に入れた上、資料毎に決定する。

③ 専門書……学部課程学生が必要とする範

囲。

カリキュラム改定に伴う日吉キャンパスでの講義科目の変化に対応して以前より増加。

蔵書再編成（案）は一般教養書に同じ。

④ 学術書……例外的に購入。

蔵書再編成（案）は一般教養書に同じ。

⑤ 参考図書……電子メディア形態もあり。

冊子体に関しては、開架書庫の状況、資料の利用度等を勘案し止むを得なければ閉架書庫へ移動する。更に保存書庫への移動も行う。

⑥ 雑誌……日吉 MC 研究者用との重複受入の場合、開架書庫から閉架書庫への移動の際は重複の調整が今後考えられる。更に、保存書庫への移動の際も同様。資料毎に決定する。

このように蔵書再編成の各段階で除籍が発生する。除籍された資料は、破損・汚損の場合を除いては他機関で再利用できる場合は移管し、資料の活用を図るよう意図するべきであろう。

そして、保存書庫へ配置する資料の望ましい要件は、①動きのないコレクション（配架場所を固定でき、書庫移動の必要がない）、②利用頻度の極端に低いもの、③目録・索引等で利用する部分を明快にしやすいもの、となるので、何らかの枠で括ることのできる資料群（例えば雑誌、旧版を中心とする参考図書類）が望ましいと考える。

5. おわりに

国内新刊5万点時代の到来。日吉 MC 学生用コレクションにある現代のキーワード「Internet」関連の多くの図書は時代を反映している。ネットワーク時代の「資源共有」を確かなものとするためにも、「所有」と「利用」への「アクセス」を確実に構築する必要がある。

参考文献

- 1) 小川治之 “日吉新図書館におけるサービスの概要” KULIC Vol.17 p.17-22 (1983)
- 2) 天野善雄 “新しい選書体制” KULIC Vol.19 p.2-6 (1985)

終わりなき闘い ——保存書庫の運用——

かざ
風間茂彦

(三田メディアセンター課長)

1. はじめに

1989年、研究教育情報センター所長は、増え続ける蔵書への対応として、200万冊収容の全塾共同「保存書庫」の設置を担当理事に申請した。この申請は、様々な経緯を経て、1994年「山中資料センター」(以下、センター)という形で現実のものとなった。これにより慶應義塾は、今後500万冊までの図書館蔵書の管理を、このセンターを運用して行うことになった。

昨年10月、第一棟(50万冊収容)が完成し、本稼働を開始した。三田地区では、これに先立ち、学内で移管資料の選択についての検討が、定められた手続きに従って進められ、結局三田メディアセンター(以下、三田)が提出した素案に基づいた約10万冊の山中への資料移管が行われた。更に三田は、これに続く約7万5千冊の移管を今年度末に予定している。ここでは、この保存書庫の運用について紹介するとともに、それをも含めた蔵書管理の課題について考えてみたい。

2. センターの運用

保存書庫運用にあたって、三田からの一次移管資料として選ばれたものは、旧分類洋書と、同じく大型本・特殊形態本、更には参考図書類約10万冊であった。これらは、1961年以前に図書館予算で収集されたコレクションで、現在書架分類として使用しているNDC(日本十進分類法第8版)と異なる独自分類をその書架分類として使用しているところから「旧分類」と便宜的に呼ばれている資料群である。移管資料は、利用件数の比較的小ないままりを移管資料とするという基本方針の下で、資料群の利用実態を把握し選ばれたもの

である。昨年10月の本稼働以来の取り寄せ実績は、本年7月末までに、472件/740冊である。これは一稼働日あたり平均2.07件/3.24冊となり、運用計画を立案する際に用いた、過去の貸出統計から算出した一日あたりの取り寄せ冊数予測3.33冊とほぼ一致した実績となっている。対象資料が単行書中心であるために、利用は取り寄せに限定し、一日一回の宅急便で行っている。原則毎日午後3時(土曜日は午後2時)までのリクエストは、翌々開館日の朝一番から利用できるという運用である。利用が済んだものは、二週に一度まとめて返却されている。

現地でセンターを預かるのは、書庫管理のベテラン達である。痛んだラベルの張り替えや、若干の補修や清掃なども手掛けられており、移管以来の蔵書の整備も着々と進んでいる。この7月に久方振りに書庫を訪れた私は、息を吹きかえしたような蔵書達の表情に目をみはってしまった。相対湿度55%・温度20℃という「IFLAの資料保存の法則」に照らしても理想的な温湿度を24時間維持する環境管理は、単なる保存スペース以上の意味を持っており、酸性劣化している資料が相当数含まれている移管資料群を、後世のために少しでも永らえる手だてにもなっているのである。

3. 書庫管理ということ

書庫管理は、増え続ける蔵書との永遠の闘いである。資料の除籍、あるいは形態的圧縮が行われない限り、増え続ける蔵書(三田だけでも年間5万冊余)は既存のスペースを日一日と浸食していく。極端な話、そうした勢いに任せていれば、キャンパスは本で埋めつくされるであろう。これは自明の理である。しかし、研究資料は大学の重要な要素ではあるが、決して全てではない。そこで講じられた対策が、全地区共同の「保存書庫」の運用であった。これにより、ここ暫くは、それぞれの収容限界を越えた分の資料の移管を繰り返すことが、我々、書庫管理に責任を持つ者の「宿命」となったのである。

一方、我々の日常的な書庫管理の中の大きな要

素に「書庫移動」という極めて労働集約的作業がある。これは、新刊書のための配架スペースを予め確保しておく作業である。つまり、必要に応じて、大きなまとまりとして書架上を移動させ、各所に余裕を作つておく作業である。しかし、書架の余裕がなくなり始めると、こうした作業の規模が小さくなり、頻度が増し、更には、しにくくなる。その結果、次のような状況がだんだんと散見されるようになる。
①無理な配架（本をギュウギュウ棚に押し込み壊してしまう）
②書庫上の飛び地（探すため番号順に追つていったら、あるところから別のブロックに移つてしまつて探しにくい）
③天板上の配架（取りにくく更には地震があつたら危険）
④床へ横積み（責任を持ち得ない管理状況）
それに従い、配架効率も、更には利用効率も落ちてくる。現物へのアクセシビリティを満足に確保できないという、図書館機能の終焉を思わせる未期的状況である。こうした書庫管理上の限界となる書架占有率を K.D.Metcalf は 86% とした。ちなみに三田の場合は今年度末に第二次山中移管が行われたとしても 88.4% になるにすぎない。まさに図書館・利用者双方にとって憂うべき数字である。

4. 課題

こうした状況を踏まえ、今後の蔵書管理の課題として、次の三点を指摘したい。

まず第一に、我々はこの第二次山中移管を予定通り行わねばならないと考える。移管そのものについては、様々な意見があるものと思われるが、義塾の将来計画の一環として決定されている事項であることが理解されねばならない。また移管資料の選択については、利用統計等の数量的な要素や、一般的な利用方法を考慮した形態的な視点で「案」を作成しているが、これは全ての利用者の個別要求を満たそうとした場合の混乱を避けるためである。なぜならば、こうした混乱は成案不可を意味し、成案不可は三田における図書館機能の終焉をもたらすことにつながるからである。

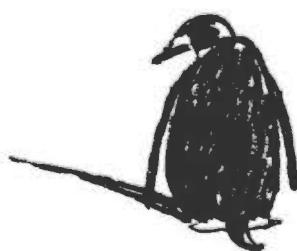
第二に、一刻も早く次ぎなる「保存書庫」計画

が必要であるということである。占有率 100% を基準に満杯を認定するのは、明らかに誤りである。上記の 88.4% の数字は、書架管理上の限界を示している。このままでは第二次移管後でさえも、三田には効率的な書庫管理を可能にするだけの書架スペースは生まれようもない。

最後に、選書に当たっては、「自館で所蔵する」という意味を十分に考える必要があるということである。早稲田にもある雑誌のバックナンバーを慶應でも購入するということは、そのスペース分の何かを遠隔地に移管することを意味するのである。手の届くところに置けるものは限られているという認識、更には今後の蔵書管理は図書館相互の協力体制を前提とした「相互依存」なくしては考え難いという認識を、選書にあたる全ての図書館員、教員諸氏が、肝に命じて持つ必要がある。野放図な選書を放任することは、「終焉」を近くすることを意味するのである。

5. おわりに

マルチメディアの時代になっても、書籍の量は減る気配すらない。かつて人類の偉大なる発明であった「本」というメディアは、その“雄々しき実態”がゆえに、今や我々の重荷となっている。しかし大学の研究が過去を捨て去らない限り、我々はこの重荷を永遠に背負い続けることになるであろう。我々にとっての唯一の望み、それは全面的なメディア変換。しかし、変換した後の現物保存の必要性は？ CD-R の保存有効期間は？ 等々。解決すべき問題も多い。ともあれ、そんな時代が来るかどうか、今予測は難しい。



<スタッフルーム>

ある夏の日

かく だ ひろ こ
角 田 浩 子

'95年夏。今年の夏は世間の予想を大きくはずして晴天続き、「暑い」のである。私はどちらかというと「冬派」であるため「暑い夏」は苦手としている。そこで……「そうだ！高原の湖畔で涼しく休暇を過ごそう」。思いたらもう、自宅から約1時間の山中湖に車を走らせていた。

御殿場から東富士五湖道路に入り、トンネルを抜ければもうそこは別天地。きらきらと水面が反射して心地よい風がそよいでいる。その風にのってディンギーやウインドサーフィンのセールが涼しげに湖を滑っている……。そんな光景を横目で眺めつつ、賑やかな通りを過ぎ、林のなかの別荘地をしばらく行くと山中湖コテージが現れた。このウッディーな感じがまわりの景色にマッチしていて「湖畔のリゾート」の雰囲気を盛り上げている。

さあ、昼食は御殿場の「二の岡ハム」で買った生ハムと高原野菜、「小麦粉屋」の自家製パンでオープンサンドにしよう！と支度を始めたところへ、なぜか職場のMさんが現れた。今頃は扇風機の回る図書館で仕事中のはずでは……？ すると、彼女は「やだなぁー、昨日から山中資料センターに出張に来てるんじゃありませんか。」あ、そうか。蔵書でもうすぐは切れそうな理工学メディアセンターから年代の古い資料をこちらの保存書庫へ移動してきたのだった。

思えば今年の3月から蔵書点検を行い、それから何回も検討や計算を重ねて、やっとここまでこぎつけたのだ。KOSMOSが稼働して以来、カレントもののタイトルを重点的に入力・整備してきたが、この山中移動計画とともに必然的に移動対象の資料をすべてKOSMOSに入力し、端末から検索できるようにしなければならなくなってしまった。理工学メディアセンターには1958年～1979年に日本科学技術情報セ

ンターから寄贈された雑誌が約6万冊あるが、今回の移動対象となっているものの中にかなり含まれている。そのなかにはKOSMOSや学術情報センターに書誌のないものがあり、それを作つて所蔵データを登録しなければならなかったのだ。

また、限られたスペースを有効に利用するため、前年に移動された医学メディアセンターの雑誌と理工学メディアセンターの移動対象の雑誌で重複しているものがないかのチェックも行われた。それから、春の蔵書点検で問題になったタイトル（データはあるが現物は無いなど）は、あらゆる可能性から検索され意外な場所から発見されたりもした。地下へ古い資料を取りに行き、登録・整備をしてまた地下へ戻す、そんな日々が続いた。

そんなある日、山中移動に関する研究者対象のアンケートが返ってきた。利用頻度の高いものや是非このタイトルだけは……というものは、移動対象年代にかかっているものでも、例外として矢上に残すのだ。（行くものと残るもの、それも皆運命なのだろうか……）

いろんな経過のあと、晴れて山中に移動してきた資料たちは、空調設備の整った快適な書庫で文献複写や現物利用の出番がくるのを今か今かと待っている。そんな彼らの様子を見学に来ていたのだった。

では、そろそろおなかも空いたし一緒にランチタイムにしましょうか。ここのハム、なかなかいけるんですよ。いっただきまーす……。

と思ったら朝だった。空はさわやかな秋晴れだ。実際の山中移動はまだまだこれから作業が続くが、今日も一日がんばろう。

（理工学メディアセンター）



材料化学分野の情報検索

—米国留学の体験を通じて—

いそ べ てつ ひこ
磯 部 徹 彦

(理工学部専任講師)

1. はじめに

私の研究分野である材料化学は、特に最近、化学、物理、電気などの学問分野の境界領域が不明瞭になり、異分野間の交流が活発化しています。このような相互の情報交換や共同研究は新しい発想にも通じることから、今後ますます重要なことは言うまでもありません。(このような思想は理工学部改組の中にも反映されていることから、その重要性は多くの方が感じておられることうと思います。) しかしながら、異分野間で交流する際に予期せぬコミュニケーション不一致が生じることがあります。例えば、同一の専門用語の意味が分野によって微妙に異なったり、あるいは、その分野特有の専門用語が存在することがあるからです。このような障害を乗り越えるために、少なくともコミュニケーションできる程度にお互いの分野を知り、異なる点をお互いに認識し合うことが必須の課題です。私はこのような点に特に気を配りながら研究を進めて参りましたが、1993年9月から1994年8月までのアメリカ合衆国テネシー州 Vanderbilt 大学での留学経験を通して、より一層異分野間の交流の重要性を再認識いたしました。この間、私はこれまで研究してきた微粉体の化学とは異なるイオン注入に関する研究に携わりました。イオン注入の技術は半導体分野で大きな成功を収めていますが、新材料開発という観点から見ると、これからの分野と言えます。そして、この分野の研究者の多くの方は物理の出身です。化学出身の私は少なからず、物理の世界を知ることを余儀なくされました。この誌面では、これまでの私自身の情報収集と米国滞在中の体験から、異分野間のアプローチに必要な情報をどのように入手したらよいかを考える一方で、慶應義塾

大学のメディアセンターで有効な情報検索を実現化するために今後改善しなければならない点をまとめてみたいと思います。

2. 基礎的知識の入手

材料化学の研究は、少なくとも(1)材料の合成方法、(2)材料の組成や構造などの分析、(3)電気的、磁気的や光学的な特性評価に分類できますが、(3)を議論するには、当然(1)や(2)の議論も必要です。このため、化学、物理、電気などのバックグラウンドを持つ研究者がそれぞれの立場から特徴を持った研究を発表しています。したがって、お決まりの学術雑誌を見ているだけではお互いの情報交換はできません。このように、材料化学の分野では発表される雑誌が多岐にわたるため、情報検索はとても重要なことです。

情報検索の種類は基礎的知識と最新情報の入手とに大別できます。基礎的知識入手する方法は、一つは書籍を、もう一つは雑誌の総説 (review) を探すことです。どの図書館もある程度分野ごとに書籍は分類されていますが、Vanderbilt 大学の図書館を利用し始めたときに、慣れていないのでどの分野のどのような内容の本がどこに置かれているのかを把握するのに多少の感いました。おそらく、慶應義塾大学の留学生や卒業論文に着手し始めた4年生も同様な胸中にあるのかと思います。また、矢上の図書館でも数年前に、大幅な図書の移動があり、いつもの場所に本がなくなってしまい困ったことが思い出されます。しかし、Vanderbilt 大学の図書館にはデータベースをコンピュータで検索できるサービスがあることがわかり、上記の問題は簡単に解消されました。A4 版 2 ページにまとめられた簡便なガイドを参考に

しながら、複数の Key words を組み合わせて書籍の検索が初心者でもすぐにできます。とかく、日本ではこの種のマニュアルが長々と書かれて使いづらいものですが、このガイドは実際に利用する人の立場から作成されており、必要な command が実例を挙げて記述されているのが特徴です。このようなガイドは情報検索だけに留まらず、e-mail の利用方法をはじめ、数十種類ものガイドが無償で提供されていたのにはたいへん驚きました。

もう一つ便利なサービスは、自分のパソコンを使って電話回線を通じて24時間どこからでもデータベースを利用できることです。米国では local phone 料金は基本料金を支払えば、通話ごとに全く加算されないので、このサービスは事実上、無償で提供されているのに等しいのです。しかも、通信に必要なアプリケーションソフトも学内で free で提供されています。理工学部の図書館でも本の名前や著者からの検索ができるようですが、これではまだまだ不十分だと思います。しかし、書籍の Key words のデータベースを作成することはメディアセンターの職員の方の努力だけではかなり困難があり、今後の重要な課題になると思われます。私自身の今までの図書の利用を振り返りますと、図書館が所蔵している書籍よりも学術雑誌や会議録の方をずっと着目して調べていたと思いますが、上記のようなデータベースの検索が可能になれば、かなり状況は変化すると思われます。ただし、洋書の所蔵数が若干少ないので気になります。学部教育の立場からは和書も大切なのですが、研究機関としての立場から考えると質の良い洋書をもっと所蔵すべきではないでしょうか？もう一つの可能性は、研究者間の相互協力の一貫として、各研究室で所蔵している書籍もデータベースとして利用できないでしょうか？

次に、私が行っている総説の入手方法についてお話ししたいと思います。帰国後よく利用しているのですが、Chemical Abstracts（以下 CA と省略）のオンライン検索で、document type を general review に限定して調べることができます。CA の冊子体を見ても、番号の後にさらに R という文字が余分に表示されていますので、総説

を見つけることができます。CA の利用方法について次節でもう少し詳しくご説明したいと思います。もし、目的の研究分野で著名な研究者の名前がわかっているときには、Author Index を利用しても有効でしょう。また、review だけを専門に記載している Journal もあります。

3. 最新情報の入手

私は以前から種々の分野の情報を主に CA のオンライン検索から入手しています。最近、理工学メディアセンターにも設置されましたが、CD-ROM で供給されている種々の情報が検索可能になりました。Vanderbilt 大学でもすでに同様なサービスがあり、帰国後徐々に米国に近い環境が整備されてきていることを個人的にとてもうれしく思っております。しかしながら、いくら便利になっても、コンピュータを利用した検索には課題が残ります。それは、どのような Key words を用いたらよいかということです。どのようなテーマの時に冊子体またはコンピュータのどちらを利用して検索したらよいか？この判断には多少経験が必要です。米国滞在中、かなり CA の冊子体を手にして調べましたが、この時どのような Key words が適切なのかが冊子体を見ながら、徐々にわかってくることを再認識いたしました。このため、検索経験の少ない学生は、時間がかかるかも CA の冊子体を利用して、次にコンピュータによる情報検索も行って両者を比較してみることが必要でしょう。

4. 情報検索以外のサービス

情報検索とは内容が異なるのですが、Vanderbilt 大学の図書館利用に関して、よい点、悪い点を下記にまとめてみました。何かの際、今後の参考にしていただけたら幸いです。

よい点

(1) 利用時間：week day は midnight まで、日曜日も noon から midnight まで開館している。

(2) 貸出期間：1年間（ただし、他に利用者が現れると返却するように連絡がくる）。

(3) 個人机：狭いスペースを利用して、ついたてのある小さな個人机が多数置かれている。大きなテーブルはガラスで仕切られた部屋に置かれており、したがって、その中でグループで討論しても声が外に漏れない。このため、館内は際だって静肅。

(4) Faculty の家族へのサービス：家族も図書館を利用できる。

悪い点

(1) 学術雑誌の配列：雑誌が記号順に配列されていたが、アルファベット順に整頓されている方が探しやすい。

(2) 取り出した図書の返却の不必要：本棚から取り出した本や雑誌を元に戻さないでよいのだが、利用したい本が見つからないことがある。また、本が乱雑に扱われる可能性がある。

(3) Microfiche：一部の雑誌は Microfiche で提供されていたが、多くの学生が不慣れで、トラブルも多いため、痛みもかなりあった。

5. まとめ

近年、情報検索のハードおよびソフトは目まぐるしく変化し、ますます便利になることは疑いありません。しかしながら、データベースを利用した情報検索にも限界があります。人間と人間のコミュニケーションを忘れてはならないと思います。すなわち、学会などで研究に携わっている専門の研究者の講演を聴いたり、あるいは、直接会話することはもっとも大切でしかも手軽な情報収集の手段であるからです。豊富な人脈を持つことは情報検索の面から考えても大切です。このような立場から、よりよいメディアセンターを築くために、今後もメディアセンターの方々とコミュニケーションを緊密化し、協力していきたいと思います。

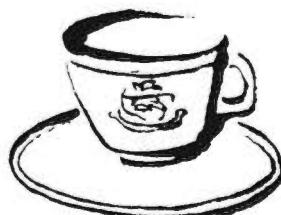
ケーションを緊密化し、協力していきたいと思います。

VANDERBILT UNIVERSITY

Libraries



Vanderbilt 大学図書館のパンフレット



日吉メディアセンター利用実態調査報告 —専任教員へのアンケートを利用して—

たけまさつね
武正恒

(日吉メディアセンター課長)

メディアネット（センター）が発足して1年半が経過した平成6年10月、新たな理念に基づくサービスの展開を模索していた日吉メディアセンターは、まず、利用者がセンターの現在のサービスをどう評価し、将来に何を期待しているのかを知ることが基本と考え、利用実態調査を行いその結果を翌年1月に公表した。

1. アンケートの構成と回答状況

図書館、計算室がすでに実施しているサービスの利用度に関する質問と、センターが提供すべきと思われる機能・サービスについての評価を問う質問の2部構成となっている。日吉地区の専任教員全員を対象にメールボックスを通じて配布、回収に努めたが226人中、42人からの回答にとどまった。（回答率：18.6%）

2-1. 貸出サービスについて

研究室資料を別として、図書館の貸出条件は学生と同等（教員を特に優遇しない）というルールは、回答者の半数の支持を得た。図書館資料は学生優先との認識が、ある程度定着しているようだ。

2-2. 蔵書構成について

研究室の蔵書構成について、「不満」が約半数を占め、専門書が不足しているので三田や矢上を利用するとのコメントが多い。図書館蔵書が教員の専門分野をカバーしていない、という日吉の特性も影響したと思われる。OPACデータの充実と塾内ILLの活用が望まれる。

学生蔵書に関する意識調査では、「基本書の充実」「講義で指示した資料の利用」が高い支持を得、「洋書の充実」「日吉の特徴反映」「積極的な除籍」などの項目が低かった。

2-3. レファレンスサービスについて

回答率もコメントの数も、関心と期待の高さ

を反映している。利用するサービスとして「文献調査」「相互貸借」が上位を占めたが、今後はCD-ROMやネットワークを通じた「データベース検索サービス」が急激に伸びるであろう。

2-4. OPACについて

OPAC端末の操作法の説明を求める意見が大変多い。また、研究室から利用できない、応答時間がかかりすぎる、収録範囲を明確に、など多数のコメントが寄せられ、移行期の感いとセンターの対応への苛立ちが読み取れる。

2-5. パソコン・ワークステーションについて

回答者の43%が現に使っており、36%の人が将来使う可能性があるが、授業での利用は未だ少ないと結果であった。授業で利用するには、環境の整備を充分に行う必要があることが、強く指摘されている。

2-6. ネットワークの利用について

現在利用している、との回答は少ないが、ネットワークの拡充と使いやすい環境を整備する事に多くの意見が寄せられた。利用の目的は、「他大学のデータベース検索」「電子メール」「論文投稿」という順であった。

3. まとめ

アンケートの分析から、メディアセンターが今後サービスを展開するにあたり留意すべき二つの重要な示唆が得られる。

ひとつは、計算機をベースとするサービスには多様な要求に応えられるハード、ソフト両面の整備と、利用法の懇切な説明が欠かせないことである。幸い、ハード面ではネットワーク、パソコン教室の多様化など一部はすでに着手されている。

二つめは、既存、新規を問わずサービスはその対象となる利用者の理解と共感を得られなければ、提供する側の独りよがりにしかならないということである。

センターでは、サービス内容に関する疑義・要望に対し理解を得るべく、出来る限りの説明を付して集計報告書を全専任教員に送付した。また、今後も同様の努力を行う所存である。

学生スタッフから見たメディアセンター

学生スタッフから見た メディアセンター

学生スタッフに関する調査

吉沢 亜季子
(メディアネット編集会議)

1. はじめに

メディアセンターでは、多くの学生スタッフが働いている。その業務内容は様々だが、各地区ともメディアセンターの運営に多大な貢献をしている。学生（利用者）であり、かつ、大学で学生ス

タッフとして働く彼らが、日頃どのような事を感じているのかレポートしてみる。

2. 各地区学生スタッフ業務調査

各地区 MediaNet 編集員が下記の項目で調査した。尚、この調査は1995年9月現在のものである。

所属部署

- 1) 学生スタッフ名称
- 2) 人数
- 3) 大学内・外
- 4) 雇用体系
- 5) 勤務日数
- 6) 勤務時間
- 7) 業務内容

三 田

A. 資料サービス担当（閲覧）

- 1) 学生嘱託(昼) (夜) (非常勤)
- 2) 8名 5名 3名
- 3) 大学外 大学内(3) 大学内 大学外(2)
- 4) 常勤嘱託 常勤嘱託 非常勤嘱託
- 5) 毎日 毎日 週3日
- 6) 8:30-16:30 15:00-21:00 15:00-21:00
- 7) 配架、修理、装備、カウンター、書庫移動、出納、ILL

B. 資料マネジメント担当（目録）

- 1) 学生アシスタント
- 2) 14名
- 3) 大学内
- 4) アルバイト
- 5) 週5時間以上
- 6) 9:00-18:00 の間で1時間以上
- 7) 学情検索、カードコピー、副本、ファイリング、所蔵入力、雑誌配架

C. 情報メディアサービス担当（レファレンス）

- 1) CD-ROM アシスタント
- 2) 10名

3) 大学内（院生）

- 4) アルバイト
- 5) 週2-3日
- 6) 13:00-16:30 の間で週5-6時間
- 7) CD-ROM・データベースの利用指導、相談

D. 情報システムサービス担当（計算室）

- 1) プログラム相談員
- 2) 13名
- 3) 大学内
- 4) アルバイト
- 5) 平均週2日
- 6) 2時間-5時間
- 7) 計算機利用相談

日 吉

A. 資料サービス担当（閲覧・雑誌）

- 1) 学生嘱託(昼) (夜) (非常勤)
- 2) 2名 3名 4名
- 3) 大学外 大学内 大学内
- 4) 常勤嘱託 常勤嘱託 非常勤嘱託
- 5) 毎日 毎日 週3日
- 6) 8:30-16:30 16:00-21:00 16:00-21:00
- 7) 配架、カウンターは共通

----- 学生スタッフから見たメディアセンター -----

- 昼 -ILL, 機器管理, 雑誌チェックイン, 製本,
ライブライナー・オリエンテーション
夜 - 装備, 修理, 書庫移動, 監督, CD-ROM 指導
- A. 資料サービス担当 (閲覧)
- 1) シェルフ・アルバイト
 - 2) 4名
 - 3) 大学内
 - 4) アルバイト
 - 5) 週約7時間
 - 6) 授業の合間をみて勤務
 - 7) シェルフ・リーディング
- 4名のうち3名はOPAC指導員を兼務
- B. 情報システムサービス担当 (計算室)
- 1) プログラム相談員
 - 2) 21名
 - 3) 大学内・外 (院生・学部生)
 - 4) アルバイト
 - 5) 週1日程度
 - 6) 10:00-18:00 の間で3-4時間程度
 - 7) 計算機利用相談
- C. 情報システムサービス担当 (計算室)
- 1) シェルフ・アルバイト
 - 2) 3名
 - 3) 大学内
 - 4) アルバイト
 - 5) 週8-10時間
 - 6) 授業の合間をみて勤務
 - 7) シェルフ・リーディング
- D. 情報システムサービス担当 (計算室)
- 1) 学生嘱託 (常勤) (非常勤)
 - 2) 1名
 - 3) 大学外
 - 4) 常勤嘱託
 - 5) 毎日
 - 6) 8:30-16:30
 - 7) (常勤) 情報システムサービス業務全般
(非常勤) 全塾ネットワークに関わる業務 (NTG)

NTG: Network Technology Group

理 工 学

- A. 資料サービス担当 (閲覧)
- 1) 学生嘱託 (昼)
 - 2) 1名
 - 3) 大学外
 - 4) 常勤嘱託
 - 5) 毎日
 - 6) 8:30-16:00
 - 7) 外部複写全般
- B. 資料サービス担当 (閲覧)
- 1) 学生嘱託 (夜) 学生アルバイト
 - 2) 2名 3名
 - 3) 大学内 大学内
 - 4) 非常勤嘱託 アルバイト
 - 5) 週3日 週1-2日
 - 6) 17:00-21:00 16:30-19:00
 - 7) カウンター
- C. シェルフ・アルバイト (閲覧)
- 1) 学生アルバイト

医 学

- A. 資料サービス担当 (閲覧)
- 1) 学生嘱託 (昼) 夜間臨時職員
 - 2) 6名 5名
 - 3) 大学外 大学内・外
 - 4) 常勤嘱託 アルバイト
 - 5) 毎日 週3日
 - 6) 8:30-16:30 16:15-21:15
 - 7) 配架, カウンター, 複写, ILL
- B. 情報システムサービス担当 (計算室)
- 1) プログラム相談員
 - 2) 2名
 - 3) 大学内 (院生)
 - 4) アルバイト
 - 5) 週1日 (月10時間)
 - 6) 10:00-12:30 か 13:00-15:30

学生スタッフから見たメディアセンター

7) 計算機利用相談（主に統計ソフト SAS）

湘南藤沢

- A. 情報メディアサービス担当（レファレンス）
- 1) DB コンサルタント
 - 2) 18名
 - 3) 大学内院生(2) 学部生(16)
 - 4) アルバイト
 - 5) 週2-3日
 - 6) 9:15-23:00 の間で2-3時間
 - 7) CD-ROM, データベースについての利用相談

- B. 情報メディアサービス担当（AV 担当）
- 1) AV コンサルタント
 - 2) 16名
 - 3) 大学内
 - 4) アルバイト
 - 5) 週2-3日
 - 6) 9:15-23:00 の間で2-3時間
 - 7) AV 機器の貸出, 相談

- C. 情報システムサービス担当（計算室）
- 1) CNS コンサルタント
 - 2) 14名
 - 3) 大学内
 - 4) アルバイト
 - 5) 週2-3日
 - 6) 9:15-23:00 の間で2-3時間
 - 7) CNS 使用についての相談

CNS: Campus Network System

- D. 情報システムサービス担当（計算室）
- 1) MAC コンサルタント
 - 2) 15名
 - 3) 大学内
 - 4) アルバイト
 - 5) 週2-3日
 - 6) 9:15-23:00 の間で2-3時間
 - 7) MAC についての相談, コピーサービス

学生嘱託という経験

佐野卓哉

（文学部人間関係学科人間科学専攻）
（三田メディアセンター学生嘱託）

「大学の図書館で働いている」というと、困惑したような感心したような不思議な顔をされる時がある。こう言うと語弊があるのだが、図書館で（しかも自分の大学の図書館で）働くということは、多くの学生にとってそれほど魅力のあるアルバイトには思えないようだ。そもそも授業でさえ出ないので、何を好きこのんで大学に来るか、というのが本当のところだろう。

そういう私は、大学一年の時から学生嘱託として図書館で働いている。図書館という場所は好きだけれども、特に愛熱心に満ち満ちているといった訳でもないし、図書を目指しているわけでもない。たまたま長く続けてしまったという感じである。たまたま？ それでも自分の大学で働くというのは面白い経験だったと思う。

現在三田で働いている学生嘱託は昼間と夜、それから三階、四階の担当合わせて16名。それぞれ仕事内容は少しづつ違うのだが、自分がやっている夜間の学生嘱託の仕事は、夜のカウンターでの応対が主になる。

最初のうちは覚えることが多くて大変だった。閲覧業務の他に雑誌室の夜のカウンターや図書館のカウンターにも入らねばならず、よく頭が混乱したものである。仕方ないので自分で利用案内のファイルを作って持ち歩いたりした。

なにしろ学生が学生の対応をするので行き届かないことが多い。時々「何だコイツ」みたいな顔をされることもある。しかし、学生というものを客観的に見る経験はなかなか出来ない。最近の学生はよく群れたがると言われるが、閉館だというのにグループ学習室でいつまでもゾロゾロ、ノロノロしている醜態を見ていると確かにそうだなと自分でも思ってしまう。しかし、時には感心する

こともある。

夜の三階のカウンターに入っている時に、学生が自分たちでゼミの後輩達に資料の使い方を教えている場面に会った。経済や法律のゼミによつては、春学期の始めに先輩の学年が後輩に雑誌室等の利用の仕方を教えるのが伝統となつたようだ。そういう風に積極的に図書館を利用してもらえるとこちらも嬉しくなる。しかしこれは、ひょっとしたら夜間に入っている職員（すなわち我々夜間学嘱）があまりに頼りないため、自分たちで指導する事にしたのかもしれないのだが……。



もう一つの私たちの仕事としては、日々返却されてくる本の配架がある。最近は滞貨の洋書が大量に回ってきてその処理に追われている。自分たちで配架しているだけあって、書庫が手狭になってきているという事

実は如実に感じている。何とかならないものかと思うが、考えてみればそれだけ豊富な資料を慶應は持っているということだ。やはりこれはすごいことなのだろう。

そもそも図書館というと本に囲まれて仕事をするという印象が強いようだが、最近はそうでもない。電子メディアの発達で図書館が扱う資料でも、フロッピーや CD-ROM などが入り込んできた。こういう新しいメディアが増えたければ、自分たち学生嘱託も要求されることがますます大きくなるわけで、どこまで答えられるか少し不安な面もある。例えば今や CD-ROM を使った検索は必須の技法に近い。自分はメディアネットの立ち上げや KOSMOS への移行といった図書館の新

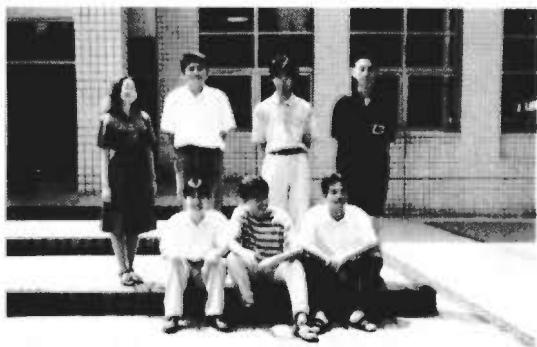
たな情報化の波を見てきただけあって特にそう感じる。最新の情報環境に触れることが出来る。そんなこともこの仕事の魅力の一つなのかもしれない。

仕事と、勉強と……

片桐 啓

(法学部政治学科2年
(日吉メディアセンター学生嘱託)

入学式の翌日からですから、もう1年以上も仕事を続けていることになりますが、やはり一番の問題は勉強と仕事の両立という点にあります。授業終了後10分ほどでカウンターに入って仕事をしなければならないということも多く、頭の切り替えに苦労します。そのうえ、図書館は試験が近づくと非常に忙しくなるため、自分の試験の準備をしている暇など無いほど忙しくなってしまい、そのうえいつも以上に疲れるので帰宅後勉強することもできないという悲惨な状況になります。しかし、テストは一般の学生と同様に行われるわけで、日頃それなりに準備しておかないと、追い込みのきかない学生嘱託は大変な結果になるわけです。



常勤嘱託になると、家、教室、図書館を回る生活が続き、サークルに所属することも不可能になるため、人脈も少くなり、より一層試験対策は難しさを増します。これに試験週間につきものの

学生スタッフから見たメディアセンター

あの図書館のうるささと、コピー機のトラブルまで重なった日には泣きっ面に蜂で、救いようがない状況です。言い訳がましいですが、私は翌日に大事な語学のテストがあるというのに、ほとんど勉強もせずに机で寝ていたことが2度ほどありました。(フォローのために言っておきますが、日吉図書館の場合、私以外の2人の常勤は勉強家ですから、おそらく私のようなことはないでしょう。たぶん。)

テスト週間以外はさほどきつい仕事ではないですが、楽な仕事とも言えません。特に常勤は毎日出ることになるわけで(だから常勤なのですが)これは結構プレッシャーです。夜間の学生嘱託は最後に図書館の戸締まりをして帰るのですが、自分が1年間ほとんど毎日図書館の戸締まりをしていたのかと振り返って考えると、かなり感動的なものがあります。平日の閉館は9時ですから、毎日明るいうちには帰れないわけです。この事だけでもそれなりに大変だと私自身は思います。

私たち夜間の学生嘱託は、専任職員が業務を終えた4時半以降のカウンター業務を中心に仕事をしています。そのため、原則として4時半以降はしないことになっている業務というのもいくつかあるので、必然的に様々な場面で「断る」必要が出てくるわけです。この「断る」という作業はある意味でカウンター業務の中でも一番難しい部類にはいるのではないかと私は思います。

「その業務は4時半までしかやっていないから明日また来て欲しい」といえば良いのですが、それだけで納得する人はそれほどいません。夜に来る人は、昼間は忙しくて来られなかったとか、レポート提出が翌朝に迫っているとか、何らかの訳がある人が多くて、ちょっとやそっとじゃ引き下がらないわけです。丁寧にお断りして、できる範囲で代わりになるものを探したり、翌朝一番に対応できるように約束したりと、大変です。

また、カウンターに入って業務をしている以上、うるさい人には「静かにして下さい」と、何か問題があることをしている人がいれば「やめて下さい」と注意をしなければなりません。しか

し、やはり私たちは「学生」なので、権威とか権力、つまり「あの人の言っていることに従わないと何かやばいことになりそうだ」という雰囲気があまり感じられないのだと思います。なかなか効果がありません。もちろん、図書館という場はもともと権威や権力などには無縁の場所ですから、そのようなものが無くても秩序が維持されるべきなのでしょう。でもあのテスト週間のうるささは何とかしてほしいものです。

仕事をしていて一番うれしいのは、利用者に何か教えて、それが的確にわかつてもらえて、利用者が何かをうまく見つけられたりしたときでしょう。先日、授業中に「この前はありがとうございました。職員の方なのに何で授業に出されているんですか?勉強ですか?」と聞かれて吹き出していました。「勉強です」と答えておきました。

もう一つうれしいのは、毎日仕事をしているおかげで良い収人があり、それで様々な体験ができることです。今年の夏は休暇を長くいただいてフランスへ語学研修に行きました。仕事をしていなければこんな経験は得られなかったでしょう。

コンサルタント!? そして未来は?

むろ た のり よし
室 田 典 良

〔総合政策学部3年
湘南藤沢メディアセンター
CNSコンサルタント〕

「すいませーん、コンピュータが……?」という声とともに私の仕事が始まりました。慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの中央に位置するメディアセンター1階でコンピュータの学生コンサルタントを始めてからこの夏でもう1年半になります。

ここに来るお客様は様々で、その質問も当然多岐に渡ります。時には、どうしても答えることができずに、謝ることもありました。そんな事を繰り返しながら1年半ずっと仕事を続けてきました。

た。ここにいたおかげで、色々なことを勉強できたり、素晴らしい友人もできました。私が思うにここで、コンピュータ系に関わる人達は共通して「未知の面白い事を知りたい」という気持ちが凄く強いと思います。また誰かが知っている事を皆で共有して知識を補っていこうという考え方は、電子ニュースやBBSを見ていても感じますが、このようなコンサルタントの場でもそれを感じます。私がずっとここでやってきた理由もその辺りが大きなウエイトを占めているのではないかと思います。



よくここに来た学生から、「ちょっと恐くて質問しにくい」とか、「こんなことを聞いたら馬鹿にされるんじゃないかと思ってました」という声を聞きます。確かに、近寄りにくい雰囲気があるとは思いますが、そんなことは気にしないで分からなきがあれば、自由に来て欲しいと思います。しかし最近はシステムや施設が充実した分、質問の内容もより高度に、より広い範囲に渡るようになってきました。自分達も勉強はしていますが、全てのことに関して完全な知識を持つことはできないのが現状です。私達もできる限りのサポートはしますが、ここに来る学生には、というよりネットワークの世界でコンピュータを触っているのなら、ただ周りの人間に聞くだけでなく、自分達で問題を解決する方法も身に付けて欲しいと思います。

さて、最後に私が考えたちょっと先の未来の予想図を話してみたいと思います。

「あっ、ごめんコンサルタントに行かなきゃ

!!」私は友達と別れて、センターの1階にあるコンサルタント用のスペースに向かって歩き出しました。前の担当者と交替して、ワークステーションにログインしました。早速メールをチェックしながら座っていると、いきなりウインドウの1つがテレビ電話に切り替わり、自宅にいる学生から外線で質問がとびこんできました。質問内容は、モデムの接続がうまくいかないということだったので、モデムの接続方法と接続図を書いて相手に送信し、コネクションを切りました。

切ったと同時に今度は、学内の端末から別のユーザーが質問をしてきました。その質問に答え終って、コンサルタント用のメッセージボックスをチェックすると、1台の印刷機が故障し、2台の印刷機に紙がないという情報が送られてきました。慌ててそれに対処して、やっとひと息つきました。なんで今日はこんなに忙しいのかと思ったら、そろそろレポートの時期なのだということを思い出しました。

まあこんな風になるには、まだまだ時間がかかると思いますが、このようなシステムが、いつの日かできるといいですね！

「あのー、ちょっといいですか？」おっと、またお客様が来てしまったようなので、この辺で話を終りたいと思います。

それでは。

プログラム相談員の仕事

せき ぐち ひで き
関 口 英 樹

(商学部4年
(三田メディアセンタープログラム相談員)

三田計算室のプログラム相談員は95年前期で13人います。所属しているキャンパスは三田だけではなく、日吉、藤沢、矢上と様々です。今回は、代表して私がプログラム相談員の仕事の紹介をします。

三田計算室でのプログラム相談員の仕事は、ま

学生スタッフから見たメディアセンター

ず第一に利用者からの質問に対応することです。以前は大型計算機に関することが質問の中心だったのですが、昨年大学院校舎の3階にパソコン室が開設され、そこからワークステーションにログインできるようになってから、パソコン（特にMS-WindowsとMS-Word, Lotus 1-2-3）、及びUNIXの電子メールやWWWに関する質問が増えて来ました。また、それまでパソコン室に常駐していたプログラム相談員が、地下の学生用のワークステーションを開放したスペースに常駐場所を変更したため、一層その傾向が強くなってきました。

しかしながら、利用者が一番多いパソコン室からプログラム相談員がいなくなったために、誰に相談してよいのかがわからず、計算室の受け付けにトラブルを持ち込んだ時に初めて「プログラム相談員の存在を知った」というケースがよくあります。しかも、各相談員が専門領域を持っているために、例えば大型計算機で利用するプログラムのことについて質問したかったとしても、その時間を担当している相談員がMS-Windows専門だったりすると、質問しても相手が全くわからない、ということもありうるのです。実は、昨年までは各相談員間の連絡方法がノートしかなかったため、連絡がうまくとれませんでしたが、昨年の終わりからメーリングリストを作成してもらい、連絡が昨年よりはうまくとれるようになっています。しかし、また後日再度来てもらう、ということは利用者にとっては大変不便なことでもあるので、改善していく必要があるとは思いますが、



ログラム相談員も自分の知識内で対応しているため、限界があると思います。しかしながら、利用者の中には我々より深い知識をお持ちの方もいるので、我々が答えられないケースがあると横から教えて下さる時もあります。こういう時は大変助かります；）

私達の仕事は質問の受付だけではなく、利用ガイドの作成なども行っています。たとえば、今年の春にワークステーションの交換を行った際には、使用するエディタが変更になり、それまで窓口で「電子メールの利用方法」として配布していた文書ではうまく利用することが出来なくなってしまった。そこで4月からの変更を前に、3月中に急拵新しいガイドを作るべく、春休み中にもかかわらず毎日大学に来て文章を書いていました。春休みをほとんど返上して書いた甲斐があり、4月のリプレイス後は、私の書いたガイドを参考にしながら電子メールを使っている姿がパソコン室に限らずあちこちで見受けられました。自分が書いたものをいろんな人が見て、さらにそれを頼りにしているというのはなんとなく恥ずかしい気もするのですが…。（#でも就職活動の際にはこの話をしたら結構先方にうけた（＾＾；）

後期もまた沢山のプログラム相談員が、大学院校舎の地下にいると思います。「プログラム相談受付中」という貼紙の下に座っている人達に、気軽に声をかけて下さい。お待ちしています。なお、ご質問は電子メールでも結構です。

E-mail: prg-consultant@cc.mita.keio.ac.jp

プログラム相談員の仕事と現状について

いし い ひで のり
石 井 秀 教

（理工学研究科計測工学専攻修士課程1年）
（日吉メディアセンタープログラム相談員）

日吉メディアセンターの計算室でプログラム相談員をしている石井と申します。私のプログラム相談員歴は1994年4月からで、現在足掛け1年半

というところです。本当はもっと経験豊富な方も数多くいるのですが、うかつにも原稿の依頼を了解してしまいましたので、私のような者がここに書くことになった次第です。

まず、プログラム相談員について、簡単に説明することにしましょう。プログラム相談員は、計算室のコンピューターの利用者が、何らかの障害や問題にあって困ったときに、文字符でおり相談に乗るのが仕事です。講義ではどうしても細かい使用法を教えるところまでは手が届かないのですが、その手が届かないところを相談によって補完するのがプログラム相談の意義です。基本的には、質問が来るのを待つという形になりますので、閑古鳥が鳴いているときに限っては座ってCDを聞いているだけでお金が頂ける非常においしいアルバイトであります（でも、いい日を見られる日はそれほどなかったりするのです）。

質問は時期によって変動しますが、講義の課題プログラムに関するものと、コンピューターの使用法に関するものに大きく分けられます。私は、前者の質問で困ることは余りないのですが、後者の質問には、情けないことに答えられないことがあります。これは日吉の計算室で利用可能なコンピューターの種類に、ワープステーション、DOSマシン、Macintosh、メインフレームがありますので、来る質問の範囲が広くなってしまうためです。更に今年度は、端末の環境がDOSからWindowsに変わってしまったので、DOSを使うことが多い私は戸惑うことが多いのです。基本的に学生は、講義で扱うマシンに関する質問をするので、講義をする先生方の話し合いなどで、機種を統一して下さると非常に助かるのですが。

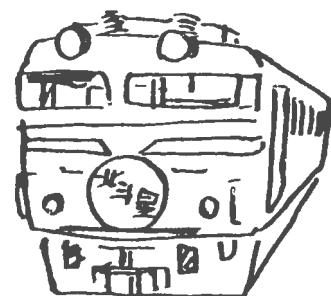
コンピューターの使用法に関しては、同じ質問が来ることが多いので、その質問と回答を残しておけば、かなり対応が行いやすくなります。現在も記録を採る努力はしているのですが、忙しいときは記録する暇がないことと、職員の方達とプログラム相談員しか見ることができないという欠点があります。できるだけ早く、良く来る質問とその解答を、利用者が検索しやすい形で文書化する

べきとは思いますが、ボランティアの仕事になってしまふので中々難しい面があるようです。

質問に来る学生には主に、
・何も分からずにレポート前に泣きついてくる人
・講義を聞いても使用法が良く分からぬ人
・プログラムの作り方が余り分からぬ人
・本を写して「これ動かないんです」という人
といったパターンがあります。まあ、最初と最後の範疇に入る人はともかくとして（応対はちゃんとやっていますよ！），他の人はちょっとかわいそうな気がします。「情報処理の講義はコンピューターの使用法を教えるためにあるのではない」というのは正論だとは思いますが、現在はコンピューターを殆ど触ったことのない人が講義を受けることが多いようなので、最初のうちだけでも使用法を丁寧に教えてくださるよう学生に代わってお願ひいたします。

この仕事をやっていて面白いと思うのは、顔馴染みの学生ができることです。どうも矢上にいると世間が狭くなる傾向があるのですが、こちらで日吉の若者（といっても私とそれほど歳は違っていないのですが……じじむさいなぁ）と話すのは一服の清涼剤になっていると思います。質問を聞きに来た人が、情報処理室を出るときに挨拶してくれることがあるのですが、これはとても気持ちが良いものです。

やや堅苦しい文章になってしまいましたが、プログラム相談員の現状を少しでも皆様方に理解して頂けることを祈りつつ、筆（キーボードかな？）を擱くことにします。



WWW を用いた利用案内

かね こ やす き
金 子 康 樹

(三田メディアセンター係主任)

1. はじめに

コンピュータをめぐる社会状況はここ数年で目まぐるしく変化し、コンピュータの誕生以来数十年の間主流を占めてきたホスト集中処理から、クライアント・サーバー方式を前提とした分散処理へと利用形態が移ってきている。こうした分散処理を現実的なものとして実現させた最も大きな推進要因は、ネットワークの進展である。インターネットの劇的な広がりは、図書館の世界にも大きな変革を与える結果となっている。筆者らは、こうしたインターネット上で現在主流となっているWWWを活用した図書館サービスとして、利用案内に注目し、ネットワークを通じた図書館からの情報提供について検討を行ってきた。幸いにして、平成6年度本塾学事振興資金を受けることができ理論的研究と実験システムを作ることができた。以下にその概要を報告する。

2. 利用案内のためのツールの検討

コンピュータを用いて、利用案内を構築するためのツール（ここでは、ソフトウェアという側面から考える）は、いくつか存在している。例を上げると、

- Macintosh 上で稼働する HyperCard
- Sun 上で稼働する日本語 FrameMaker
- 様々なプラットフォームで稼働する WWW

などがあげられる。これらのうち、HyperCardと、WWWについては、実際の利用案内の先行事例が存在している¹⁾²⁾³⁾。これら以外にも各種のツールが存在しているが、実験システムを構築する際の入手容易性を考慮し、上述3ソフトについて、比較検討を行った。比較の観点としては、

- a. 情報の発信性
- b. 世界的標準性
- c. 開発の容易性
- d. Human-Interface
- e. 将来の拡張性
- f. 開発コスト

などを挙げた。この結果、HyperCardについては、b, c, d, f などがすぐれており、日本語 FrameMakerについては、c, e, f の点で優れていると判断されたが、これらについて、WWWが総合的に最も適していると判断し、実験システムについては、WWWを前提として作成することとした。

3. 実験システムの構築

今回の実験システムの素材としたのは、三田メディアセンターの利用案内シリーズである。これを選択した大きな理由としては、既存の印刷媒体の原稿がすべてワープロ文書として作成されており、WWWで用いられる HTML に変換する際に、制御記号の埋め込みを行うだけですむ、ということがあげられる。後述するが、こうした利用案内システムを作るために、最も重要なのが、その内容となる文章の作成であり、今回は時間的制約を考慮した結果、既存の文章をそのまま流用することとした。構築の手順は以下の通りである。

- ① 全体構成の決定
- ② ワープロ文書からテキストファイルへの変換
- ③ テキストファイルの HTML 化
- ④ 構成に基づいた各文書のリンク付け
- ⑤ Photo-CD 画像の加工

⑥ HTML 文書への画像のリンク付け

実作業自体は、比較的簡単なものであり、HTML の概要が理解できているものであれば、それほど大きな労力は必要としない。テキストファイルの HTML 化はエディターソフトだけで行うことができる。また、WWW ブラウザ (Mosaic, Netscape) を備えた機種の上で行えば、編集結果を確認しながら、作業を進めること

ができる (図 1, 図 2)。従来の印刷媒体のためのワープロ文書では、フローチャートなどの図をワープロを使って作成していたため、今回の実験システムにおいても、HTML の中だけで、図を書いてみた。この結果、ある程度の図であれば、多少工夫することによって、画像としてではなく、文字情報を使って表現できることがわかった (図 3)。



図 1

```

Buffers File Edit Help
<HEAD>
<TITLE> Mita Media Center Guide No.1-1</TITLE>
</HEAD>
<BODY>
<H1> Mita Media Center Guide (三田メディアセンター) (P)
  ジェネラル・ガイド
</H1>
<H2>
<H3> 開館時間
<P> <月曜日～金曜日> 8:45～21:00 (P)
  <土曜日> 8:45～18:00 (P)
<H3> 休・開館日
<P> 日曜日、祝日、慶應義塾の祝日、夏季・冬季・春季休業中の一定期間
  = 開館時間の変更、図書の在庫については、そのつど掲示します。
<H3> 図書の貸出・返却・期限・予約
<OL>
  <LI> 貸出
    <P> 図書利用券と図書を 1F メイン カウンターまで、お持ちください。
    なお、貸出期間は次のとおりです。
    <table border="1">
      <thead>
        <tr> <th> 開館 </th> <th> 期間 </th> <th> 更新 </th> </tr>
      </thead>
      <tbody>
        <tr> <td> 学部学生 </td> <td> 5冊 </td> <td> 和書 2週間 </td> <td> 洋書 1ヶ月 </td> </tr>
        <tr> <td> 大学生 </td> <td> 12冊 </td> <td> 1ヶ月 </td> <td> </td> </tr>
      </tbody>
    </table>
  </LI>
</OL>
<P> * 図書利用券と図書を 1F メイン カウンターまで、お持ちください。
  なお、貸出期間は次のとおりです。
<P> (PRE)
<P> (UL)
  <LI> 貸出 (P)
    * 図書利用券と図書を 1F メイン カウンターまで、お持ちください。
    なお、貸出期間は次のとおりです。
  </LI>
</UL>

```

図 2

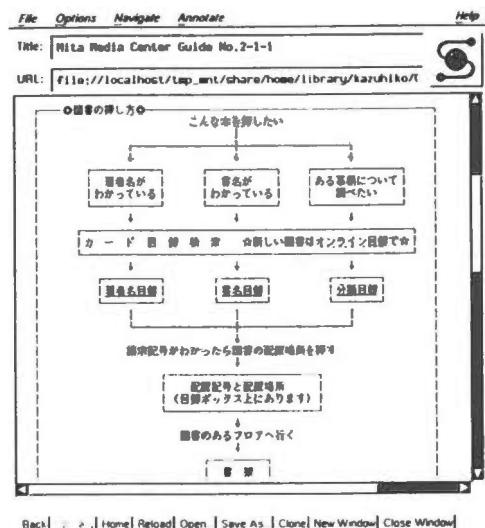


図 3

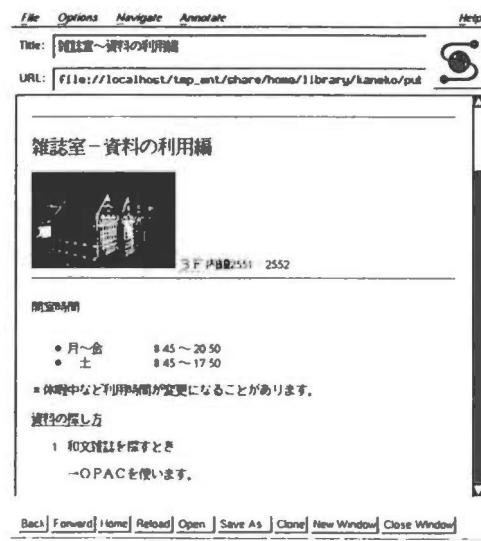


図 4

画像については、図書館内外の写真を Photo-CD に現像し、市販の画像加工ソフトを使って、拡大縮小、トリミングなどを行った（図4）。

この実験システムにより、印刷媒体の情報をネットワークのデジタル情報として WWW に搭載することは、比較的容易であることが明らかになったと言えよう。

4. 今後にむけての検討課題

今回の研究において、いくつかの問題点が明らかになった。以下にそれらについて記す。

4.1. 構成の問題

前述の通り、今回の実験システムにおいては、印刷媒体の原稿をそのまま WWW に搭載した。印刷媒体の情報は、全体として階層型を成しており、HTML などで実現されている HyperText 形式の網型とは異なる体系をしている。こうした階層型の文書は、網型の体系においても実現可能であるが、HyperText 本来が持つ機能を充分に活用するためには、やはり印刷媒体とは異なる構成を検討する必要があると言えよう。

4.2. 提供する情報内容の問題

ネットワーク環境での利用案内、という点を考えると、今回のような学生、教職員という大学の構成メンバーだけではなく、むしろ、潜在的利用者としての学外者への情報提供を盛り込むべきであろう。そのためには、信頼のおける情報をより効率的に、かつ最新の情報を送り続けることが重要になってくる。こうしたことの実現させるためには、どのような情報を送るか、また、図書館が推薦する情報リソースへのリンクをいかに貼るかというような点に関する検討が行われる必要があ

るだろう。

4.3. 運用・管理体制の問題

上述のような情報を、機関として提供することを考える場合、これらのシステムが常に順調に稼働し、かつ、最新情報が維持されていくことが何よりも重要である。そのためには、これらのシステムを含め、ネットワーク全体を運用・管理する人材・組織が必要である。こうした人材をいかに確保していくか、また組織をいかに動かしていくか、ということは、システムの良否を決定づける大きな要因のひとつであると考えられる。

5. おわりに

ネットワークを活用した利用案内については、様々な機関が実験的に運用を開始している。例えば、義塾においても SFC メディアセンターが、早期から WWW 上に利用案内を提供しているが、素材としてはやはり印刷媒体を採用しており、独自の編集にはいたっていない。こうした利用案内のありかたの模索については、いまだ端緒についたばかりであり、今後多角的な面からの検討を加えながら、より高い効果の得られるシステムを考えていく必要があると言えよう。

参考文献

- 1) 山田敦ほか “マッキントッシュを利用した図書館案内の開発について” 大学図書館研究 No.42, p.26-35 (1993).
- 2) 檜垣泰彦ほか “千葉大学附属図書館のインターネット情報サービス” 医学図書館 Vol.41, No. 3, p.277-285 (1994).
- 3) Biddicombe, Richard et al. “Developing a hypertext guide to an academic library”. PROGRAM. Vol.28, No.1, p.29-41 (1994).



SFC におけるインターネットを用いた利用案内について

筒井利子

(湘南藤沢メディアセンター)

1. はじめに

SFC は創設時からキャンパス LAN がインターネットに接続されており、海外との電子メールの交換や telnet 接続による海外の OPAC の検索、FTP 接続によるプログラムの入手などが可能であった。WWW (World Wide Web) はインターネット上にある様々な情報に誰でもアクセスでき、自らも発信できるメカニズムである。中でも文字の他に絵、写真、動画、音も組み合わせることができる Mosaic や Netscape などのブラウザを利用してアクセスすることが一般化している。SFC の学生の多くが WWW 上にホームページを持ち、マルチメディアを駆使して情報発信している。しかしメディアセンターが広報の手段として WWW に注目したのは学生よりかなり後に

なってからである。

本文で扱う利用案内は、冊子体に対応する WWW 上の利用案内とし、湘南藤沢メディアセンターにおける利用案内の現状と今後の課題についてまとめてみたい。

2. WWW 上の利用案内作成の経緯

WWW 上にはじめて湘南藤沢メディアセンターのホームページが現れたのは、1993年10月頃である。以降、数回の改善を経て1994年10月に図 1 のような現在の形になった。利用案内が載ったのもこれとほぼ同時期である。同年11月4日に東京学芸大学で行われた「大学図書館の広報—講演とワークショップ」に合わせてメディアセンターのホームページを公開するため、利用案内も含めてホームページを大幅に改正したのである。職員の間でも WWW のホームページ作成に必要な HTML (Hypertext Markup Language) を学ぶ研究会が開かれた。そしてその研究会に参加した職員の中の数人が実際に利用案内の入力作業を行った。HTML を習得すること自体はとても簡単で、ワープロを打つことができる人なら誰でもすぐに使うことができる。WWW には利用案内の情報をほとんど載せていなかったこともあり、とりあえず冊子体をそのまま WWW 上に載せることになった。この時に作成した利用案内が現在の利用案内の原型である。

3. 現在の利用案内の内容

現在のメディアセンターのホームページはメディアセンター情報、メディアセンターニュース、職員のページ、学生コンサルタントのページの4つに大きく分かれている。そしてその中の図

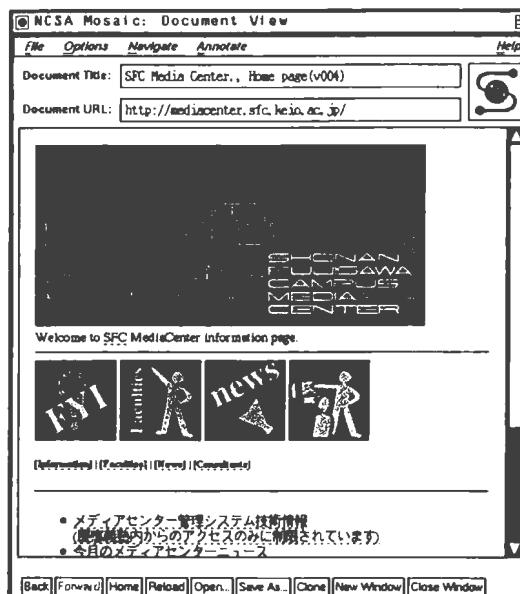


図 1 メディアセンターのホームページ

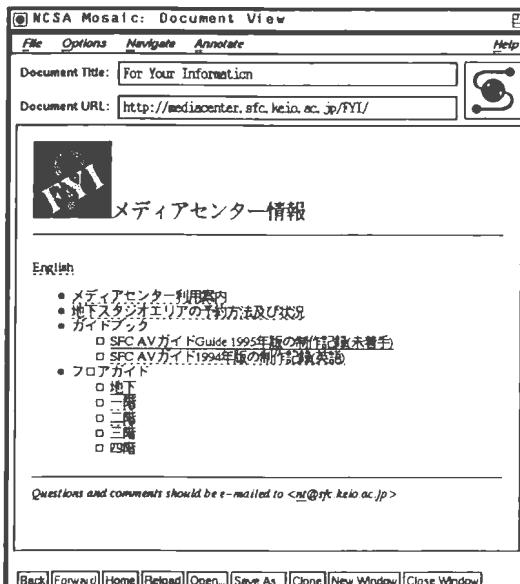


図2 メディアセンター情報のページ

2のメディアセンター情報のページに利用案内、地下スタジオの予約状況、ガイドブック、フロアガイドに関する情報が載っており、ここにある利用案内情報が冊子体の利用案内に対応している。

利用案内は目次と本文からなり、冊子体の目次、本文、貞と同じ構成になっている。各ページには上部に対応する冊子体の画像が載り、その下に本文が記載されている。目次からは各見出しの本文へ直接移動できる。また、「NDC」や「CD-ROM」等文章中に出てくる青く色づけされた語句は、クリックすることによりリンクされた詳しい解説や表に移動することもできるようになっている。また、利用案内とは別にフロアガイドがあり、メディアセンター各階を図を使って解説しており、見た目に分かりやすいものになっている。利用案内ではないが、以前から電子ニュースで毎月発行していたメディアセンターニュースについてもWWW上に載せることにした。最新号ばかりでなく、バックナンバーも参照できるように保存している。従来、冊子体に載せる情報は学内者向けのものであったが、インターネット上に載せ、アクセス制限をしていないので広く学外のひとにも公開している。WWW上に利用案内を載せてからは問い合わせのメールも学内者よりもむしろ学外者からが多くなった。

4. 今後の課題

いままでは不完全なものでも全く見せないよりはサーバー上にのせ、利用者に情報の一部でも提供し、利用してもらおうとの方針で次々情報を追加していた。しかし、WWW上に情報を載せた以上はその後常に更新、修正していくかねばならないし、情報が追加され、変更されるにつれて構造や構成も改善していく必要が生じてくる。今のメディアセンターの利用案内およびホームページ全般も新しく改善する時期にきている。

まず、今までの情報は追加型で増えていったものなので、構造を新しく系統立てて単純でわかりやすいものに変更する。情報は更新の要、不要にわけ、さらに新しく搭載する情報を作成していくなければならない。また、担当者を決めて、常に情報の保守をしていく必要がでてきている。

また、WWW上に利用案内を載せるメリットについても考え直さなければならない。今まででは冊子体のイメージをそのままWWW上に置き換えていたが、それではWWWの特長である画面上にテキストだけでなく、画像、音声、動画などを同時に表示できる利点を活かせていない。冊子体ではできないような新しい視点に立った利用案内を考えていく必要がある。さらにインターネット上に公開しているため、学内者向けにアクセス制限する必要のある情報や、反対に学外者向けに新たに広報する情報も検討していかなければならない。

そして実際に利用案内の情報を見た読者からメディアセンターへフィードバックしてもらえるような方法をつくり、こちらからの一方通行な情報ではなく利用者の要望をうけて、さらに成長発展していくような利用案内にしていきたい。

現在でも、月に数回職員数人が集まり、WWWの研究会を開いている。この研究会では他大学の図書館等のホームページを参考にしたり、新しいアイデアを出し合ったりと今後のメディアセンターのホームページの整備、拡充のために準備を進めている。実際に実現できるかどうかは別として、いろいろな案を出して検討を重ね、できるところから着実に進めていきたいと思っている。

5. おわりに

インターネットを通して利用案内を提供することは学内だけでなく、広く学外に対してもその利用について広報、宣伝していることになる。その意味でも従来の冊子体の利用案内ではできなかつたことがいろいろできると思われるのだが、どう

しても冊子体のイメージにとらわれがちである。この新しい情報通信媒体をどう使えば一番効果的な利用案内となるのかはまだ十分わかっていない。ただ、これからも試行錯誤を繰り返しながら、より充実した内容のある情報を利用者に提供していきたいと思う。



ネットワーク利用効率を考えた事ありますか 今、それをプロが提供します

- SRAのキャンパス・ネットワーク・トータル・ソリューション・サービス -

お気付ですか？

■ネットワーク環境の問題点

- システム管理者の負担が大きい
- システム管理者を育成するのが難しい
- マルチベンダー環境で障害の切り分けが難しい
- エンドユーザごとにレベルの格差がある
- ソフトのバージョンアップなどに人手がかかる
- 使用環境を設定するのが面倒
- セキュリティなどに不安がある



デスクトップ
サービス
(DTS)

良い経営はプロ思考から！

■問題解決

- エンドユーザの手をわざわせません
・問題が発生した時、電話を掛ければ解決します
・本来（本業）の作業に専念して頂けます
- 専門要員の育成が不要です。
・常時、専門技術／ノウハウを保有する技術者が確保できます
- コストの削減
・必要最小限の技術者で最適なサービスを提供します
- 運用の標準化により、安定したネットワーク運用が確保できます
- 最先端の技術／情報の提供が受けられます

- エンドユーザの作業効率が上がり、ネットワークシステムをフルに活用していただけます。

＜主な実績＞ 慶應義塾大学・立命館大学・立教大学・中央大学・会津大学、他

株式会社 SRA

システムオペレーション部 キャンパスグループ

南大塚事業所／〒170 東京都豊島区南大2-26-15 南大塚第一生命ビル
本社／〒102 東京都千代田区平河町1-1-1

TEL : 03-3942-4431

FAX : 03-3942-4445

e-mail : dts@sra339.sra.co.jp

URL : <http://www.sra.co.jp/>

医学メディアセンターの非図書資料雑誌の扱いについて

—現状と問題点—

いがらし ゆみこ
五十嵐 由美子

(医学メディアセンター)

1. はじめに

世間では、マルチメディアの時代と言われ、多種多様なメディアが出現してきている。図書館で扱う資料は、紙の形態が大半を占めているが、紙以外のメディアとして視聴覚資料やマイクロ資料等は古くから存在している。最近では、CD-ROMのような機械可読資料の増加が著しい。

図書館としては、どんな形態であっても、利用に供する装備を施さなくてはならないが、紙の形態とは同様に扱えない。このように、多様なメディアごとの取扱い方が変わることで、雑誌係の業務が煩雑になっている。

本稿では、医学メディアセンターの雑誌係が日常扱う資料の中で、紙の形態でない資料（以下、非図書資料という）の扱いについての現状と問題点を考察する。

2. 雑誌扱いの非図書資料

医学メディアセンターの雑誌扱いの非図書資料で、1995年3月現在継続しているものは、オーディオカセット14タイトル、ビデオカセット1タイトル、マイクロフィルム18タイトル、マイクロフィッシュ4タイトル、CD-ROM 9タイトルである。（表1）

定期刊行物で巻号を持ち、一次資料として受入している代表的な非図書資料を以下に紹介する。

オーディオカセットの形態の雑誌では、学会で発表された講演等を録音した耳で聞く雑誌として、1960年代から発行されている「Audio-digest」がある。

ビデオカセットの形態の雑誌では、誌上の写真やデータだけでは伝えにくい患者の様子と脳波等の検査値を同時に映像化した「Movement disorders」の supplement がある。

CD-ROMでは、一次資料として雑誌扱いで受入をしているものはまだ無い。最近の傾向として、雑誌の1年分をCD-ROMに収めたものが、紹介されているが、現時点では購入を検討している段階である。

3. 非図書資料の装備

オーディオカセット、ビデオカセット、マイクロフィルムの装備は、簡単な受入印を現物に押し、ケースにバーコードシールを貼付している。（図1）

マイクロフィッシュに関しては特別な保存用の箱を用意してバーコードシールを貼付し、現物には何もしていない。

表1 医学メディアセンターの雑誌扱いの非図書資料

1995年3月現在

形態	タイトル数	主な雑誌名
オーディオカセット	14	Audio-digest-Anesthesiology (他 11 section) Accel, Medical English
ビデオカセット	1	Movement disorders
マイクロフィッシュ	4	Journal of the American Chemical Society. Supplement Keyword Index to Serial Titles 他
CD-ROM	9	MEDLINE, EMBASE, Science Citation Index 他

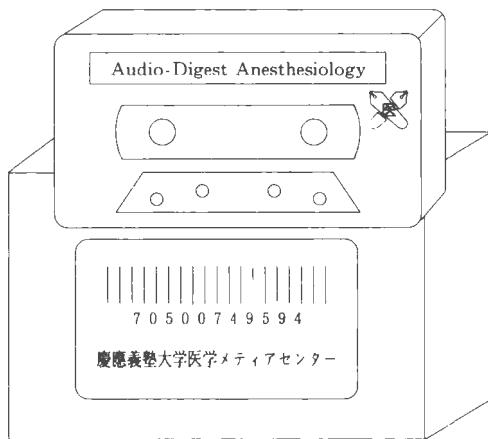


図1 オーディオカセットの装備

MEDLINEのような二次資料のCD-ROMは、雑誌扱いで受入してはいるものの、館内備え付けのため、装備はしていない。装備をしている例としては、単行書扱いのCD-ROMがある。(図2)

バーコードシールはケースに貼付し、CD-ROM本体には、請求記号とBOOK-IDを表示するために、ワープロで作成したドーナツ型のシールを中心部分に貼るという凝った装備が施されている。今後、雑誌扱いで一次資料としてのCD-ROMを頻繁に受け入れるようになれば、この作業がルーティンとして必要になり、雑誌係の業務が煩雑になるであろう。

4. 付録としての非図書資料

雑誌の付録として発行される非図書資料の場合、当センターの雑誌受入システムでは、一所蔵の中で異なる形態を適切に受入れる機能が無い。このため、物理的に雑誌本体に装着が可能なCD-ROMやフロッピーディスクについて、雑誌本体に作り付けたポケットに入れることで一体化し、雑誌本体のみの受入を行っている。(図3)

また、物理的に装着が不可能なビデオカセットについては、別の物理単位として受入せざるを得ないため、同一の所蔵の中に雑誌本体と同様に受入を

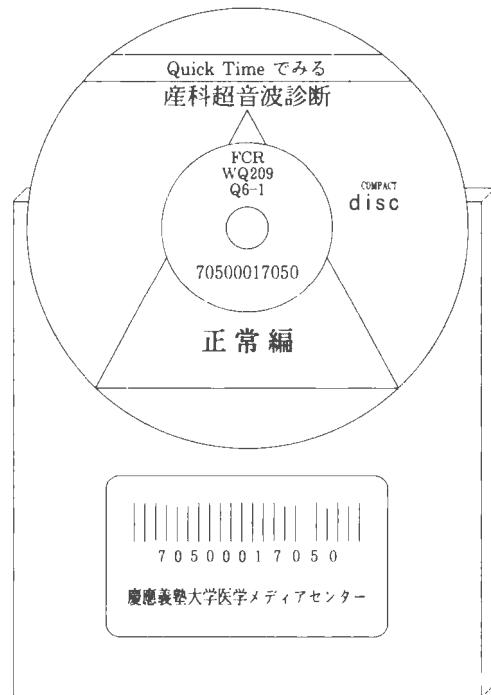


図2 CD-ROMの装備

する。但し、自動付与されたデータは、ビデオカセットが持つべきデータではないため、適切なデータに書き直してやる必要がある。

5. 資産としての非図書資料

現在、当センターでは、資産としては登録せず

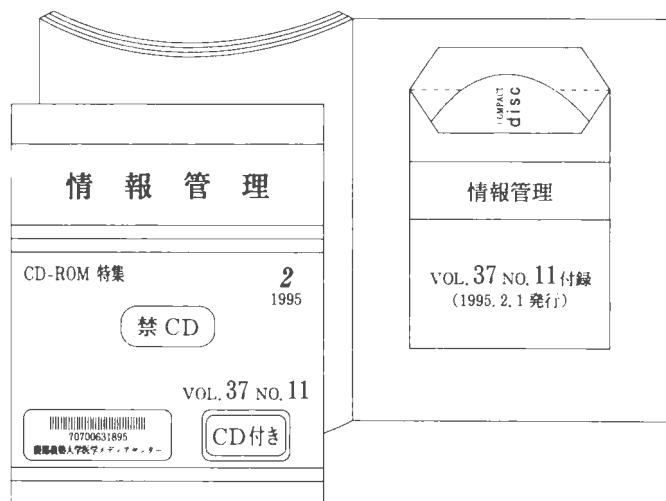


図3 雑誌の付録としてのCD-ROMの装備

に受入と支払いだけを行っている非図書資料に、以下のようなものがある。

MEDLINE のようにデータが毎月更新されたものに差し替えられていく CD-ROM は、当センターでは現物の登録をしていない。

医学中央雑誌 CD-ROM は、1年間1セットを利用する料金で契約している。更新版が届くと旧ディスクは回収されるため、登録は行わない。

Keyword Index to Serial Titles (KIST) のように、毎回更新されるマイクロフィッシュも、継続している間は、登録をしていない。

非図書資料のなかで、資産として登録するか否かの基準は、1年分で更新が終わり、その一枚、或いはその一箱が年間版として手元に残っていくものだけである。

また、登録しないものは、図書資料費という予算、登録するものは図書支出という予算で購入している。図書資料費とは、消耗品費と同様に後に必ずしも現物が残らないもの、或いは時間の経過によって価値の無くなるものを購入する場合に使っている。更新型の CD-ROM 等は、図書資料費で購入することになる。

一方、図書支出で購入した資料は、どんな形態であろうと資産である以上物理単位ごとに登録し、実態に即した資産管理をしなければならない。現在問題なのは、図書支出で購入した雑誌の付録である非図書資料のうち、本体と一体化させて受入したものは資産であるにもかかわらず、登

録番号を与えていないことである。今まで雑誌に付録として付いてくる小冊子については、本体と同じ冊子体であるということで登録の手間をかけずに、物理的にも本体に装着することで済ませてきたが、資料形態が違うものは、たとえ付録であっても、資産として本体とは別に登録し、統計上カウントするべきである。

6. おわりに

体裁や形態の違いによって、あらゆる手段と手間をかけて受入や装備を行っている雑誌扱いの非図書資料については、どの図書館でも何かと問題が多いはずである。図書館の種類によっては、資料の利用基準に違いがあり、利用のされ方によって装備も異なるだろう。当センターでは、利用者にとってその資料が役に立つ情報であれば、どんな形態であっても提供していくための手間と努力を惜しまず、工夫を凝らして利用に供していきたい。

一方、物理的に実態のないオンラインジャーナルの出現によって、受入システムでの対応や、現在資料として形あるものが、電子媒体へと変わることも考えていかなければならない。そのためには、図書館員としては、今後のメディアの動向に敏感になりながら、利用者にとって最良の形で情報提供ができるよう対応していかなければならない。

小展示ニュース 1

〈医学メディアセンター〉

1. 古医書シリーズ

(於医学メディアセンター展示ケース)

1.1. 緒方洪庵

1994. 9.15-11.30

1.2. 新春展示

1995. 1. 5- 1.31

・新収蔵史料から

講義ノート、携帯顕微鏡

・100, 200, 300 年記念医史学資料

2. 新年祝賀会特別展示

(於 新棟11階会議室前)

1995. 1. 5

・医史学の世界 ヒポクラテス

・新規収蔵史料から

講義ノート、携帯顕微鏡

・卒業記念写真帖

(50~60回生の内、所蔵の50, 51, 59, 60と

新収の18, 22, 28回生の写真帖)

検索のコツ

—学情と業務検索と OPAC を使いこなす—

お さわ
小 沢 ゆかり

(三田メディアセンター係主任)

1. はじめに

外部 DB のオンライン検索や CD-ROM は別にして、現在メディアセンターの業務上身近にある検索といえば、学情（学術情報センター NACSIS-CAT）、KOSMOS 業務用検索（FUJITSU ILISX 70 パッケージ慶應バージョン）、KOSMOS 利用者用検索（FUJITSU ILISX 70 オプション OPAC 慶應バージョン）の 3 つが主なものと言えるだろう。この 3 つは、学情→（三田洋書 OPAC）→KOSMOS 業務用検索→KOSMOS 利用者用検索の順に開発されていったもので、それぞれ前者に影響を受けているとともに、改善を加えた点や、経済的・技術的制約から妥協や工夫をした点がある。

業務上の使用が開始されてからも改善や変更が幾つか行われている一方、業務上 3 つを全て活用している部署は少ない。現在は現場での実地教育に重点を置き、KOSMOS の利用について組織

だった研修体制がない為、各検索が現在どの様な機能を持ち、どこが違うのかを掴んでいるスタッフは多くはないと思われる。

本稿は、学情、業務用、OPAC の似ているようで違う点、あまり知られていないと思われる便利な機能を、3 者を比較しながら紹介すること目的しているので、急いでいる読者は、後半の検索方法の説明から読むとよい。それぞれの詳しい機能を知りたい場合は、末尾に紹介する各々のマニュアル類を参照されたい。

2. 索引語切り出し

2.1 索引語の種類と、切り出し元フィールド

まず、学情と KOSMOS の持つ索引語の対照表を載せておく。あまり使うことのないものもあるが、各検索画面にある入力域の意味がわかる様になる。（表 1）

業務用と OPAC の索引語は基本的には同じだ

が、OPAC では必要ないと思われる検索項目がかなり省かれている。なお業務検索画面にある項目でも、検索集合が非常に大きくなると予想される検索語はマシンの性能上、入力は遠慮されたい。（例えば、ST に「m」）

次に、書誌レコードの各項目から切り出される索引語の対

<<書誌・所蔵検索>>									
>									
< BIB >-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
TITLE =									
AUTH =									
AKEY =			ISBN:		ISSN:				
PUB -					CODEN:				
PLACE -					YEAR:				
SH =									
WORDS=									
BID :		LKID:		MARCN:		OTHN:			
WY :	TP:	GMD:	SMD:	STS:	CONT:				
FILE :									
< HOLD >-									
BKID :			RGN:		AREA:	SECTION:			
CLN =									
HID :		OTHN:							
< SET >-									
SID :		SKEY:	ORDER:						
< P.F.KEY >									
PF1: ヘルプ	PF3: 終了								

図 1 KOSMOS 書誌・所蔵検索画面

表1 検索キーの種類対照表

* KOSMOS 検索画面の検索語入力域順に準拠。()は使用していないもの。

1-1 書誌レコード

書誌レコード	学情	KOSMOS	略称
タイトル	TITLE	TITLE	TI
著者名	AUTH	AUTH	AU
短縮キー	AKEY	AKEY	AK
ISBN	ISBN	ISBN	IB
ISSN	ISSN	ISSN	IS
巻次	VOL	VO	
CODEN	CODEN	CODEN	CD
テクニカルポート番号		TECHN	TE
出版者	PUB	PUB	PU
出版地	PLACE	PLACE	PL
出版年	YEAR	YEAR	YE
出版国コード	CNTRY	CNTRY	CN
言語コード	LANG	LANG	LA
件名	SH	SH	SH
分類	CLS	CLS	CS
キーワード	WORDS	(WORDS)	WO
書誌レコード ID	ID	BID	
リンクレコード ID (変遷)	FID	LKID	
リンクレコード ID (上位)	PID	LKID	
書誌番号(ICカード番号)	LCCN	MARCN	MA
書誌番号(全国書誌番号)	NBN	MARCN	MA
書誌番号(NDLカード番号)	NDLCN	MARCN	MA
書誌番号(NDL雑誌番号)	NDLPN	MARCN	MA
書誌番号(ULP番号)	ULPN	MARCN	MA
その他の番号	OTHN	OTHN	OT
和洋区分		WY	WY
レコード種別区分		TP	TP
一般資料種別コード		GMD	GM
特殊資料種別コード		SMD	SM
書誌ステータスコード		STS	ST
資料内容指示コード		CONT	CO
検索対象データベース	FILE	FILE	

1-2 典拠レコード

典拠レコード	学情	KOSMOS	略称
著者名	AUTH	AUTH	AU
タイトル	TITLE	TITLE	TI
著者のタイプ		TP	TP
注記		(NOTE)	NO
レコード ID	ID	ID	
リンクレコード ID	SAID	LKID	
その他の典拠番号		MARCN	MA
AKEY		AKEY	
検索対象データベース		FILE	
キーワード		WORDS	
時間		DATE	
場所		PLACE	

1-3 所蔵レコード

所蔵レコード	学情	KOSMOS	略称
図書 ID		BKID	BK
登録番号		RGN	RG
地区コード, 参加組織 ID *	MLID	AREA	AR
参加組織名		MLNM	
管理部署, 館室名略称 *	LOC	SECTION	SE
請求記号		CLN	CL
所蔵レコード ID		HID	
その他の所蔵番号	OTHN	OTHN	OH
所蔵巻号次	INV	有	
所蔵年次	INYR	有	
継続受入れ	CONT		

照表である。正確な検索をする為にはこの状況を理解していると大変役に立つ。

それぞれの索引語が、どのフィールドから切り出されているか、どの様な形で切り出されているかに注目されたい。(表2(次頁))

顕著な違いとして、まず、KOSMOSは、和洋コード“w”“y”を始めとするコード化情報の索引語が多い。これは、和洋、図書・雑誌でファイルが分かれていらないことも理由である。

切り出しの有無で大きく違うのは、学情はタイトル関係部分にある責任表示部分からも AUTH 索引を作成している所である。この影響については、後の著者検索の項で解説する。

もう1点大きく違う点が、日本語のタイトル等

の索引語の形である。これは、記述形の分かち書きフィールド(TRH)を持つことと合わせてKOSMOSの大きな特徴である。これについて次項で解説する。

2.2 KOSMOS 特有の索引語切り出し

KOSMOS開発にあたり、日本語の検索をどのようにするか幾つもの形を検討した結果、タイトル索引には、学情とは違うJ-BISC方式を採用し、発展させた。これは、分かち書きの恩恵をうけつつ、分かち書きのルールに拘束されず、特定性の強い検索のできる方式である。

学情では、分かち書きされる毎に(空白や記号がある毎に)1つの単語として索引語とされる。

表2 検索キーの切り出し対照表

KOSMOS の書誌規則フィールド順に準備。「—」はフィールドのないもの。

[] はリンク先レコードからの切り出し。() 内は、機能として持つが使用していないもの。

「*」は分かちから末尾までの索引語

書誌レコード	KOSMOS	学情
ID	BID	ID
STS (書誌ステータスコード)	STS	—
WY (和洋区分)	WY	—
TP (レコード種別区分)	TP	—
BLVL (階層フラグ)		—
VR (刊年 1, 刊年 2)	YEAR	YEAR
FREQ (刊行頻度コード)		
GMD, SMD (種別コード)	GMD, SMD	
CONT (資料内容指示コード)	CONT	—
SRC (ソースレコード ID)	MARCN	
CNTRY (出版国コード)	CNTRY	CNTRY
TTL, TXL, OG (各種言語コード)	LANG	LANG
OTHBN (その他の書誌番号)	MARCN	—
NBN (全国書誌番号)		NBN
NDLCN (NDL カード番号)	—	NDLCN
LCCN (LC カード番号)	—	LCCN
NDLPN (NDL 雑誌番号)	—	NDLPN
ULPN (ULP 番号)	—	ULPN
ISBN, XISBN	ISBN	ISBN
ISSN, XISSN	ISSN	ISSN
CODEN	CODEN	CODEN
GPON (GPO 番号)		
TECHN (テクニカルレポート番号)	TECHN	
OTHN (その他の番号)	OTHN	OTHN
TR (タイトル)	TITLE/AKEY/(WORDS)	TITLE/AKEY/WORDS
TR (責任表示)		AUTH/WORDS
TR (タイトルのヨミ)	TITLE/AKEY/(WORDS) *	TITLE/AKEY/WORDS
TRH (タイトルの分かち)	TITLE/(WORDS) *	—
VLYR (雑誌巻次)		
ED (版表示)		
PUB (出版地)	PLACE/(WORDS)	PLACE/WORDS
PUB (出版者)	PUB/(WORDS)	PUB/WORDS
PUB (出版年)		
PHYS (形態表示)		
VT (その他のタイトル・ヨミ)	TITLE/(WORDS) *	TITLE/WORDS
VTH (その他のタイトルの分かち)	TITLE/(WORDS) *	—
CW (内容注記タイトル)	TITLE/(WORDS)	TITLE/WORDS
CW (内容注記の責任表示)	AUTH/(WORDS)	AUTH/WORDS
CW (内容注記タイトルのヨミ)	TITLE/(WORDS) *	TITLE/WORDS
CWH (内容注記書名の分かち)	TITLE/(WORDS) *	—
CW2 (その他の内容注記)	TITLE/(WORDS) *	—
THESI (学位論文注記)	(WORDS)	
NOTE (一般注記)		
LOCAL (ローカル注記)		
PTBL (上位書誌タイトル)	[TITLE]/(WORDS) *	TITLE/WORDS
PTBL (上位書誌の責任表示)		AUTH/WORDS
PTBL (上位書誌タイトルのヨミ)	[TITLE]/(WORDS) *	TITLE/WORDS
PTBL (上位書誌リンク ID)	LKID	PID
PTBL (上位書誌に対する巻号等)	TITLE/VOL *	
RBL (関連書誌リンク ID)	LKID	—
FID (変遷ファミリー ID)	—	FID
AL1, AL (著者名標目・ヨミ)	[AUTH]/(WORDS)	AUTH/WORDS
AL1, AL (著者名リンク ID)	LKID	
AL2, SH (人名件名・ヨミ)	[SH]/(WORDS)	SH
AL2, SH (人名件名リンク ID)	LKID	
UTL (統一書名標目)	[TITLE]/(WORDS) *	TITLE/WORDS
UTL (統一書名責任表示)		AUTH/WORDS
UTL (統一書名ヨミ)	[TITLE]/(WORDS) *	TITLE/WORDS
UTL (統一書名リンク ID)	LKID	
CLS (分類記号)	CLS	CLS
SH (一般件名)	SH/(WORDS)	SH/WORDS
SHH (一般件名の分かち)	SH/(WORDS) *	—
PRICE (価格)		

これに対して、KOSMOS の日本語の索引語は、それぞれの分から部分からタイトルの末尾までを 1 つの索引語とする。

例. ロンドン歴史の構造 || ロンドン レキシ ノ コウゾウ
から ロンドン 歴史 の 構造 (学情なし)
学情 ロンドン歴史ノ構造
ロンドン レキシ コウゾウ
KOSMOS ロンドン歴史ノ構造>
ロンドン歴史ノ構造
歴史ノ構造 ノ構造 構造
ロンドンレキシノコウゾウ
レキシノコウゾウ
ノコウゾウ コウゾウ

KOSMOS では、ロンドンから検索できないと思われるかもしれないが、日本語検索は前方一致検索なので問題ない。一方、「ロンドン」だけが書名の場合には、「ロンドン>」というタイトルの完全一致の検索法が用意されている。

日本語等以外（英数字以外の文字の有無で判別される。）のタイトルからの索引語切り出しあは、学情と KOSMOS は同じである。但し、KOSMOS では、タイトル全体の完全一致形も作成される。KOSMOS の SH フィールド（人名、団体名を除く件名）もタイトルと同じ方式である。

著者の索引語はタイトルと違って、単語毎に 1 つの索引語となる。学情はこれのみだが、KOSMOS ではさらに、人名末尾までの完全一致形を作成する。これには、生没年や付記事項は含まれない。

例. 小野, 一郎 (1929-1982) || オノ, ジロウ
小野 一郎> 小野 一郎
オノジロウ> オノ ジロウ
1929 1982

2.3 索引語の正規化など

各フィールドから切り出された索引語は、そのままの形ではなく、カナや文字の形を整える正規化という処理が行われる。検索の際の検索語にも同じ処理が行われ、大文字小文字の違いなどにも対応できるようにするものだ。

。ローマ字等の小文字を大文字に変換
。平仮名を片仮名に変換

- 。拗音、促音の小文字を大文字に変換
- 。EXC 文字（音標文字、特殊アルファベット、音標符号付ローマ字、制御文字）を対応するローマ字に変換
- 。語頭の「d'」「l'」、語尾の「's」を除去
- 。長音記号、ダッシュ、ハイフン、マイナス記号を除去（途中にある時は詰まる。但しこれらの 1 字前が英数字の場合は空白とみなされる。）
- 例. American → AMERICAN

コンピューター → コンピュタ

この他、ストップワード（the, and 等）を索引語から省き、規定の長さ（KOSMOS は 25 文字）を越える部分を切り捨てる処理が行われる。ちなみに、学情の索引語は片仮名や英数字が半角の 1 バイトだが、KOSMOS では全て全角の 2 バイトに正規化されるので、英数字でも 25 文字までである。

この調整が行われる為、大文字と小文字、平仮名と片仮名の区別などを意識しなくとも検索できる。ただし、AKEY については、平仮名から片仮名への変換は行われない。

2.4 AKEY

学情と KOSMOS の書誌 TR フィールド、学情の典拠レコードの HDNG フィールドから編集して作られる索引語で、少ない検索語入力で検索するためのものである。TITLE や AUTH の索引語は PTBL（シリーズ名）や SF（～見よ参照形）のフィールドからも切り出されるが、AKEY は 1 つのレコードから主要なもの 1 つのみ切り出されるので、この特徴を利用すると助かることがある。

編集の方式が 2 つある。分から書きされていない書名（と典拠の標目）部分は「1・3・5 方式」として 1, 3, 5 文字目で作成する。分から書きされている書名（と典拠の標目）のヨミの部分および英数字の書名（と典拠の標目）は「3・1・1・1 方式」として、先頭の 4 語について各々最初の 3 文字、1 文字、1 文字、1 文字を組み合わせて作成する。ストップワードは除外しないので注意する。

AKEY のタイトルからの切り出しあは、フィー

ルド内全体を対象としているので、単語が少ない場合は責任表示まで使用されることがあるが、KOSMOS では標題関連情報までである。(1・3・5 方式は標題の部分のみ。)

例. 遙かなるケンブリッジ → 遙なケ
　　ハルカナル ケンブリッジ → ハルカケ
　　The woods beyond the world
　　→ THEWBT

2.5 KOSMOS と学情の違い

索引語の作成に関して、学情と KOSMOS の違いとして覚えておきたいことは以下の 2 つである。

学情には、タイトルの記述形の分かち書きがない。学情と KOSMOS ではタイトルの索引語の切り出し方法が違う。

KOSMOS では、索引語が分かち書きの空白から末尾までという形で、なおかつ前方一致検索なので、分かち部分や正式なタイトルについてあまり意識しなくても検索できるが、学情では、記述形の途中からは検索できず、ヨミの検索でも分かち書きを間違えると検索できない。詳しくは検索の解説部分で述べる。

記述部分の責任表示 (TR の/後部分) について、学情は AUTH として切り出しているが KOSMOS はしていない。学情と KOSMOS では、AUTH 索引の切り出し方法が違う。

KOSMOS では責任表示部分を索引語としないので、外国人名のカナ形は、典拠の SF (～見よ参照) にない限り検索できない。学情は AL などから日本人名等の姓名の続いた形の索引語を作成しないので、責任表示にある時のみ検索される。詳しくは検索の解説部分で述べる。

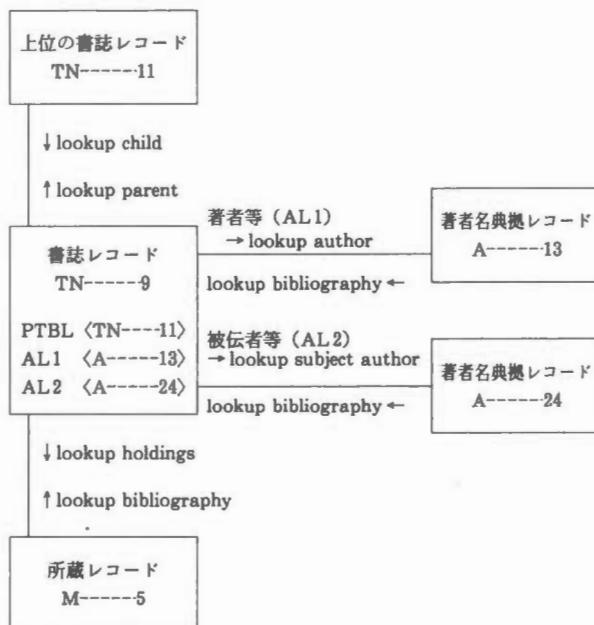
3. 検索方法

3.1 コマンドと画面遷移

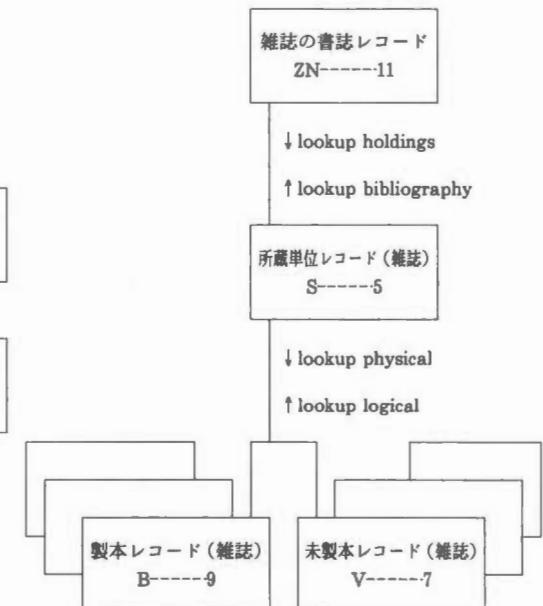
検索という点では、学情と業務用が類似しており、OPAC は少し違っている。

OPAC ではコマンドは使用されず、画面遷移は全て PF キーか実行キーで行われる。また、個別の書誌の画面に所蔵情報が同時に表示されることが業務用との大きな違いである。

業務用ではコマンドが PF キーに割当てられている画面も多いが、PF キーは都合で変更されることもあり、学情と業務用はコマンドが殆ど同じなので覚えてしまうと便利である。



2-1 図書のレコード



2-2 雑誌のレコード

図 2 レコードの構造とコマンド

DISPLAY (詳細表示)

BROWSE (一覧表示—学情)

BRIEF (一覧表示—業務用)

LOOKUP (関連先の表示)

RETURN (前へ戻る)

SWITCH (検索ファイルの切り換え)

下線部のみ入力しても有効である。表示対象が複数の場合は番号の指定が必要である。LOOK-UP, SWITCH では、以下のようなオペラントと呼ばれる種類の指定が必要だ。

PARENT (上位書誌)

CHILD (下位書誌)

BROTHOR (兄弟書誌)

RELATION (関連書誌)

AUTHOR (著者)

SUBJECT AUTHOR (人名件名)

UNIFORMTITLE (統一書名)

HOLDINGS (所蔵)

PHYSICAL (製本, 未製本)

AUTHOR (典拠ファイル検索)

BIBLIOGRAPHY (書誌検索)

HOLDINGS (所蔵検索)

UNIFORMTITLE (統一書名検索)

3.2 文字の種類

索引の切り出しの項で説明した様に、索引を作成する際も、検索をする際も、正規化という処理が行われる。この為、

片仮名と平仮名、全角と半角、小文字と大文字(日本語も)、音標符号の有無などを特に意識することなく検索ができる。

例えば、外来語やヨミも平仮名で検索すること

和図書書誌検索・簡略表示					
> :					
TITLE =		ISBN:	NBN:	NDLCN:	
AUTH =					
AKEY :			YEAR:		
PUB =			CNTRY:	LANG:	
PLACE =					
SH =					
WORDS =					
ID :		PID:			
FILE :					

図3 学情の和図書書誌検索画面

が可能である。日本語の検索時には「R かな」モードで入力することが多いと思われるが、特にカタカナや半角カタカナに直さなくても全く問題はない。

但し、「を」→「お」、「ち」→「じ」、「づ」→「ず」の様な正規化は行われないことには注意しなければならない。ヨミで検索する時は後者、漢字かな混じりの時は前者のものを使わなければならない。

例. 愛に時間を>

あいにじかんお>

もう1つ、漢字の旧字と新字についても、書誌レコード上、特に配慮されていない場合、タイトルとして書かれている字でしか検索できない。この為、古い図書を始めとして、古くから続いている雑誌、団体名などについては読みからの検索を併用することを心掛けたい。

3.3 掛け合わせ検索 (AND 検索)

学情と業務用の検索画面の検索キーの見出しの後が「:」と「=」の2種類あるのにお気付きだろうか。(図1, 図3)「:」のものはコードフィールドと呼ばれ、ここには検索キーは1つしか入れられない。「=」のものはキーワードフィールドと呼ばれ、ここには複数の検索キーを入れることができる。検索キーの間は空白で区切り、複数の検索キーの掛け合わせの検索となる。(KOSMOS の AKEY フィールドの「=」は「:」の間違い)

TITLE, AUTH, PUB, PLACE, SH の5つがAND 検索の対象フィールドである。

OPAC は記号が全て「:」になっているので画面では判別がつかないが、上記の5つが掛け合わせ検索対象のフィールドである。

WORDS のフィールドにも「=」がついているが、この検索だけは、検索語の内、少なくとも1つを含むものが全て検索されるOR 検索となる。(現在 KOSMOS では WORDS キーは使用していない。)

3.4 前方一致検索などと、分かち書き

学情（和洋とも）と、KOSMOS の日本語以外の検索では、検索語とピッタリ同じものを検索する。つまり、複数形の「s」を忘れると検索されないし、分かち書きされていない学情の記述形（ヨミでない漢字まじりの部分）は、先頭から最後の字までを入れないと検索できない。

この問題に対して用意されているのが、前方一致検索である。必要な部分、正しい部分の後ろに記号を付ける。

前方一致に使う記号は、学情は「*」、KOSMOS の業務用と OPAC では「@」である。

例えば「philosoph@」と検索すれば、「philosophy」も「philosophical」も同時に検索される。KOSMOS では、請求記号の区切りにも「@」を使っているので注意が必要である。末尾の@1つは前方一致記号とみなされる。

前方一致できない検索域もある。学情の場合はフィールド名の後ろが「:」の場合はできない。KOSMOS では、1行のコード化情報と BOOK-ID を除く各種 ID 類は前方一致検索は使えない。

KOSMOS の日本語検索は、記号を付けなくとも自動的に前方一致検索となる。日本語検索か否かは、検索語の中の英数字の有無によって判断される。

前方一致検索は便利であるが、特定のものを探す場合は、わかっている部分をなるべく長く入力し、無意味な分かち書き（分かちする毎に別の検索語の掛け合わせ検索となる）によってシステムに負担をかけない様にしたい。

日本語の前方一致検索に対し、特定の検索をしたい場合や、日本語以外の検索で単語の AND 検索ではなく特定のものを検索したい場合には、完全一致形による検索方法がある。タイトル等には先頭から末尾まで全体を、空白等を除き最後に「>」を付けた索引語が作られているので、これを使って検索する。

例. 遙かなるケンブリッジ>

ハルカナルケンブリッジ>

THEWOODSBeyondTHEWORLD>

この検索語についても正規化が行われるが、ストップワードは省かれていることに注意。逆

に、冒頭の冠詞がデータ上省かれてこともある。

3.5 著者の検索

索引語作成の部分で解説した通り、著者からの検索については、検索語の切り出し元と索引語作成の形が、学情と KOSMOS で違っているので注意が必要である。

学情では、AL フィールドや著者典拠レコードからは、姓と名は別の、1語1語の AUTH 索引語のみが作られる。たまに、「小野二郎」の様な形でヒットするのは、TR フィールドの責任表示の部分の「／小野二郎〔著〕」「／小野二郎、山本正三著」などから「小野二郎」という索引語が作られているからである。この様な責任表示は特殊な方で、普通は「小野二郎著」という索引語が出来ていることが多い。この為、学情で姓名を続けた著者名検索をしたい場合には、「小野二郎*」の様に、前方一致検索するのがよい。

また、著者名が日本語ではない場合、責任表示部分が片仮名で書かれていることが多いが、学情で原綴が判らない場合などにこれを利用できる。この場合も後ろに来る方（姓が多いだろう）に前方一致の「*」を付けるのを忘れずに。

一方、KOSMOS では、責任表示からは AUTH の索引語は作成されない。しかし、著者典拠レコードや AL フィールドから、「小野二郎>」「オノジロウ>」の様な完全一致用の索引語が作られているので、「小野二郎」という検索語が前方一致検索でヒットする。

日本語以外の著者名についても、2.5 で説明した様に、責任表示に書いてある片仮名では検索できないと思ってよい。引用文献に片仮名で書かれている可能性もあるので、現物に片仮名表記があるものについては、典拠に片仮名の参照形を作る検討している。（書誌の AUTH 索引は、リンクしている著者典拠から作成される。）

3.6 階層

1 冊の図書がシリーズや全集などに含まれる場合、他の巻との共通の情報やシリーズ全体に対する情報がある。これを適切な 1 か所に書こう、関連する他の巻との関係がわかる様にしようという

のが、書誌レコードを階層構造にする理由である。

KOSMOS では必要な限り層に展開されている。学情では当初の形から変更して、現在は最上位と最下位の 2 階層としている。（上下巻などは VOL フィールドで対応）この為、学情の検索では、最上位でないシリーズ名等がコントロールされていないことを念頭に置く必要がある。

KOSMOS の OPAC の場合は、「上位書誌あり」「下位書誌あり」などのメッセージが出る。メッセージの出る場所が少し見にくいのと、遷移途中の画面の簡略表示が業務用と同程度に詳しくないのが難点である。

業務用は、上位、下位レコード等の存在がメッセージでは表示されない。上位レコードの有無は、PTBL フィールドを見ればわかるが、下位については BLVL コードを見るとわかる。基本的に、1 なら下位はない、0 なら下位があると思ってよい。下位の書誌に気がつかない場合、所蔵の確認の際にはシステムが下位の書誌に誘導してくれるが、発注、受入れ等の作業の際には、各巻の下位書誌がないか、注意する必要がある。

3.7 学情のファイルの指定

KOSMOS の書誌ファイルは、図書・雑誌、和洋で分かれてはいない。現在、参照ファイルも使用していないので、検索対照となる書誌レコードのファイルは 1 つだけである。

これに対し学情の書誌は、和図書、洋図書、和雑誌、洋雑誌の 4 つに分かれている。メニューが分かれていることから判る様に、図書、雑誌はそれぞれ別に検索しなければならない。学情のもう 1 つの特徴は、各種の参照ファイルを持っていることである。現在、JAPAN MARC (JP), TRC MARC (TRC), LC MARC (LC), GPO, LC MARC music, maps, visual (LCX), UK MARC (UK), RECON (REC), JAPAN MARC 典拠 (JP), LC MARC 典拠 (LC) がある。検索の際には、先ず学情の正式書誌 (NC) が優先されるが、NC ない場合は、優先順位の高い参照ファイルから順に検索が行われヒットした所で止まる様になっている。従って、ヒットした書誌の中に

目指す書誌がない場合にも、検索の優先順位の低いファイルを指定して再び検索すると見つかることがある。優先順位は以下の通りである。

和図書 NC > JP > TRC

洋図書 NC > LC > GPO > LCX > UK > REC

和雑誌 NC > JP

洋雑誌 NC > LC

典 拠 NC > JP > LC

3.8 便利な機能

他にも、知っていると便利で、検索の無駄や漏れが防げる機能をいくつか紹介しておく。

BROWSE の番号指定

KOSMOS の業務用と OPAC では、簡略一覧表示の際には、検索されたもの全てが（パラメータで指定された上限値の範囲まで、現在 500）表示され、画面をめくると最後まで見ていくことができる。一方、学情は原則的に 10 件ずつの表示である。表示項目が多くて画面からあふれている場合は次頁キーで続きを表示できるが、画面をめくることによって 11 件目以降の表示をすることはできない。

学情でも KOSMOS でも、BROWSE コマンドに続けて（空白を挟む）番号指定することにより、1 つ指定した番号以降の表示（但し学情は 10 件ずつ）、または、指定した 2 つの番号で挟まれた範囲全て（先頭と末尾を指定すれば全体）を表示することができる。

例. BR 1 72

学情の場合 BROWSE コマンドは詳細表示画面からでも使用できるので便利である。KOSMOS では、RETURN で DISPLAY 指定した画面へ戻る。

学情の MLNM フィールド検索

MLNM (Member Library Name) は、学情の所蔵簡略表示画面にある検索項目で、学情参加館の組織名（略称は不可）から絞り込むことができる。（図 4）学情参加館が増えており特定の参加館を探すのが困難になってきていること、学術雑誌総合目録では館までしか表記されていないが、学情では配置部署レベルまで表示されること

和雑誌所蔵検索・簡略表示	<AN 00356684>	1- 7/ 7
>:		
<AN 00356684>図書館雑誌／日本文庫協会. -- 1号(明40.10)-85号(大15.12); 21年1号(昭2.1)-22年12号(昭3.12); 110号(昭4.1)-133号(昭5.12); 25年1号(昭6.1)	LOC:	
MLID :	INVR:	CONT:
INV :		
MLUM = 慶応*		
1.<FA005198>慶大三図書(1907-1926...) 1-50, 75-85; 21-38, 40-83+ 2.<FA005201>慶大日研(1962-1976) 56(4-12), 57-65, 66(), 67-70 3.<FA005201>慶大日図(1964-1989) 58-83+ 4.<FA005212>慶大医(1931-1989) 25-33, 34(1-3), 35, 42(3-4), 43(1-11), 44(...+ 5.<FA005223>慶大理(1963-1989) 57-58, 59(1-6, 8-12), 60-62, 63(1-3, 5-12)...+ 6.<FA005198>慶大三雑誌(1907-1926...) 1-85; 21-22; 110-133; 25-29, 3... 7.<FA012921>慶大藤(1990-1992) 7-86+		

図 4

などから、知っているとなかなか便利である。

例えば、「慶応*」として検索すると、慶應内の所蔵を、「早稲田*」で早稲田の所蔵を確認することができる。ヨミでも検索できる。

AKEY

OPAC には無いが、特定の書名や学情の典拠を、少ない検索語入力で検索する為の検索項目であるが、この理由以外にも大変役に立つ。というのも、AKEY は書名や著者名の内、主要なもの 1 つのみ作成されるからである。関連レコードを省けるだけでなく、親書誌（シリーズに対する書誌など）のみを表示することなどに利用できる。学情の場合は、AKEY, ISBN, ISSN, LID 等、即時切り出しされる索引語が限られ、他の索引語の作成が遅れるので、作成・修正したレコードをすぐに修正・表示させたい場合はこれを利用する。

先読み、コマンドチェーン

これは、受入れや目録業務においては即知の技かもしれないが、端末を先読みモードにしておくと、遷移先の画面でのコマンド入力、PF キー入力、データ記入、改行、実行等を画面の遷移に先んじて次々と送り込むことができる。システムの動きが悪い時などには時間を効率的に使ってよいのだが、1 度送り込んでしまうと取り消すことが困難なので、(間に合えば、キーボード上の RESET キーか ESC キーで取り消すことはできる。) 注意して使うこと。修正の効かない業務（図書の登録や閲覧業務等）には使用しない方がよい。

先読みに似ている機能が、コマンドチェーンである。画面の遷移を予測して、各遷移先画面で発

行するコマンドを「;」で連結して 1 度に発行することができる。「;」が実行にあたる。まとめて同じ作業をする場合など、コマンドチェーン全体を単語登録して使うと便利である。

例. LOO HO;ED;
LINK BIB

コマンドチェーンに

限らず、シリーズものの処理など同じ検索語を繰り返し使う場合には、その検索語を単語登録してしまうと便利である。（登録した端末のみに有効。他人に迷惑の掛からぬ様、不要なものは忘れずに抹消すること）

所蔵検索モード SWITCH HOLD

KOSMOS の書誌・所蔵検索画面は通常、書誌検索モードになっている。つまり、画面内にある所蔵関連の検索キーで検索してもその索引語を持つ所蔵レコードとリンクしている書誌レコードが検索されるのである。閲覧業務や受入業務は書誌が起点で作業が進むのでこれが便利だが、目録業務等では請求記号の修正等を行う時には所蔵レコードをダイレクトに検索したい。

この場合は SWITCH HOLDINGS コマンドで、書誌・所蔵検索画面を所蔵検索モードにすればよい。このモードは所蔵修正画面で SAVE して次の作業に進むと書誌検索モードに戻ってしまう。RETURN で戻った場合はモードが持続するので、シリーズもの等まとめて作業する時は、所蔵修正データを SAVE NORETURN してから RETURN する手がある。

種類の特定

分類や MARC 番号等、種類コードのついた検索語 (CLS, KID, MARCN, THN) は、種類を特定した検索が可能である。

例. NDC8:723.33

LC:88005678

PA:TN00567890

これらのフィールドは、前方一致が標準となっ

ており、種類の特定をした場合は、完全一致検索となる。

3.9 細かい注意点

他にも、画面の作りや、データの入力状態等により、間違えやすい点が幾つかあるので、以下にあげておく。

入力域の範囲

OPAC に近い現場にいる人はよくお判りと思うが、利用者がよく間違えるのが、検索語入力域の開始位置である。OPAC 画面上の下線が、実際の入力域より半角分左にはみ出しているのが混乱のもとなのだが、悩んでいる利用者を見ついたら、分かりにくくてとあやまりつつ、ESC キーと、HOME キーやタブキー、改行キーを教えてあげよう。

OPAC の索引語

業務用にはないが、OPAC には索引語を一覧できる機能がある。いわゆる KWIC 索引形式で該当件数も表示される。まちがえ易いのは、使用する索引語の選択方法で、使用する索引語の番号を入力の上、実行キーではなく、「選択する」PF キーを押すこと。

ISBN, ISSN のハイフン

学情、KOSMOS 共に、データはハイフンを省いた形になっている。検索の際、学情と KOSMOS の業務用では、入力域がハイフンを含まない桁数ピッタリなので問題ない。しかし、OPAC では入力域が広く取られておりハイフンを入力する余地があるので、現在の検索語の正規化の仕様では、ハイフンは空白に置き換えられてしまう。ハイフンをいた形ではヒットしないことに注意したい。

雑誌のデータ

KOSMOS のデータの内、雑誌のデータは初期の頃に用意されたこともあり、データに多少問題点があるので、特徴を把握して検索されたい。

まず多いのが、タイトルの記述形が分かち書きされていないものである。ヨミは分かち書きされているから平気であるが、漢字混じりで検索する場合には、タイトルの途中から検索できないものが多い。また、古くから継続されている雑誌や大

学名等の含まれるタイトルでは、旧漢字が使われていることもままあるが、新字からひけるものは少ない。似たタイトルも多いことから、

タイトルのわかっている和雑誌は、判っている部分をヨミを長くつなげた形で検索するとよい

もう1つ、変遷関係にある雑誌の書誌は、該当する部分を所蔵していくなくても書誌レコードがあるものが多い。OPAC で所蔵が表示されない雑誌は大半がこの事例なので、関連書誌をつたって所蔵を探すこととなる。

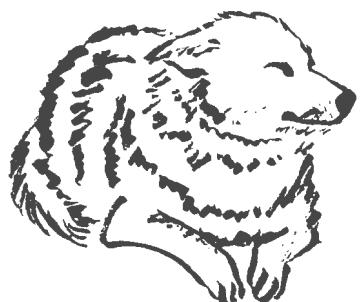
5. おわりに

末尾にマニュアル類を紹介しておくので、疑問、興味を持ったら各項目をぜひ見て欲しい。マニュアル通りに本当になっているのか、マニュアルの意味がわからないという時には、KOSMOS には INDEX というコマンドがある。書誌を EDIT としてSAVE すると索引の切り出しが再び行われるが、その後翌日までは、詳細表示画面で INDEX コマンドを実行すると索引語を確認することができる。

無駄な重複受入れをしない為に、システムに負担をかけない為に、利用者に正しく蔵書を提供する為に、効率的で正確な検索ができるよう各自研鑽されたい。

参考文献

目録システム利用マニュアル、検索編 第3版 学術情報センター 1992
ILIS/X 70 使用手引書、検索編 FUJITSU 1992
KOSMOS OPAC スタッフ用マニュアル 検索 WG
1993.3



本の匂いと手ざわり

岡 部 光 明

新しい本を開く時、微かながら匂いが辺りに広がる。とくに洋書の場合には、なぜか知らないが、和書とは違った一種独特の強い香りがある。書物にはこのほか重さ、紙質、全体としての手ざわりなどにも明らかにそれぞれ個性がある。

何を学んだか、ということもさることながら、目で見て手で触れた場合にどのような印象をもった書物から学んだか、ということが記憶の中で案外大きな意味をもっているように思う。また、その本を図書館で読んだ場合には、その雰囲気や図書館の匂いが本の内容と一緒にになって頭に記憶される（勉強するのは単に視覚によってではなく五感によってなされる）という不思議なメカニズムがあるような気がしてならない。

もう五年も前になるが、米国のペンシルバニア大学で一年間教壇に立つ機会があった。たまたま大学院時代にもこの大学に在籍したので、およそ十五年振りの訪問であった。懐かしいキャンパスに到着、そして大学図書館に入って驚いた。この図書館独特の空気とぶーんとした匂いは、十五年前と少しも変わっていないかった。しかも、その匂いに触れた瞬間、ここで読んだ本や論文のいくつかが、パッと頭の中に瞬時に甦った。そして、かつて学んだ科目やその講義担当の先生方の顔、さらには当時手掛けていた課題なども一緒にになって十五年前の記憶が一瞬のうちに呼びさまされた。実に不思議な体験であった。

大学の図書館がどういうものであったか、そしてどういう書物（知識媒体）を手にして学んだかは、学生にとって後々まで大きな意味を持つ。湘南藤沢キャンパス（SFC）では、図書館（といわずメディアセンターと称するが）はキャンパスの文字通

りど真ん中にあり、それを取り巻くかたちで教室や研究室が周囲に配置されているので、この点の認識の確かさは誇りうると思う。また、知識や情報の保管や伝達は、紙の上にインクを乗せた媒体（グーテンベルグ以来の伝統的技術）によるよりも今後は電子媒体が中心になってくるとの思想から、この建物の一階には図書は一切置かずにコンピューター端末のみが一面に配置されている。ここは、情報検索やレポート作成にいそしむ学生でいつも賑わっており、SFCらしい時代先取りの姿がうかがわれる。一方、書籍は二階以上のフロアに配架されている。

この新しいタイプの図書館であるメディアセンター（以下 MC と略記）では、そこに配置された機器類などから何らかの特有の空気と匂いを醸し出すようになっているのだろうか。筆者は、余りにも日常的にそこに出入りしていることから、まだ特にそれを感じたことはない。匂いといえば、MC というよりもむしろ SFC の匂い（むしろ臭いと書くべきか）の方がよく話題になる。SFC の周囲は農場が多く、風向きの如何では畜舎から来る有機質のにおいが辺り一面を覆うことが少なくない。こういう時には、SFC は正に牧歌的環境にあるにあると実感を抱く。

しかし、これとは別に SFC メディアセンターに独特の匂いがあっても悪くはないと思う。この場合、必ずしも嗅覚で感じる匂いに限定する必要はなく、五感全体で感じる雰囲気といったものを大切に考えたい。MC は単にコンピューターの画面と向き合う場所としてではなく、保守的な考え方かもしれないが、読書に全身集中できるようなスペース、あるいは読書やコンピューター作業のあとゆっくりと過ごすことのできる静かで大きなスペースを提供する場所としても位置づけたい。そうしたスペースが確保され、静かに考える時間を持つことによって、アイデアが閃き、また勉学成果も頭の中に定着しうるのではないか。SFC のメディアセンターは、こうした観点からみても理想的といわれる場所へと発展していってほしいと思う。

（総合政策学部教授）

<スタッフルーム>

小さな本を追い求めて

さく べ 美和子

趣味でミニチュアブック（豆本）の蒐集を始めてから8年ほどになる。もちろん実際に読むのが目的ではなく、一種の工芸作品として表すのをおもしろさを眺めて楽しむためである。

「」に豆本と言ってもサイズの定義が曖昧だが、私の蒐集対象はドールハウスサイズと言われる3センチ以下のものが中心で、大きくても手の中にすっぽり収まるせいぜい7センチどまりのものである。（その中で最小はギネスブックに載ったという1.4ミリ四方のその名も「蟻」という日本の豆本。）そのほとんどが限定版である。一つ一つ丁寧に製本されていて製作者の本に対する愛情が小さな本の中に凝縮されているように感じられる。しかも小さいながらちゃんと活字で印刷され、ルーペを使えば十分判読できる。生来小さなものが好きなのと本の形をしたものになぜか執着があることの2つの嗜好が同時に満たされるのが豆本蒐集の魅力と言えるかもしれない。また、仕事上毎日扱っているいわゆる大量生産の本にはない個性的でチャーミングな本を手元に置くことがストレス解消になると勝手に思っている。

しかし珍しいものだけに蒐集にはかなり苦労する。普通の書店ではまず扱っていないし、古書店を何軒もめぐり歩いてもなかなか出会うチャンスがない。ある時は古書店主が秘かに持っていたものを頼みこんでようやく譲ってもらったこともあった。旅先でも書店やみやげ店に入る度に小さな本はないかとついチェックしてしまうのが我ながら悲しい習性である。

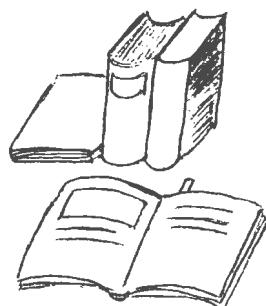
海外では豆本愛好家のクラブがあるようで、日本でも30年ほど前に一時的なブームがあつたらしいが、現在では（私の知る限りでは）国内に愛好家同士のネットワークなどは存在しないようである。そ

うなると頼りになる情報源は豆本・限定本専門の書店から年に数回送られてくるカタログである。しかしそこに掲載されているのは、小さい癖に値段ばかりは普通の本の数倍もするものがほとんど。いくら欲しいと思っても懐具合が許さず泣く泣くあきらめたものも数知れず。

こうして集めた豆本はガラス蓋付の細かくしきられた宝石箱に大切にしまってある。（場所をとらないのも豆本のいいところ。）数としては300点ほどで質、量ともにまだまだである。日本のものは、色とりどりの美しい和紙を使ったものや、ミニチュア家具に入っている独創的な作風のものもあるが、残念ながらややサイズオーバーのものが多い。一方西洋豆本の方は、アンティークから現代作家のものまでバラエティに富んでいる。例えば、聖書やシェークスピア作品を扱った今世紀初めのイギリスの豆本。イタリアのローマ旅行紀の豆本は総革張りケースに入っている。日本の民族衣装や芸術家を紹介した美しい表紙は豆本の盛んなハンガリーのもの。独伊や仏独などの豆辞典の数々は昨年ドイツを旅行した際に入手したもの。その他オランダの風車の写真集やコーランなど。きりがないのでこれくらいにしておこう。

このように豆本をきっかけにして、まだ行ったことのない外国の文化に触れる楽しみができたような気がする。ちなみにイギリスには豆本200冊を収めた図書室がついているドールハウスがあるそうだ。ぜひ一度実物を見てみたいと思っている。これからも未知の豆本との出会いを期待しながら一生の楽しみとして小さな本たちを追い求めていくつもりである。

（湘南藤沢メディアセンター）



（カット：今井英恵）

日吉ギャラリーの誕生

— メディアの多様化と図書館 —

え 衛 とう 藤 しゅん 駿
(理工学部教授)

日吉メディアセンター各階の平面構成は「田」の字型の4ブロックに分かれています。それぞれをつなぐ十字形の廊下がある。この廊下の一部壁面を利用して視覚メディアの展示スペースとしては、という試みが日吉ギャラリー開設の発端である。今日、欧米の多くの美術館や展示場が、ギャラリーと呼ばれているのは、聖堂や僧院のアーケードや廊下を、のちに美術品の展示場として使用したことに由来しているからである。

日吉ギャラリーの最初の企画（本年6月）は、世界屈指の大美術館のひとつである米国ニューヨークのメトロポリタン美術館所蔵の代表作から選ばれたポスターを展示した。同時にメトロポリタン関連の資料—図録やミュージアム・グッズ—を館内のコーナーで紹介したのである。

近時、本塾にも、大学附属の美術館や資料展示室の設立を要望する声があるが、これらはいわゆるハード（ハコ物）ではなく、自から生まれ育つべきソフトの延長線上に成立すべきもの、として考えるべき問題なのである。

本塾では図書館は、情報センターからメディアセンターとその名称を変えてきた。もちろん図書館という呼称は、建物にたいしてと、図書というものが持ち続けている文化的意義とともに変わることはないが、今日情報媒体（以下メディアという）は、いわゆる書物というかたちから急速に離脱・変容しつつあるのである。たとえばテープ、マイクロフィルム、ビデオ、CD-ROMといった今日マルチメディアと呼ばれている諸媒体による多様化がそれである。

日吉ギャラリーによる展示は、スタッフの企画によって選択されたメディアを、一方的に提供するものであり、個々の入館者によって検索される

いわば能動的行為に比べれば受容的性格をもっている。それはまた内部空間をふくむ建築物の外貌が与える効果の延長線上にあるものであろう。

ところで日吉メディアセンターの建築は、昭和57年（1982）開館の三田メディアセンター（新館）と同じ楨文彦氏の設計によるものであり、昭和60年（1985）に設立された。外観と内部空間は「知識の森を逍遙する若者たちの思索の旅」にふさわしく、樹木や船のイメージが造形化されており、都市部としては緑豊かな自然環境との調和が素晴らしい。

キャンパス内の時空間は日常生活のそれではない。それはいわば精神高揚の場としての充実した時空間を象徴するものである。「校庭」といえば、単なる物理的時空間すなわち敷地といったほどの意味であるが「学びの庭」といえば、個人的成長をはぐくむところの時空間を包含する精神世界に対する呼称であり、一木一草はもとより、四季朝暮のうつろいをはじめとする無限の想念を惹き起こす人生の一断面ともいうべきものを意味することになる。

このような「学びの庭」の要（かなめ）ともいいうべき建物が、本塾にあっては各キャンパスそれぞれの歴史と個性的外貌をもって存在する図書館なのである。

図書館は、今日でも、基本的には本を選び読むところである。本と人との間に「読む（視ることも含まれる）」という行為が介在するとき、はじめて本はその本分を果たすのである。したがって利用者側からすれば、図書館とはまさに本そのものと、それを読む場所を提供するところ、ということになる。

では一体、いま読書する目的はなにか。マルチ

メディア社会にあって、もはやいかなる情報もいながらにして収集可能になってしまっている。情報源には目の内外、遠近といったものは関係なく、稀少なるがゆえに、そして僻地なるがゆえに探索され、あらゆるメディアを介して要求する者の手にとどくのである。

ところで人は「何」を知りたいのか、その「何」についてはどこから情報をうるのであろうか。既存の情報や知識の確認も、いぜんとして印刷媒体からのものが多いのであり、読者への誘いもそのひとつである。しかしながら文字を目で追うことのメリットはそれだけではない。本を読むという行為は、順番にいえば、まずは未知なるものについて知りたいという欲求にはじまり、その内容を理解し、現在の自分との関連を通じて、その情報が目からの中に同化したときに読書は終わるのである。

ここで想起されるのは米国のエール大学附属図書館である。建築家ルイス・カーンによる新図書館の中庭は、三田の本塾にも作例があるイサム・ノグチ制作によるものであるが、彼の石彫を中心とした造形が、知的な雰囲気を醸成している。

新館の中央には、数階建ての書架群が毅然として聳え立ち、縞大理石を透過した夢幻的な採光に包まれている姿は神秘的で、書物を御本尊とした莊厳な宗教寺院を連想させるほどである。

そこでは圧倒的な量の書物が語りかけている。「過去の人類の遺産がここに蓄積されている。何人もその全てを読破しえないのである。人びとはその一部から示唆をえて、新たな創造に立ち向うのだ……」と。

私はかつて図書館のあり方を、東洋における書斎ないしは文房の現代版たらしめんと主張したことがあった（KULIC 17号、1983）。要点をいえば、書斎とは文字通り書物をまつり、おがむところである。いま書物をメディアにおきかえてみよう。メディアが人間の知的所産の凝結したものであれば、真理探究を志す人びとにとっての書斎は、まさにメディアを中心とした情報源から、現代を生きる指標を学びとる場所以外のなにものでもない。

書物をまつり、おがむことは、今日ではメディアを人びとに提供し、メディアから人びとは自からが求めるものを吸収することにほかならない。したがって図書館は、現代における書斎たらしめねばならないのである。

一方、文房は、古来文人や士大夫の精神生活空間であった。そこは書・画・弾琴・吟詩・思索そして知的遊びの営まれた場所であった。もちろんそれはまさに知的生産の工房であったのである。

創造的思考を客觀化するにはメディアに托さねばならない。文章もそのひとつである。文章表現には「推敲」が必要だ。推敲とは昔中国の詩人が「僧は推（お）す月下の門」という詩句の「推す」を「敲（たた）く」に改めるのに苦心した故事に由来する。さしづめ知的創造ともいべき行為だろうか。ところがこの「僧は推す月下の門」の前には「鳥は廻る池中の樹」という一句が先行しているのである。

本塾のキャンパスには湘南藤沢以外に池はない。鳥がやってくる池があるにこしたことはないが、キャンパスや図書館内にいまひとつ詩情がただよえば、キャンパスの雰囲気も「学びの庭」から「推敲の庭」すなわち「創造の庭」たりうるのではなかろうか。

日吉ギャラリーという些細な試みが、感性、知性、理性をつなぐ役割の育成に資することを期待するものである。

本はもとより、あらゆるメディアの世界における時空間は、たとえバーチャル・リアリティであっても、誰かの手によってつくられたものである。したがってメディアを受容する魅力には日常生活の時空間からの離脱がある。その体験によってのみわれわれは自分自身のあり方を知り、メディアの中の世界を生きることができるのである。こうして図書館はひとつの小宇宙になるのだ。

一つひとつのメディアが、それぞれに無限の世界を内蔵しつつ、同時にこの世のすべてが図書館という時空間に凝結していることになる。いまひとつは、自分以外の人びとが、メディア受容という方法で、それぞれの世界を創り出している姿を

見ることができるところもあるのだ。そして縁あって選びだしたメディアのとなりにも、そのまたとなりにも、メディアは無限に存在しているという事実を、図書館は体験させてくれるのである。

今日、ビデオ・オン・デマンドというシステムが開発されはじめている。いつでも、どこでも、見たい、知りたい情報が、視覚、聴覚、文字といった複合メディアによってとどくというシステムである。たとえば「ローマの休日」という映画が見たければ、いつでもどこでも提供されるのである。費用の問題は別として、トイレのため鑑賞が中断した時には、元に戻すことも、最初から見なおすことも技術的には可能である。しかしながら人びとはなにによって「ローマの休日」という映画の存在を知り、見たいと思うのか。過去へのノスタルジーや記憶からならば、一生見続けることもできるのである。

一方、未知なるものへの興味から、過去に制作された全ての映像資料からなにを選択するのか、となれば、厖大なタイトル目録から選べるとしても、どれが自分にとって面白いかは見てみなくてはわからないし、すべてを通覧することは一生を費やしても時間が足りる筈はない。

最大の課題は、自分にとって必要な情報はなにか、それを知るための方法とは、の一点につきるのだ。

いずれにせよ人間とメディアとのつきあいは一対一のそれであり、一つひとつのメディアが内蔵している世界は無限に広く深い。そこには大勢の人びとが、長い歳月をかけてあらゆる事象の中か

ら読みとってきたものの集大成が宿っているのである。それらに接することは、未知なるものにみちびかれての、遊魂の旅に出ることでもあるのだ。それは文字通り未知美記（みちびき）の世界であり、そこでは日常が遮断され、いながらにして別天地に遊ぶことができるのである。

このような旅はひとりでもできるが、道づれがあってもよい。ひとまずこれを未知遊記（みちゆき）と呼んでおこう。お互いに体験を語りあうことによってそれを普遍化することができるからだ。道づれはもちろん同行二人的な友人であってもよいし、案内役の先輩や先生であればなおよい。さらには外国人ひとでもよい。なぜならばメディアも人も、すべて共通で友人たりうるからである。

このように考えてみると、図書館はまさに未知なる美しきものとの出会いの場となると同時に、未知なる世界を遊（ゆ）く旅人との奇（く）しき邂逅の場にはかならない。ライブラリーとミュージアムの歴史的境界はもはや存在しなくなった。読書やメディア視聴に疲れたら窓外に目を向け、耳をすまそう。そこにはメディアになるまえのオリジナル媒体が存在しているのである。そこには「春から春へめぐる銀杏の、旅は緑と黄金に、夢は小鳥と露に光る」詩界がうつろう筈であり、そして日吉ギャラリーの散策は、すぐれた感性によって再生された新しい世界へと旅立つ第一歩になるのである。

編集部注：筆者は元日吉情報センター所長。美術専攻。日吉ギャラリー設立協力者。

小展示ニュース 2

<日吉メディアセンター>

平成6年

11月1日～11月30日
20世紀芸術ここに始まる
12月1日～12月22日
富嶽三十六景／葛飾北斎筆

平成7年

1月9日～2月4日
復刻 世界の絵本館
——オズボーン・コレクション——

4月8日～4月28日

福澤諭吉を味わう
5月10日～31日
日吉キャンパスの鳥たち
6月5日～6月30日
日吉ギャラリー開設記念：
メトロポリタン美術館
7月3日～7月31日
鳥獣戯画——絵巻物の世界——

図書利用券と利用者管理

——新生学生証交付を機に——

図書利用券・KOSMOS 利用者管理の現状と今後の課題

木下和彦
(日吉メディアセンター)

1. はじめに

従来は紙製であった学生証が今春からプラスチック製のカード型のものに変更された。これに伴い従来は別にあった図書利用券(以下、利用券)の機能も、この学生証に組み込まれることになった。この学生証のカード化を契機として、教職員の身分証明書や通信教育課程学生の学生証についてもプラスチックカード化を行う方向で検討が行われはじめている。このような動きは、塾に関係する全ての者を対象としてサービスを行うメディアセンター(但しここでは図書館の意味に限定する)においては無関係では済まされない。そこでこうした動きに最も関係が深いと思われる、利用券とKOSMOSの利用者管理について現状と今後の展望について述べてみたい。

2. 利用券について

従来、利用券はラミネート加工を施されたカード一種類だけであったが、現在では他にいくつかの種類がある。その種類ならびに対象となる利用者を挙げると以下の通りである。

図書利用券(教職員等。従来からのもの)

新生学生証(学部学生、大学院生等)

IDカード

(湘南藤沢地区(SFC)の教職員等)

医学メディアセンター図書利用券

(三四会会員等、信濃町地区のみの利用者)

利用券の機能にはメディアセンターの資料の貸

出以外に、入館証というもう一つの大きな役割がある。上記のようにSFCと医学メディアセンターにおいて個別の利用券が存在しているのは、他地区メディアセンターよりも広い範囲の利用者に利用を認めているために、一般の利用券と区別する必要があるからである。

また利用券に記されている情報には、主に氏名とUSER-IDがあるが、このUSER-IDはOCR、バーコード、磁気データの三種類の方式で利用券上に記録されている(ただし「図書利用券」には磁気ストライプがないため磁気データは記録されていない。また「医学メディアセンター図書利用券」には磁気ストライプはあるが、実際にはデータは記録されていない)。これはKOSMOSの貸出業務の際のUSER-ID、BOOK-IDの入力方法が地区ごとに異なること、日吉メディアセンターとSFCに導入されている入館システムの入館チェックの方法が異なることなどの理由によるものである。

これらの利用券の作成方法についても説明しておこう。「図書利用券」の場合は教職員についてのみ、毎年度末に、翌年度就任予定者分を外注して作成している。学生証ならびにIDカードは教務部ならびにSFC学事が毎年度末に翌年度新入生分を外注している。メディアセンター独自の利用者(ローカル利用者)に発行する分については台紙のみを予め準備しておき、必要に応じてその都度作成している。従来は学生に対してもメディアセンターが利用券を作成していたが、新生学生証化に伴いこの業務がなくなったため、利用券作成に関する負荷は大幅に軽減された。

3. KOSMOS 利用者管理について

KOSMOSは全地区共通で利用するシステムである。そのため、メディアセンターから資料を借りる資格を持つ者に対しては、地区に関係なく全地区メディアセンターを通して重複のないようにUSER-IDを割り振らなければならない。現在のUSER-ID体系は、利用者の中で一番高い割合を占める学生に振られている学籍番号を元とし、そ

のすき間に図書館固有の ID を割り振るという形をとっている。USER-ID 体系からみた利用者の概ねの区分を以下に挙げる。

学部学生・大学院生

教職員

通信教育課程卒論登録生

通信教育課程夏期スクーリング生

三田メディアセンターローカル利用者

医学メディアセンターローカル利用者

SFC メディアセンターローカル利用者

KOSMOS 利用者データの管理業務は、このように多岐にわたる USER-ID の管理だけでなく、氏名、住所、電話番号など利用者への連絡に必要な情報も同時に管理しなければならない。このような情報の管理については、学部学生・大学院生のデータは総合企画室、教職員のデータは人事課、通信教育課程学生のデータは通信教育部から、それぞれ提供してもらっている。しかしそれ

ら各部署のデータと KOSMOS 利用者データとは形式が異なるため、KOSMOS に登録するためにはフォーマット変換の作業が必要である。この時、KOSMOS 上で定められている所属コードや身分コードへの変換も行うため、こうしたコードもあわせて管理していかなければならない。また、これらの利用者は慶應義塾に登録された時点で即メディアセンターの利用資格を有することになるため、KOSMOS への速やかな登録が要求される。さらに、こうしたデータは転居などの理由で常に変更があるため、定期的なデータ更新や、不必要的データ削除も利用者管理の重要な仕事である。

4. 今後の展望について

上述のように、従来、USER-ID はメディアセンター独自の体系で作られており、学籍番号を除けば他部署で用いられている ID とは無関係で

ダブル・フラッパー方式入館ゲート ILAS

この機種は利用券をターミナルにかざすだけでゲートの開閉を自動的に行うシステムで、ちょうど鉄道の改札口にある自動ゲートと同じようになっています。さらに開閉のメカニック部分と利用券の認識部分とを分離し、図書館で利用しやすい機能となっています。



データ管理がらくにできます

- 各入館ゲートの利用者通過状況ジャーナル表示と印字
- 入館者別時間統計、時間毎の入館者データの印字
- 入館者区分日計とその比率
- 入館者区分月計。入館者区分別年計
- 入館者最高日・最低日と、その入館者数
- 入館者月平均資料と統計

株式会社伊藤伊本社

東京都文京区湯島1丁目5番33号 ☎ (03) 3815-6251

営業所→大阪、名古屋、福岡、札幌、東京多摩

あった。それは利用券をメディアセンターだけで管理していたためでもあった。しかし今後様々な部署で身分証がカード化され、そこに利用券の機能を持たせることになると、従来各部署で用いていた ID とメディアセンターの USER-ID をどのように統合するか、ということが問題となってくる。各部署とも ID にはある程度の規則性を持たせているために、決まった桁数の中では ID の重複が避けられないからである。これについてはカード化を予定している関係各部署と検討を重ねてはいるが、いずれにせよ今後 USER-ID は部署を超えた共通のものとなっていくため、この体系化は注意深く行う必要がある。また、この ID 体系をどこが管理するのかという問題も今後起こってくることが考えられる。これは関連部署全てを含め、整全体の問題として検討していかなければならないだろう。

また、利用券には、各地区の事情にあわせて OCR、バーコード、磁気データの 3 種類の形で USER-ID が記録されていることは先に述べたが、これも利用券をメディアセンターだけで管理していたために出来たことであった。カード化が

行われるときには、そこには各部署で必要となる情報も盛り込まれることになる。カード上のただでさえ少ないスペースに、同じ ID を記すために多くのスペースを確保することは困難である。各地区それぞれの事情があるとはいえ、同じ USER-ID を同じシステムに入力するのに三通りもの方法があるというのは、考えてみればおかしな話である。OCR リーダーなどは、ハード的にもソフト的にも対応機種がなくなってきたという現状もある。このような状況からも、USER-ID の入力方法については、全地区メディアセンターで統一化する方向で検討する必要があるのではないかと考えている。

5. おわりに

以上、簡単ではあるが利用券と利用者管理の現状と展望について触れてみた。これらの業務は利用者がメディアセンターを利用する上で大前提となるものであり、その重要性は極めて大きい。各部署がカード化を進めていくのを契機に、こうした面にも多くの人の関心が向くことを期待するものである。

三田図書館・情報学会月例研究会

第80回（平成7年1月20日）

「学術情報支援サービスのための研修」

発表者 斎藤 孝（中央大学文学部）

第81回（平成7年3月18日）

「大学図書館と公共図書館との相互協力」

発表者 原田 悟

（慶應義塾大学三田メディアセンター）

特別月例研究会（平成7年3月30日）

「アメリカにおけるアート・ドキュメンテーションの教育」

発表者 ナンシー・S・アレン（ボストン図書館チーフ・ライブラリアン）

第82回（平成7年5月20日）

「図書館における CD-ROM の利用動向」

発表者 キャサリン・マーフィー

（ノーステキサス大教授）

第83回（平成7年7月22日）

「NDC 第9版刊行と分類の今後」

発表者 相原 信也

（国立国会図書館索引課）

これらの研究会は、非会員にも公開している。また、年刊の機関誌 *library and Information Science* は、個人会員（年額¥3,000）、機関会員（年額¥5,000）を支払った会員に送付される。

学会への入会、機関誌等に関する問い合わせは、慶應義塾大学図書館・情報学科事務室（Tel. 03-3453-4511 内 3147）で受付ている。

新学生証への対応

関 恭子

(日吉メディアセンター係主任)

1. 入館規則と利用券

日吉メディアセンター(以下、日吉)では、他センターに先駆けて新図書館の開館時(1985年4月)から貸出業務の機械化と、利用券のバーコードを読み取って入館資格の有無を判断する入館システムを導入した。

しかし、学生は利用券の必要性を軽視する傾向が強く、年間5,000~8,000件の利用券不所持者の入館願、700件前後の再発行が生じていた。利用券の貸借による不正入館も後を絶たなかった。本年度より新学生証が利用券を兼ねることになり、不所持や貸借はあり得ないという前提で入館規則を大きく見直し、学生証不所持の場合は一切入館を認めないこととした。他地区への進学を前に利用券=学生証の常時携帯を徹底させることも日吉の利用指導の一部であると考えている。

2. 新しい入館システム

新学生証に図書利用券の機能をもたせることについて、関係する法人・学事部門とメディアセンターが打合せを始めたのは昨年7月であった。新年度までに利用券のバーコードをリーダーで読み取る貸出システムを変更する時間の余裕はなく、新学生証の磁気テープに入るデータが確定されていなかったこともあり、日吉では新学生証にもバーコードを付すよう強く要請し、教職員が持つ旧タイプの利用券の双方に対応できる入館システムを選定、本年3月末に設置した。

新しいシステムは専用パソコンで利用者データや入館記録を管理するもので、有効期限内の利用者を確実に判断することができる。年度始めや夏期スクリーニング、秋期入学時などにKOSMOSから有効利用者IDをダウンロードし、それを入

館システムに入力する作業が必要である。また、日々新規登録される利用者IDもその都度入館システムに登録している。

入館ゲートは制御装置が学生証のバーコードを読み取り、有効IDであればゲートを開く仕組みになっている。(写真参照)これに学生が慣れるまでに約2ヶ月かかり、「使いにくい」という声が殺到した。その後製作業者の協力を得て装置を改良することができ、利用者の集中する春学期試験期前にはほとんどの学生がスムーズに入館できるようになった。



3. 今後の対応

事務の機械化により各部署で学生や教職員のデータを共有することが徐々に実現している今、一部署の業務変更が他の部署に及ぼす影響は常に考慮されなければならない。残念ながら学生証のプラスチックカード化については、メディアセンターは“慌てて”対処した感がある。大きな予算措置も必要であった。

慶應義塾に所属する(した)すべての人がメディアセンターの利用対象者である。来年度以降、教職員や通信教育生、さらに塾員のIDカード発行が予定されている。メディアセンターも計画段階から積極的に参画し、全塾で総合的に取り組まれることを希望する。

湘南藤沢メディアセンター における入館システム

島 田 貴 史

(湘南藤沢メディアセンター)

1. はじめに

湘南藤沢メディアセンター（以下、SFC メディアセンター）の入館管理は、新学生証が交付される以前から湘南藤沢キャンパス（以下、SFC）のセキュリティ・システムを利用して行っている。そこで今回は、このセキュリティ・システムを使った入館チェックの方法とその問題点を取り上げる。

2. システムについて

入館システムは、日本電気株式会社が SFC 向けに開発したセキュリティ・システムのサブシステムにあたる。システム全体を統括するホストマシン（NEC FC 9801 X）は湘南藤沢事務室に置かれ、データの登録・更新・学生証の発行等一連の管理業務は事務室で行われている。

3. 入館チェックについて

新学生証の交付以前は、学生・教職員を問わず、SFC の在籍者は ID カードというプラスチック製のカードを使用していた。現在は、学生・大学院生は新学生証を、教職員は図書利用券をかねたキャンパスカードを使用している。

入館時には、利用者はそれぞれのカードを入館ゲートの磁気カードリーダに投入する。利用可能な場合は入館ゲートが開くが、カードが変形していたり、銀行カードの様な別のカードを投入すると、それらのカードはゲートに受付られず、有効期限切れや発行回数の違うカードを入れた場合には、投入したカードはゲートに回収されてしまう。

4. 問題点

最大の問題になっているのは、これらのカードが変形しやすい素材で出来ているにもかかわらず、カードを取り込んでデータを読み込む方式になっている点である。

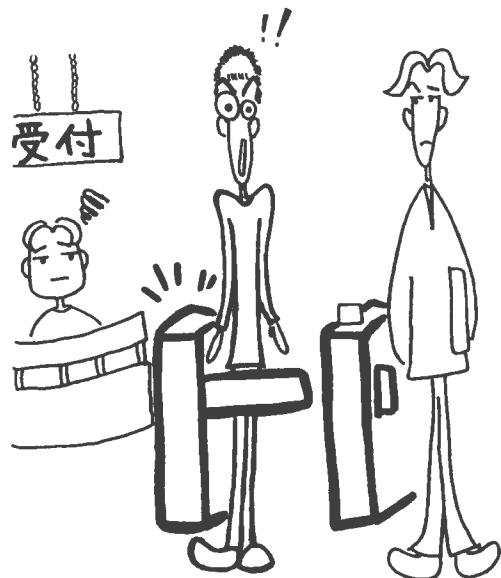
学生証は多少変形しても有効であり、利用者に再発行を強要することは難しく、ゲートが受付けない学生証が増加し、係員がその対応に追われるという状況になっている。

その他には、ゲートが 2 台しかないために混雑時に入口が渋滞することや、磁気カードリーダのレンズが汚れ易く、故障が度々あること等が挙げられる。

また、学生のモラルの問題から、カードを出すのを面倒臭がったり、他人のカードを借りて入館しようとするケースも見られる。

5. おわりに

入館に関するトラブルは多い。入館できる、できないの判断をするのは気が重い。入館ゲートの様に、警報音一つで判定できないもどかしさを毎日感じている。



（カット：品田由美）

オリエンテーションの新しい試み

メディアセンターの利用者教育については、MediaNet 2号「MediaNet レポート」に各センターの報告がまとめられている。ここでは今年度に実施された利用者教育の新しい試みを紹介する。

尚、日吉メディアセンターは、継続して制作している「利用案内ビデオ」の変遷を振り返って報告に加えた。

日吉メディアセンター —利用案内ビデオの変遷—

日吉メディアセンターでは、1989年以来利用案内ビデオの上映とツアーの組み合わせという形式でライブラリー・オリエンテーションを行ってきた。ビデオでは、ともすれば単調になりがちな説明を映像と音楽を交えて展開でき、その視覚的効果と目新しさが利用者を引きつける上で役立っている。

サービス内容や施設の変更に合わせて何度も作り替えを要し、現在までに制作されたビデオは4本に上る。以下に歴代ビデオの変遷を紹介してみたい。

① 1989年版ビデオ 10分

制作：日吉情報センター

男子学生が親切な図書館員の助言を受けながら本を探すという古典的なストーリー展開の作品。10分という飽きない程度の長さの中に要領よくポイントを盛り込んでいる。セリフも聞き取りやすい。出演はもちろん撮影・編集・録音などの技術的な作業も専任職員や学生嘱託らでこなしている。機材は職員の持ち寄りである。

このビデオには、図書館員による説明だけでなく、卒業式の日に卒業生にインタビューして日吉

図書館について語ってもらうという場面がある。実際の利用者であった先輩の「図書館を使いましょう」という呼びかけが、新入生の関心を高めるのに効果を上げていると思う。

別にメイキング・ビデオもあり、使った機材の説明やスタッフ紹介、撮影風景などが入っている。作り手の自己満足のためだけでなく、後々の参考のために、こういった記録を残しておくと良い。

② 1991年版ビデオ 16分

制作：創像工房 in front of

映画・演劇創作サークルに所属している夜間学生嘱託の監督で制作。同学嘱が脚本も執筆した。依頼するに当たって、図書館側からビデオの中で説明してほしい情報を予め渡しておき、脚本に盛り込んでもらった。

内容は、レポートを書かなくてはならないのに1度も図書館に入ったことのない男子学生をサークルの先輩女子学生が案内するというもの。2人の会話に沿って図書館のサービスや利用法がさりげなく紹介されていく脚本は、なかなかの力作であった。ただ学生の会話の雰囲気をそのままセリフにしているため、言葉遣いにぞんざいなところがあるのが難点と言える。

途中、画面に職員の顔が映し出されて「Keio Hiyoshi Library」という文字が挿入される部分がある。図書館というもの、またそこで働くスタッフに親しみを持ってもらうためのコマーシャル・フィルムのようなものだが、「ここで終わりかと思った」という意見もあり、賛否両論であった。

ラストは出演者のNG集でまとめられている。

③ 1992年版ビデオ 20分

制作：創像工房 in front of

②のビデオの消耗が激しく、画像や音声に乱れが生じたため、新たなビデオを作る必要に迫られた。同サークルに再度制作依頼をしたが、脚本執筆と監督は②とは別の学生が行うことになった。

作り手が変われば作風も変わり、結果、今までとは全く違う雰囲気の異色作品が誕生した。

花見の席で行方不明となった学生がいる。花見の幹事が金田一探偵に彼の捜索を依頼する。金田一探偵は残された日吉図書館のしおりと「Burroughs」という作家名をもとに、手がかり探しにやって来る。図書館の使い方が全くわからないドジな探偵と案内役のできる助手という対比で説明が進むのだが、この2人の演技のアクの強さが特徴で、あまりに個性的な演出ゆえに観た人の好き嫌いがはっきり分かれた。単純に面白いと感じる人は多かったが、利用案内としては相応しくないという意見が強く、1992年4月には完成していたのに使うのを見合わせることになった。

1993年にいよいよ②のビデオが使用に堪えなくなり、思い切って新入生と夏期スクーリング生対象に上映してみたところ、意外と若者には好評であった。学生の感覚で作ったものというのは同世代には受け入れられやすいのかも知れない。しかし、年配の参加者の多い夏期スクーリングのためにはやはり不向きであるという印象であった。

なお、このビデオより、内容に他地区図書館の紹介を盛り込むことになった。

④ 1994年版ビデオ 24分

制作：放送研究会

③は個性的でそれ自体としては面白いものだが万人向けではない作風のため、1994年版として新たなビデオを作ることになった。必ずしも前回と同じ学生団体でなくともよく、ビデオ撮影のできる機材と技術を持ったところをいくつか考えてみたが、放送研究会に決定した。放送研究会側でも「報酬は謝礼程度で構わない。その仕事自体をやってみたい」と意欲的で、よい協力関係を築くことができた。

前2作のビデオは演劇系のサークルが作ったため、出演者が演技をするストーリー性のあるものだったが、放送研究会のものはセリフや演技がなく、利用案内に徹した映像に後からナレーションで説明を被せるというオーソドックスな作品に仕

上がった。

どこに出しても恥ずかしくない、どんな利用者にも安心して見せられる模範的なビデオである反面、前作に比べると物足りない、24分という長丁場で飽きてしまうという欠点もあげられた。

以上で紹介したように、日吉メディアセンターの利用案内ビデオは代々プロでなくアマチュアの手作りである。外注するほど予算がないのは事実だが、図書館と学生が協力して作るところに日吉ならではの味がある。押しつけでなく一緒に使いやすい図書館を作っていくという呼びかけにもなり、従来の固く暗いイメージを打破し、親しみ安さを出すという点で成功している。

しかし、やはりアマチュアの撮影・編集技術には限界があり、1、2年使用するとテープの品質が落ちてしまう。8ミリで撮影してVHSにダビングしたものを使っているが、すぐに画像が波打ち、音声が聞き取りにくくなってくる。

また、施設やサービスに変化があってもすぐに訂正できないという不便さがある。さまざまに変更を余儀なくされる過渡期のメディアセンターにとって、利用案内にビデオを使うことは非を見直す必要がある。ちなみに日吉では、1995年の夏期スクーリング時のオリエンテーションにおいては、Macintoshにデジタル処理した館内施設の写真を読み込ませて、スライドのように投影するという手法に転換して案内を行った。

このようにオリエンテーションのスタイルも新機材の導入で変化しつつあるが、利用案内ビデオの制作は日吉メディアセンターの1つの伝統と言える。新作の制作予定はまだ立っていないが、今後も作り続けていきたいと願っている。

(河野江津子)

理工学メディアセンター

理工学メディアセンターでは、今年度の図書館利用説明会でパソコンとOHPを使った新しい方式の説明を行った。これはパソコンの画面をOHPでスクリーンに映し出す機器と、スクリーン上を指示棒で指示することによってパソコンのマウスを操作するのと同様の効果が得られる装置を用いて行った。

使用した機器、ソフトウェア等は以下の通り
パソコン：Power Macintosh 8100/80AV
ソフトウェア：Persuasion, Photoshop, マックドロー Pro 等

映写用機器：Proxima 社の DATA DISPLAY および Cyclops

これらを使い、具体的には以下の手順で説明会用資料（データ）を作成し、映写した。

① 説明に必要な図や表は主にマックドロー Pro を使って作成。写真はイメージスキャナで読み取り、Photoshop で必要な加工を加える。

② ①でつくったものを用いて、Persuasion で編集する。Persuasion はプレゼンテーションを作成するためのソフトで、図表や写真、文章などを一連のスライドや OHP シートのようなプレゼンテーション資料にすることが出来る。さらに

必要に応じて前の画面に戻ったり別の画面に飛んだり、動画的な効果を加えるなどの機能も備えている。

③ ②によってパソコン上につくられたプレゼンテーションを OHP でスクリーンに表示するため、パソコンに DATA DISPLAY を接続する。DATA DISPLAY はパソコンの画面と同じイメージを透明な液晶パネルに表示するもので、このパネルを OHP に乗せれば、スクリーンにパソコンの画面を投影することができる。

④ 投影されたスクリーン上でマウスの機能を働かせるために Cyclops を使う。これは先端が赤く光る差し棒（またはレーザポインタ）とスクリーン上でのその光の位置を感知するセンサー、およびパソコン上のドライバから構成される。差し棒やレーザポインタがスクリーン上でマウスと同様に働くので、説明中にパソコン本体やキーボードに触れることなく、スクリーン上の操作だけで説明を進めることができる。

説明会では、このようにしてスクリーンに投影される映像を使い、職員が口頭で説明を加えた。

参加者の反応は概ね良かったが、一部の文字が読みにくいなど、改良すべき点もあった。

（酒井明夫、長島敏樹）

三田メディアセンター

毎年行われるライブラリー・オリエンテーション（ビデオ＆ツアーの1時間コース）の他に、今年度は、二つの新しい企画を試みた。

① ビデオ上映会

午後 4:30～

図書館地下1階 AV ホールにて

「図書館の達人」

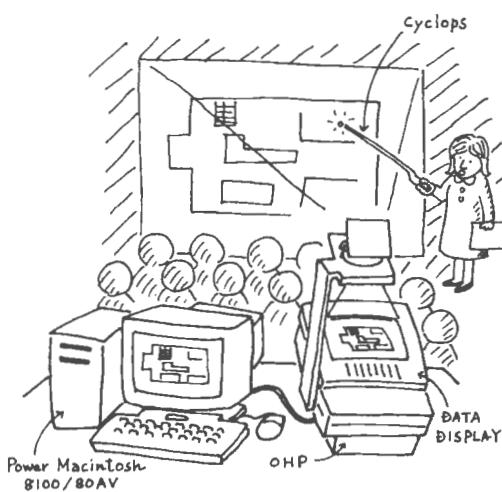
第1巻を除く全巻を4月に5回上映。

「経済文献の達人」

全3巻全てを4月、5月に1回ずつ上映。

② データベース体験講座

午後 4:30～



MEDIANET レポート・オリエンテーションの新しい試み~~~~~

大学院棟 3 階パソコン室にて

OPAC を始め、図書・雑誌データベース、新聞データベース等の図書館で使える各種のデータベースを紹介。説明の後は、実際に参加者全員に検索を体験してもらった。

- ・第1回 OPAC (図書館蔵書検索)
- ・第2回 J-BISC, 雑誌記事索引 (図書・雑誌記事検索)
- ・第3回 HI-ASK, 日経新聞等 (新聞記事検索)
- ・第4回 法律判例文献情報、判例マスター等 (日本語法律文献検索)
- ・第5回 Index to Legal Periodicals (英語法律文献検索)
- ・第6回 Psyclit (英文心理学文献検索)

後期も前期とほぼ同内容のものを、時間帯を多少変えて行う。

ビデオ上映会の方は、学生が個人的に興味を持って見に来る他に、ゼミ単位での申し込みもあった。全シリーズを見るには時間がかなりかかるのだが、途中で席を立つ人はほとんどいなかった。データベース体験講座の方も、国内の図書・雑誌記事検索の CD-ROM の回は、教室がいっぱいになってしまうなど、両企画ともなかなかの盛況ぶりだった。

来年度は、広報の仕方や、日程・時間帯等を再検討し、もっと多くの利用者に知ってもらい参加してもらえるよう考えている。

(藤井 康子)

湘南藤沢メディアセンター

湘南藤沢メディアセンターでは、様々なデータベースが利用可能になっているが、ネットワークに対応しないスタンドアロン型のものは、印刷体の利用案内、ニュース等の広報だけでは、それを利用するところまで浸透していない。そこで、今年度から新たな試みとして、4月から6月までの7週間に渡って、メディアセンターで利用可能な

データベースの紹介・デモをレンタル担当と学生スタッフであるデータベース・コンサルタントで以下のように実施した。

第1週：イントロダクション

ビデオ「データベース検索入門」上映
展示「メディアセンターで利用可能なデータベース」

第2週：KOSMOS OPAC

ビデオ「KOSMOS OPAC の手引き」上映
展示「KOSMOS OPAC をもっと知ろう」

第3週：新聞全文データベース

デモ N.Y.TIMES, 朝日, 日経, 毎日
展示「データベースと原紙の比較・他キャンパスで利用可能な新聞データベース・印刷媒体の新聞記事索引・ニューステレコン」

第4週：書誌と索引

デモ Global Books in Print, URLICH, PAIS, Econlit, MLA, J-BISC, 雑誌記事索引
展示「書誌・索引とは？ (印刷体の書誌や索引紹介, Internet で利用可能な英文の記事索引)」

第5週：企業情報と人物情報

デモ ABI/INFORM, SEC online, Moody's International Company Data, 有価証券報告書, 新訂現代日本人名録

第6週：大和総研データバンク (デモ)

第7週：QUICK FF (デモ)

秋学期には、今回紹介していない統計データベース等を中心に企画を組み、メディアセンターのホームページにこの企画の詳細を載せる予定である。

(松本 和子)



コンピュータの新しい利用環境

三田メディアセンター

たか はし ゆき ひさ
高 橋 幸 久

(三田メディアセンター課長)

うち だ きん ぞう
内 田 金 藏

(三田メディアセンター係主任)

1. はじめに

三田地区における最近1, 2年の情報処理環境の利用形態は確実に変化しつつある。これはワークステーションの利用登録の増加（平成7年度は倍増）に表れている。従来のメインフレーム中心型からワークステーション、パソコン等の分散型への利用環境のシフトである。三田計算室では、これらのニーズに対応した事業計画「①メインフレーム（大型汎用機）のリプレース、②ネットワーク利用環境の整備、③新パソコン教室（2教室）の増設等」を行った。平成6年度～7年度（前期）にかけて実施した具体的な内容は次の通りである。

2. メインフレーム（大型汎用計算機）

平成6年8月、富士通FACOM M-770/8を富士通FACOM M-1700/10にリプレースした。

演算速度は、およそ2.6倍に向上し、周辺機器においては、MTL（磁気テープライブラリ）の導入等、今後のサービス形態変更への対応を考慮した。三田地区における、大型汎用計算機の利用内容の特徴として、統計解析プログラムパッケージとデータベース（特に「日経NEEDSデータベース」）が挙げられるが、それに関しても次のとおり更新等を実施した。

① 統計解析プログラムパッケージの更新

SPSS, SASの新規バージョンを公開した。

② データベースの更新

賃金センサス、日経NEEDSデータの年度更新を実施した。

③ データベース検索システムの機能追加

かねてより、オリジナルシステムとして開発・公開を進めている「日経NEEDSデータベース検索システム」について、新規データ編（中国総合統計ファイル）の公開、機能の改良を実施した。

3. ワークステーション

平成7年4月にワークステーション（WS）のリプレースを行った。従来、WSが4台しかなかったため、30台程のパソコン（PC）をWSの端末として提供していた。しかし、急増する利用者には端末数、サーバの能力共に追いつかず、WSのリプレースが急務となっていた。

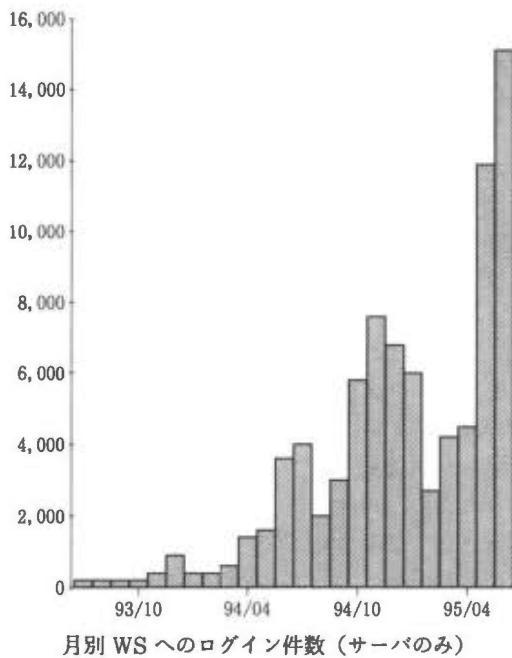
今回のリプレースでは、SunのWSを15台まで増強すると共に、200台を超えるPC端末から接続が可能になった。また、初めて学生用に5台のWS端末を提供した。

7月にはWSへのダイアルアップ接続サービスを開始する。20回線ほど用意したが、塾内では唯一都内におけるアクセスポイントとなるため需要は高い。

現在WSの利用者は1500名を超えており、電子メールをはじめとしたインターネットの利用が中心で、最近ではWorld Wide Web（WWW）



ワークステーションを使う学生



の利用に人気が集まっている。文書処理系の利用としては、論文やレポート等の作成に TeX を使用する動きが出ている。

4. パソコン

平成 7 年 3 月、大学校舎 2 階既存パソコン室 321・322 番の 2 教室のパソコン 100 台を Windows 対応の新機種にリプレースした。既に、平成 6 年 5 月に 3 階 331・335 番教室の 2 教室を新パソコン室として、Windows 対応 105 台を設置しオープンしている。内、3 教室には大型プロジェクター (70 inch・52 inch) を配しプレゼンテーション機能の充実を図っている。平成 7 年 7 月には、地階の共用パソコン室に Macintosh 3 台とスキャナー等周辺機器を設置し、グラフィックソフト数種も導入した。

最近のパソコンの主なリプレース状況は右の通りである。

5. おわりに

三田地区における今後の情報処理環境の主な検討事項は次の通りである。

- ① パソコン等で利用するアプリケーションソ

パソコン本体

- ・富士通 FM-V (321・322 教室 92 台)
- ・NEC PC-9821Cs (331 教室 69 台)
- ・IBM PS/V Vision (333 教室 34 台)
- ・Macintosh PowerMac 7100/80 AV 1 台
Performa 5210 2 台
(共用パソコン室)

主なアプリケーションソフト

- | | |
|----------------------------|-----------------|
| ・OASYS/Win | ・Lotus 1-2-3 |
| ・MS-OFFICE (WORD, EXCEL 他) | |
| 以上、Windows 用。以下、Mac 用。 | |
| ・PHOTOSHOP | ・VIDEOPHOTO |
| ・Mac Reader Plus | ・CANVAS |
| ・クリエイターズ | ・SOUND EDIT PRO |
| ・マックライト II | |

周辺機器

- ・スキャナー
- ・フィルムスキャナー
- ・デジタルスチルカメラ
- ・CD-ROM ライター

フ (統計解析ソフト等) の充実。

- ② 電話回線で接続するアクセスポイントの充実 (回線増および機能強化)。
 - ③ 既存データベースの整備。
 - ④ 新規データベースの構築。
 - ⑤ 一般教室又は共用スペースに情報コンセントを設置。
 - ⑥ ニュース、WWW サーバの整備運用。
- これらの計画は、三田地区の特徴を生かしたきめ細かい情報処理環境の実現であり、利用者側のニーズを十分把握し、全ての利用者にとって「最適なデータベース環境」、「利用し易いネットワーク環境」等を常に意識するつもりである。

日吉メディアセンター

宮 国 彰 郎
(日吉メディアセンター係主任)
降 旗 ゆかり
(日吉メディアセンター)

日吉計算室(日吉メディアセンター情報システムサービス)で利用可能な情報処理環境には、①メインフレーム(汎用計算機)、②パーソナルコンピュータ、③ワークステーションがあるが、近年は②と③の利用が大部分を占めるようになっている。また外部から電話回線を通じて日吉計算室にアクセスし、①や③を利用できる環境も用意している。

1994年度秋期から1995年度春期にかけて日吉計算室で実施した情報処理環境とサービスの整備状況は以下のとおりである。

1. メインフレーム

日吉計算室には富士通 M 1600/8 という中型汎用計算機が設置されている。これは基本的には日吉計算室の大型汎用計算機 M-1700/10 とほとんど同様の運用を行っているものである。

今年度は日吉計算室のメインフレームの見直し時期にあたっているが、利用の頻度や負荷の大きさから処理能力的には現状でも間に合うと判断して、本体のリプレースは行わずにそのまま継続して使用することとした。

ソフトウェアも基本的には変更はないが、若干のアプリケーションソフトウェアについて更新を行った。日吉計算室で行ったソフトウェアの更新には次のものがある。

- ① 熱物性値プログラムパッケージ PROPATH 第9.1版に更新した。

2. パーソナルコンピュータ

昨年度までの MS-DOS をベースとした環境か

ら、Windows 3.1を中心とした環境に切り換えた。またハードウェアも更新時期のため、富士通 FMR 60 HE 3 から FMV 499 D 3 (一部 FMV 560 DE) に変更した。ただし従来の機種との互換を保つため若干数の FMR 280 P 2 を導入するとともに、一部の実習室には FMR 60 HE 3 も残した。

情報処理実習室 1 ~ 5 の各実習室毎に NetWare のサーバを用意した。以前から実習室 5 では授業用データの配付にファイルサーバを使用していたが、今回のサーバはファイルサーバの他にもプリンタサーバやメインフレームとの接続などにも使用している。なおファイルサーバも、授業用データの配付以外に各パソコンの標準的な環境設定ファイルの配付にも使用している。

Windows 3.1 の導入にともないカラー印刷の需要も見込まれることから、カラーインクジェットプリンタをパソコン 2 台毎に 1 台ずつ設置した。なおモノクロの高速高品質の印刷への対応のため、各実習室に 2 ~ 3 台のページプリンタをネットワークプリンタとして設置した。

各実習室には授業用にほぼ統一した環境の FMV を設置しているが、それに加えて実習室 3 では利用者の自由な活用に供するため、FMR, FM-TOWNS II, PC 98, Macintosh など各種のパソコンも設置した。また実習室以外に日吉計算室ロビーにも FMV 499 D 3 を 3 台と FM-TOWNS II を 1 台設置している(内 2 台はプログラム相談カウンタ)。

実習室 1 と 2 では教卓のパソコン画面を学生に呈示しながら授業を行うために、21 インチのマルチスキャンディスプレイ(実習室 1 に 4 台、実習室 2 に 2 台)を天井吊りで設置した。さらに大型のディスプレイとして、実習室 1 に 70 インチのリアプロジェクションディスプレイを 1 台と、実習室 2 に 42 インチの CRT ディスプレイを 2 台増設した。また実習室 1 には新たに教材呈示装置やビデオカセットプレーヤーも設置したため、実習室 5 と同様の設備が整った。

機種	実習室				
	1	2	3	4	5
FMV 499 D 3	81	51		31	122
FMV 560 DE			18		
FMR 280 P 2			6		
FMR 60 HE 3	81				
FMTOWNS II モデル HC			2		
BJC 600 J	41	26	12	16	62
FMJP 201 E			1		
FMLBP 266	2	1	1	1	3
PC-9821 Xa 12/C 12			2		
POWER MAC 7100/80 AV			2		
MAC PERFORMA 630			4		
MAC LC III			2		
Laser Write pro			1		
Desk Writer 560 C			1		
21インチディスプレイ	4	2			
70インチディスプレイ	1				
42インチディスプレイ		2			
教材呈示装置	1				
ビデオカセットプレーヤ	1				

3. ワークステーション

日吉計算室では1993年1月からワークステーションを一般に公開している。公開当初からS-4/2を1台(サーバ用), S-4/IXを2台(クライアント/公開用), プリンタを1台設置し, 情報処理実習室1~3のパソコン約160台を端末として提供してきた。しかし, 利用者の増加が著しく, また教育での利用を考慮して, 1995年2月に機器の増設, 同10月にリプレースを行った。

1995年2月にはS-4/5を5台と周辺機器を増設した。この増設によりサーバ機能の強化, ディスクの増設によるユーザ領域不足の解消を図ると共に, 利用者からの要望に応え, 公開用ワークステーションを増設した。なおこれに伴いOSのバージョンアップ, アプリケーションの充実など

ソフトウェア面での利用環境も整備された。

1995年4月にパソコンをWindows環境にリプレースした際に, 情報処理実習室5のパソコン120台もワークステーションに接続できるように設定した。現在は約280台のパソコンからアクセスできるようになっている。

1995年10月に行ったリプレースでは従来1台で運用していたサーバ機能を分散し, 各機能を強化した。さらにS-4/5を8台公開用に提供し, うち6台は学生用として, 2台は教職員用として配置している。

この他に1996年4月から日吉キャンパスでネットワーク教育がテスト的に開始されることを考慮し, 教育用の各種サーバ用ワークステーションを設置した。これらは現在ネットワーク教育の開始に向けて運用を検討している。

	台数
サーバ用ワークステーション	
S-4/1000	1
S-4/20 L モデル 100	2
S-4/5 モデル 110	3
S-4/5 モデル 70	1
クライアント用ワークステーション	
S-4/5 モデル 85	2
S-4/5 モデル 70	4
プリンタ	
JSPRN-600	3
JSPRN-201	1

4. 外部からのアクセス

日吉計算室では, 外部からの電話回線を経由したメインフレームやワークステーションへのアクセスを可能にするために, モデムとミニコン(通信プロトコルや文字コードの変換用)を設置して着信用の電話回線に接続している。従来のモデムは2400bpsまでの通信速度をサポートするものであったが, 今回の更新でさらに高速の28800bpsまで可能なものに交換した。なおミニコンが

高速モデムに対応しきれなかったため、モデムとミニコンの間にネットワークコンバータという機器を追加した。

日吉計算室ではメインフレームに直接接続したモデム回線をかなり以前から用意していた。これは現在も使用できるが、ミニコン経由の回線の方がメインフレームとワークステーションのどちらでも使用できるため、一部の電話回線をメインフレーム直通からミニコン経由に変更した。またその際に電話番号の割り振りも全体的に整理し、代表番号の設定も行った。

医学メディアセンター

よし　おか　し　ろう
芳　岡　史　郎
(医学メディアセンター)

最近、社会環境にコンピュータと通信の役割が増して、より生産性、効率性を向上させようと、インフラ整備が活発になりつつある。

大学でも新しいインフラを取り入れた研究・教育・事務に、変貌しようと検討・試行がなされ、

確立されようとしている。

医学部も通信とコンピュータ技術のマルチメディアを取り入れ明日の活動に進歩を見出そうとしている。

計算室でもコンピュータにマルチメディア化を推進し、多様な機能を順番に立ち上げユーザーのより高い生産に結び付けるよう、計算機・通信・その他のメーカーに協力を呼びかけ実効を上げようとしている。

そこで3年の時間を掛け、整備事業が塾でスタートした今日、他の学部に呼応して通信ネットインフラの医学部内、塾内外への構築に作業が進捗し始めた。

また、そのネットワークの運用・管理等のハード・ソフトを含めたシステムやサービスメディアの内容も議論、協議されつつある。

そこで、現在具体的に計算室では、目に見える形として今までのパソコン及びターミナル機器を富士通の AT 互換機 (FM-V: 複数のメーカーに互換度の高い Windows/OS を装備) にリプレースしユーザーの異機種ファイルの互換性を実現し、また、マウスによるウインドウズオペレーション指向で操作性と編集機能の向上を狙った。

汎用機の環境ではユーザーの蓄積した利用資源



を守りつつ処理スピード向上と省スペース化を狙い、周辺機器としてマルチメディア処理に即したイメージスキャナー、ビデオ入出力、カラープリンター、CD レコーダー等マルチメディア（画像・音声）の入出力機器環境の拡大を図ろうとしている。

次に、通信インフラの緒元において電子メール等ネットワークアクセス利用のサポートサービス運用を立ち上げる諸担当としてハード、ソフトの増強、テクニカル支援の方策をより経験的なメーカーの協力の下、早期の実現に検討、処置を推進中である。

これから的情報インフラ、マルチメディアツールの形態は凡そ 4 つに大別されるように思える。

1. Data Processing
(数値解析、統計、シュミレーション等)
2. Information Retrieval
(データベース検索、文献検索等)
3. Desktop Publishing (EP, CAP の概念等)
(PC, W/S 等の電子編集・印刷)
(段組、枠組、貼付、図版、写真修正、イラスト作成等)
4. Communication NetWare
(電子メール、BBS 等)
(情報疎通の改善、連絡事務の効率化、情報広場等)

また、4 つの形態の基盤となるネットワークインフラのマルチメディア交換施設 (ATM 交換システム) が早く標準化されユーザーの各ハード、ソフトにインターフェイスされるマルチメディア時代が待ち遠しい。

以上 4 つのインフラを医学部各委員会で順次検討、考慮しながら実現実行に結び付けたい。



湘南藤沢メディアセンター

こ はやし けい しゅ
小 林 啓 樹

(湘南藤沢メディアセンター課長代理)

1. はじめに

湘南藤沢キャンパス（以下 SFC と略す）は平成 2 年度の開設から 6 年目を迎え、学部（総合政策学部、環境情報学部）は 2 期生までを社会に送り出し、大学院は平成 6 年度の修士課程（政策・メディア研究科）の開設で現在 2 年生まで揃った状況である。あとは平成 8 年度に開設予定の博士課程でキャンパスは真の完成を迎えることになる。

SFC のポリシーの一つに、誰もが情報処理能力を有し、教育も研究もコンピュータとネットワークをツールとして活用し、その効果を上げるということがある。メディアセンターはそれらの利用環境を維持・整備すると共に、利用者への利用支援サービスを担当しているが、本稿では、創設期を振り返りながら現在のキャンパスネットワークシステム（以下 CNS と略す）の概況などを紹介したい。

なお、大学院にも CNS とは別にネットワークが敷設されたが特にここでは触れない。

2. CNS の利用者とメディアセンター

まず最初に、CNS の利用者はどのくらいで、メディアセンターはどんなことをやっているのか、ということを簡単に紹介する。

CNS にアカウントを持っている利用者としては、学部生約 4000 名、大学院生約 320 名、教職員約 230 名、非常勤講師約 60 名、外部共同研究者約 80 名、その他約 300 名で合計約 5000 名が登録されている。

メディアセンターは、これらの利用者に対して、CNS の維持管理を始めとした運用とサービスを行なっている。その主な業務としては、

- (1) 窓口サービス
 - 各種申請書の受け付け
 - 各種相談対応
- (2) アカウント管理
- (3) アドレス管理
- (4) ソフトウェア管理
- (5) ハードウェア管理
- (6) トラブルシューティング

などが挙げられる。個々について紙面の都合から詳しくは説明できないが、この運用業務を支えるスタッフは次の通りである。

- | | |
|-------------|----------|
| (1) 職員 | 2名 |
| (2) 研究嘱託 | 2名 |
| (3) 委託エンジニア | 5名 |
| (4) コンサルタント | 4名枠（学部生） |

前後するが、CNS に関わる様々な方針は、ネットワークシステム委員会（メディアセンターの専門委員会として両学部から選出された委員で構成される）で審議され、これに基づいて運用スタッフが運用を行なっている。

3. SFC 創設期 4 年間の利用環境

平成 2 年度の SFC 開設初年度は、建物が全て完成していたわけではなく、メディアセンター棟も翌年に完成した一つである。また、研究・講義棟の一部もそうであった。

このことで、CNS の心臓部である各種サーバ・ルータ類の機器は、完成している各研究棟（4 棟）内の共同研究室を間借りした形で分散設置せざるを得ない配置となった。建物間を結ぶ基幹となる FDDI ネットワークは、大まかに言うと各建物のこれらのサーバ・ルータ類を設置した部屋を結ぶ形態で敷設されたのである。

4 棟に分散設置されたファイルサーバには、利用者のデータが格納されているが、日々のバックアップ作業のためのテープハンドリングでも毎日 4 棟を巡回していたのを思い出す。また、サーバ・ルータ類のトラブルが発生する度、あちらこちらと行ったり来たりしていたものである。

この時学生が利用できた機器は、初年度 40 台の

ワークステーションが設置されている教室が 4 室で計 160 台であった。もっともまだ 1000 名強の 1 年生しかおらず、ここで必修の情報処理教育を受け、自習やレポート作成等もここで全て賄なった。

平成 3 年度にメディアセンター棟が完成したが、FDDI リングに新たに加わった形態のため、サーバ・ルータの分散配置は 4 年間続いた。

メディアセンター内には、開館時間内なら誰でも自由に利用できるワークステーションが約 120 台程設置された。

さらに、3 教室（40 台設置規模の）が加わり、合計約 400 台が学生に提供できるようになった。

これらの機器を使い、学生たちはレポート作成、情報交換、統計処理、プログラミング等を行なってきた。

4. CNS のリプレース

平成 2 年度の SFC 創設当初導入された機器及びネットワークは、その当時最新の設備を有した数少ない環境であった。しかし、学部創設期の 4 年間日夜使い込んだ機器の老朽化と、ネットワークのトラフィックの激増により、その見直しとリプレースが余儀なくなってしまった。

創設から 5 年目にあたる平成 6 年度に、まず最初のリプレースが行なわれたのであるが、そのポイントは次の通りである。

(1) ネットワークの張り替え

従来のリング型の基幹ネットワークを止め、メディアセンター棟にサーバ・ルータを集約し、ここから各建物にスター型にケーブリングを行なった。また建物内は、トラフィックの分散を図るためにセグメントの細分化を行なった。

(2) ワークステーションのリプレース

初年度に設置した 4 教室（160 台）のリプレースを行なった。この教室は、1 年生の情報処理教育を中心に行なうことから、管理の容易性等を考慮し X 端末を採用した。

平成 7 年度のリプレースは、創設 2 年目に導入された、3 教室分のワークステーション、メディ

アセンター設置のワークステーションの一部、研究用ワークステーションのリプレースを中心に行なった。もとからマルチベンダで構成されている CNS であることから今回多くのベンダからの導入となつた。

5. 今後の課題

メディアセンターはこれからも、CNS がキャンパスの教育・研究のインフラとしてより有効に活用されるための整備を行なっていくつもりであるが、今後重点的に考えて行かなければならぬと思う点を幾つか挙げてみたい。

(1) ソフトウェア管理体制の整備

ネットワーク環境下に様々なソフトウェアが搭載され更新されていくが、その導入形態も様々で、ライセンスソフトウェアを始めとしフリー ウェア、パブリックドメイン等が混在することになり、今後は導入量もより増えていくことになるはずである。

まず、バージョン管理、ライセンス管理を行うためのツールを作成することが必要な時期に来ていると痛感している。また、今後ソフトウェア導入・更新のため費用がより大きな位置付けを占めてくることになり、その予算確保は大きな課題となってくる。

そのためにも、いつでもネットワーク上のソフトウェアを見直せる体制を整備する必要があると思う。

(2) ネットワーク技術者の確保・養成

これは一番重要事項と考えているが、世の中全

般に技術者が不足していると言われている通り義塾も例外ではない。今後全塾的なネットワーク整備構想が具体化されていく中で、技術的裏付けを持った人材を確保養成していくことは必須の条件であり SFC においても大きな課題である。

良いネットワークは、良い人材をどれだけ育てるかで決まる、とは言い過ぎであろうか。

(3) 全塾ネットワークの整備に向けて

全塾的な情報インフラとしてのネットワーク整備が始まったが、5つに分かれている各キャンパスを大きなポリシーの元に連結・整備・運用するのは大仕事である。メディアネット本部を中心にこの事業が開始されている中で、SFC も他キャンパスと連動しながら、様々な問題をクリアすべく努力したいと考えている。

5. おわりに

編集委員から「コンピュータの新しい利用環境」という表題を頂き、原稿を書いてみるとどうも期待して頂いたような内容になつてないことに改めて気が付いた。

もっと CNS の状況をより具体的に紹介すべきだったのだろうが、筆者が SFC に初年度から在籍していることもあり、当初のころからを思い出しながら書き始めてしまった。

とはいって、「今後の課題」の人材確保・養成の重要性は日頃一番身に染みて感じていることであり、塾当局を始め関係部局の理解を得ながら将来に向けての体制を整備していく必要があると強く感じている。

慶應義塾写真データベース検索システム

メディアネットでは、慶應義塾に固有の情報をデジタル化して世の中に送りだすべく様々な企画をもっている。福澤研究センターと医学部史料委員会が保管している幕末以来の写真を、画像情報データベース化した標記のシステムがこの度実験的にサービス可能となつた。初年度は、収録写真も千枚程度だが、次第に広げていく予定となっている。

専用のサーバに搭載され、塾内の諸施設から歴史的な写真を鮮明画像として見ることができる。いずれはインターネット上への公開を予定している。

このシステムを作るにあたっては、共同開発者である日立製作所の多大のご尽力をいただいた。

＜ティールーム＞

マネージメント&リソース・センター

ふじしませいたろう
藤島清太郎

振り返ってみると大学入学後より現在に至るまで、様々な形で図書館にお世話になりました。学生時代には大学内の居場所がなく、医師国家試験の前に、同級生達と図書館で一日中過ごす日々が続きました。内科入局後は、受け持つ患者さんごとに教科書だけでは説明のつかない点があり、その都度図書館に足を運んだものです。当時はまだ CD-ROM などなく、分厚い Index Medicus や医学中央雑誌を調べるしかなかったので、文献調査は半日がかりでした。

その後1988年より2年半ほどアメリカに留学する機会がありました。特に大学図書館の充実度には目を見はるものがあり、随分とお世話になりました。全てはマイペースで個人主義のアメリカ社会で、図書館は毎夜11時まで開館しており、非常に心強く感じたものです。中はいつも快適で、読書スペースが十分取られており、いつでも最新の情報に触れることができました。当時既に MEDLINE CD-ROM が常備されていたのですが、当時はまさか無料とは思いもよらず、後でもっと早く使っていたら良かったと後悔したのを覚えています。翌年になると、大学の粹な計らいで、ポスドクであった私たちまで無料でアカウント No. がもらえ、自宅の Mac からいつでも MEDLINE にアクセス出来るようになりました。このため、多少図書館に足を運ぶ回数も減りましたが、相変わらず週に2回位は通っていました。

1991年に帰国してみると、医学メディアセンターにも MEDLINE CD-ROM が既に導入され、無料で公開されていたので、さすがは義塾メディアセンターと感心し、さっそく利用させていただきました。

た。その後 CD-ROM の台数も増設されてきていましたが、次のステップとして研究室や自宅から MEDLINE へアクセスする環境を是非実現してほしいものです。

FAX が普及したのはつい最近のような気がしますが、今ではインターネットがアメリカのみならず、日本においても大学・研究機関在籍者にとり当たり前の環境になりつつあります。MEDLINE, Gene Bank へのアクセス、海外の研究者とのやり取り、海外への試薬・機器の直接注文などがいとも簡単にできます。近頃では私が電子メールのアドレスを持っていないので、海外の友人が私宛の手紙を出すのに苦労しているようです。信濃町キャンパスにも今年度中に光ファイバーによるコンピュータネットが引かれるとのことなので、ようやく我々も電子メール仲間に入れるものと心待ちにしています。

今や図書館は単に雑誌や本を供覧する場ではなくなります。塾内には上でも触れたごとく、近々大容量コンピュータネットワークが張り巡らされますが、医学メディアセンターは、これを契機に膨大な量の医学情報を積極的に導入し、かつ自ら情報の一大発信基地になってはいただけないでしょうか？せっかくの大容量ネットを、電子メール程度にしか利用しないのは余りにももったいない気がします。例えば、医学メディアセンター自らカラー図表入りの医学雑誌を電子出版しネット上で公開する。幾つかの専門領域ごとのパネルを運営し、学内外研究者相互のプレリミナリーなデータ、論文のリアルタイムな閲覧・意見交換を可能にする。塾内各部門・研究室ごとに進行中のテーマ表示や共同研究提案用の掲示板を設け、各キャンパス内は当然のことキャンパスを越えた共同研究を推進する。などなど。

近い将来、必ずや全世界の情報を自由に受信でき、こちらの情報も発信できるようになるものと信じ、かつ願っています。そのために、医学メディアセンターが膨大な情報のマネージメント&リソース・センターとして御活躍くださることを熱く期待しています。

(慶應義塾大学医学部救急部)

慶應義塾情報スーパーハイウェイの構築

おお が ゆたか
大 賀 裕

(理工学メディアセンター課長)

1. はじめに

慶應義塾は、社会システム全体への影響をもたらす高度情報化のための基盤整備として、慶應義塾情報スーパーハイウェイを構築中である。

この情報基盤整備に関する配線工事は、1995年2月より開始され、1996年2月をもって終了する予定である。

工事行程は、第一期、第二期に分けられて施行されている。第一期工事は、三田、信濃町、矢上、湘南藤沢各キャンパスを、NTT（日本電信電話株式会社）の高速・広帯域バックボーンネットワーク（156 Mbit/s）を用いた、ATM-WAN（Asynchronous Transfer Mode-Wide Area Network）で結ぶ高速キャンパス間ネットワークの構築と、NTTとのマルチメディア通信共同利用実験参加者の研究室のマルチメディアワークステーション等から ATM スイッチまでの光ケーブル配線、及び、三田新研究室棟内 LAN（Local Area Network）敷設である。

第二期工事としては、矢上キャンパス、日吉キャンパス間の ATM 回線接続と、既に配線工事が終了している湘南藤沢キャンパスを除く、各キャンパス内の LAN 敷設に関する工事である。

第一期工事終了後、本年5月31日に情報スーパーハイウェイの試験運用の開始にあたり、三田北新館で、報道発表を兼ねオープニングセレモニーが開催された。当日は、インターネットアクセス、超高精細画像ディスプレイ（SHD-Super High Definition）、人体ウォータースルー、MRI 画像処理、モバイルユニット、WWW（World Wide Web）を用いた CAI システム CALAT、LSI 設計システム PARTHENON のデモンストレーションや、塾長、各学部長によるパネルディ

スカッション『21世紀に向けての慶應義塾の情報インフラとディジタルユニバーシティ構想』が行われた。

第二期工事は、当初計画より若干の遅れがあるものの、三田キャンパスが10月末、日吉キャンパスが11月中旬、信濃町、矢上キャンパスが2月末に完成する。またネットワーク機器として、キャンパスサーバ、マルチメディアステーション、大型高精細ディスプレイ、超高精細画像サーバ、写真 DB 検索システムなどが導入される。

慶應義塾大学情報スーパーハイウェイにおける情報化の促進は、慶應義塾に情報という血液を流す人体の血管網を張りめぐらすことに例えることができる。情報の大動脈となるのが、ATM 網による高速なキャンパス間通信であり、末端の組織までの毛細血管となるのが、各研究室・教室に設置される情報コンセントである。この血管網により人体の各細胞となる義塾に関わるもの全員に、血液がうまく流れることにより、組織は大きく、また力強く成長することとなる。

2. キャンパス間ネットワーク

大動脈を構成する高速キャンパス間ネットワークは、ATM 通信により実現されつつある。ATM 通信で現在のキャンパス間の通信速度は約20—200倍に向上する予定である。

新しい通信技術であるために運用面、研究面での実験が必要となっている。三田、信濃町、矢上、湘南藤沢の各キャンパスに加え、NTT 横須賀通信研究所が、NTT によるバックボーンネットワークで、リング状に接続され、バックボーンネットワークから情報を取り出す ATM スイッチが、各キャンパスに設置されている。さらにそ

のスイッチには、情報を既存の計算機ネットワークとやり取りするための専用ルータや ATM 実験用のマルチメディアワークステーションが接続されている。

ATM の通信形態は、電話と同様の二者間の通信、ポイント・ツー・ポイントの通信である。さらに、通信速度が非常に高速なだけでなく、必要な通信速度の帯域を確保し、変更が可能なことも大きな特徴となっている。このような性質から、処理能力が格段に向上した計算機には、相互接続される台数が飛躍的に増加し、障害となってきたネットワークの通信速度を向上させ、その上に、次世代の情報社会へ向けて、音声や映像を情報として扱うマルチメディア通信といった実時間性や連続性の必要な情報の通信を提供することが可能となっている。

ATM 通信のための接続形態には、PVC (Permanent Virtual Channel) と SVC (Switched Virtual Channel) 方式がある。PVC は接続の際に管理手続きが必要なのに対し、SVC では信号により自動的に接続を確立する。そこで、PVC は常時接続しておく計算機に対して利用され、SVC は一時的に接続する計算機に利用される。

各キャンパスはリング状に ATM 回線で結合され、実験用の SVC 接続と共に、メッシュ状に 10 Mbit/s で PVC 接続される予定である。現状としては、実験的にいくつかのキャンパスのルータ間に PVC を張り、接続テストが行われている。特に三田一矢上間では、既存の 192 Kbit/s のデジタル専用回線による接続を迂回ルート化し、ATM の PVC 接続へと切替えて 10 Mbit/s、つまり、従来の約50倍の通信速度で情報が送受信されている。さらにそのルータ間では、情報の流れを制御する経路制御プロトコルの一つである、OSPF プロトコル (Open Shortest Path First routing) を新規に採用し、通信回線の太さを考慮した柔軟な経路制御を行っている。

また、NTT との共同実験などに用いられるマルチメディア機器などは、SVC 接続により ATM ネットワークに接続されている。いくつかのプロジェクトが進行しているが、同時に多サイトに情報を送信することが可能なマルチキャスト通信を

用い、音声・映像を各キャンパス間で常時送受信し、一般にビデオ会議と呼ばれるものも行われている。さらに、通信速度のテストなども行われ、実験により ATM という新たな技術に対する知見を蓄積するだけでなく、慶應義塾の大動脈としての運用面での安定性なども実際的な実験・運用を通して確認されている。

3. キャンパス内ネットワーク

現在進行中である第二期工事は、既にケーブル敷設済みの湘南藤沢キャンパスを除く慶應義塾の全キャンパスの全ての建物の各部屋に情報コンセントを設置するものである。第二期工事に使用される光ケーブルは、2 芯の光ケーブルに換算すると、520 km を超える。これは、概ね東北新幹線の東京—盛岡間にあたる。新設される情報コンセントの数は、3260口である。

これらは、それぞれのキャンパスの部屋数やネットワークの使用予測を基に設計された。このネットワークの基本的な配線システムは、以下の通りである。

(1) 各キャンパスのネットワーク制御室から各建物間に 20芯から 80芯の光ファイバケーブルをスター状に敷設し、メインパッチパネルに収容する。

(2) 各建物のメインパッチパネルから縦系配線として、20芯の光ファイバケーブルを各階設置のパッチパネルに収容する。

(3) 教室や研究室には、各フロアのパッチパネルから各種ハブ装置やネットワーク機器室に置かれたコンセントレータや ATM スイッチなどのネットワーク装置を通じ、10 Mbit/s から 156 Mbit/s 対応の光ケーブルやカテゴリ 5 のツイストペアケーブルを配線し、情報コンセントの形で提供する。

この配線システムは、既存ネットワークの活用および、従来のネットワークの限界と技術が定着しつつあるスイッチの複数化によるマルチメディア通信を意識したものである。

4. 情報スーパーハイウェイの利用

情報ハイウェイを利用して、全塾の学生、大学

院生、教職員がネットワークに参加し、電子メールや電子ニュース、各種情報サービスを通じ、塾内はもとより、インターネット経由で外部組織との情報の受発信を行うことになる。これに伴い全塾規模の情報空間を創設し、情報の相互アクセスを行うことにより研究教育活動の活性化が図られることになる。教育面では、ネットワークを効率的に利用して全塾的に、コンピュータリテラシーおよびメディアリテラシーを中心とする情報処理教育を実施すると共に、情報処理以外の教育分野でも、高速ネットワークに接続されたマルチメディア機器を駆使した学部独自のコースウェアの開発が行われる。このことは、遠隔講義システムを含む新しい教育システムのビジョンを創造していくことになる。また図書館、アートセンター、事務システムとも連携しデジタルユニバーシティを目指して行くことになる。

また、昨年10月から開始された、慶應義塾とNTTとのマルチメディア通信共同実験『超高精細画像マルチメディアと超高速コンピュータネットワーク実験』は将来のマルチメディア社会のインフラストラクチャの新たな利用方法と技術の創造開発を目指すものである。

実験項目は、次世代キャンパスネットワーク、マルチメディア基盤技術、テレエデュケーション、テレメディスンの4つである。

マルチメディア基盤技術の研究では、マルチメディアプロトコルの開発、ハードウェアへの実装、次世代分散オペレーティングシステムの研究開発が行われる。テレエデュケーションでは、超高速ネットワーク技術とマルチメディア処理技術を高度に活用し、時間・空間・個人差を超越した分散教育環境を実現する。ここでは分散型知的CAI (Computer Assisted Instruction) サービスを実現する CALAT を利用し、リアルタイムの、映像、音声、コンピュータグラフィックスを駆使した実証実験が行われる。

テレメディスンの研究は、HDTV の約6倍の高精細画像を表示可能な SHD 超高精細ディスプレイを用いて、医学部に X 線画像用デジタイザや、デジタル顕微鏡を設置し、電子化が困難であった X 線や病理画像を扱う実験を行い、遠隔

医療システム、医療診断システムを実現することにより、高度医療の広範な提供を目指すものである。

また、義塾との共同研究以外でも、塾関係者の関わる実験として、バーチャルラボ共同利用実験、オンラインユニバーシティ、情報共用空間創設実験、日本ケーブルテレビ共同実験などがあり、これらネットワークとの共同利用も貴重な研究課題となる。

5. おわりに

慶應義塾スーパーハイウェイは、塾長はじめ、担当常任理事、メディアネット・メディアセンター、各地区ネットワーク委員会委員、施設部、研究者、塾外協力機関など、多くの方々の努力が結集されて構築される義塾にとって一大事業である。

敷設された配線システムを使って、いかに論理ネットワークを構成するか、技術進歩を念頭において、運用組織をいかに再構築していくか、など議論すべき重要な課題が山積している。

しかし最も重要なことは、情報スーパーハイウェイの利用を不斷に自由な発想で考え、提案し、実証実験に多くの人々が参加することであるはずである。

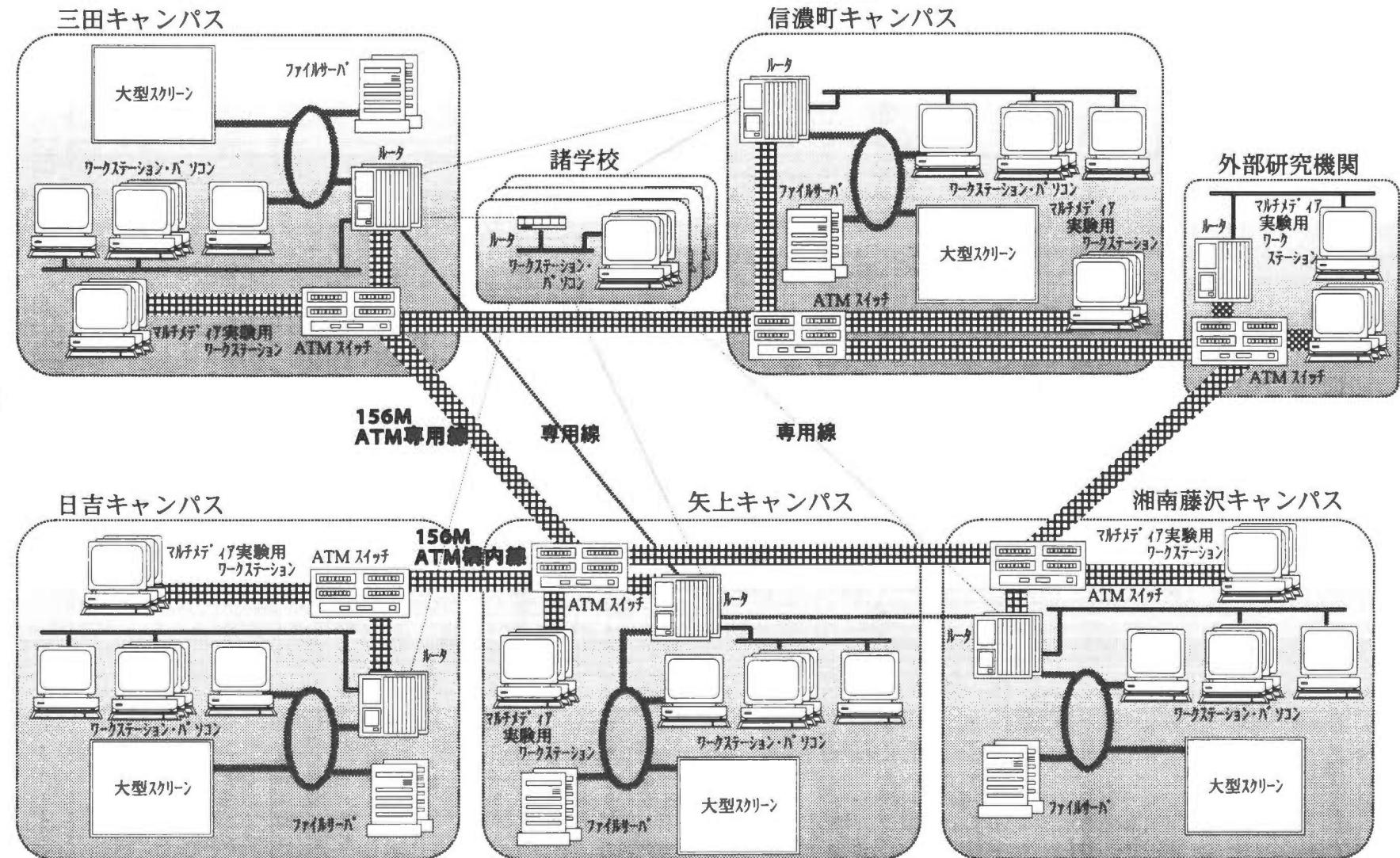
21世紀を迎えるに当たって、良質な血液（情報）が、情報スーパーハイウェイに流れ、細胞が活性化し、慶應義塾は、元気のあるデジタルユニバーシティへと変貌していく。

近い将来、情報スーパーハイウェイは諸学校にも拡張される予定である。

参考文献

1. 慶應義塾報 塾内ニュース “全塾ネットワークの計画について” No.87 (1995.7.3)
2. 慶應義塾報 塾内ニュース “義塾の今後の高度情報化政策について” No.85 (1995.1.16)
3. 南部 明、小野定康、徳田英幸、所真理雄 “超高精細画像マルチメディアと超高速ネットワーク実験” 情処研報 IM-21 (1995)
4. 斎藤信男 “情報ハイウェイの利用” 電子情報通信学会誌 Vol.78, No.4 p.380-383 (1995)

慶應義塾情報スーパーハイウェイ構想図 (June 7, 1995)



CD-ROM データベース検索サービス

—キャンパスネットワークからの利用—

せい の さ なえ
清野早苗

(理工学メディアセンター係主任)

1. これまでの文献検索

理工学メディアセンターにおける文献検索は、最近まで、冊子形態の二次資料を使う従来通りの方法が主であり、場合によって外部データベースをオンラインで検索していた。変化の動きは一昨年の INSPEC の CD-ROM 版の利用から始まった。

この INSPEC は冊子形態の Science abstracts の ABC の 3 セクション（当館所蔵：1927 年～）が一つになったものである。CD-ROM 版は 1989 年～であるため、それ以前の検索は冊子形態で行い、最近の文献を検索する場合は CD-ROM 版か冊子形態を使う、というように使い分けている。

その後、順次 CD-ROM 形態の二次資料の種類も増えてきている。ただし、今までそれは館内の 1 台のパソコンでしか利用できなかったため、CD-ROM コーナーでは順番待ちの学生の姿がよくみられた。

2. サービスの開始

「CD-ROM データベース検索サービス」は今年の 6 月から開始された。館内では同時に複数の端末で検索ができるようになると共に、館外からの利用も可能になった。機能面では、検索時間が格段に短縮されたり、利用統計を機械でカウントできる等たいへん使い易くなった。またサービス時間について

も、開館時間に關係なくいつでも利用できるようになっている（但しデータ更新時等は除く）。

3. データベースの種類と利用方法

このサービスでは現在、5 種類のデータベースが利用できる。元になるデータは CD-ROM を媒体として購入したもので、データベースの種類は表 1 の通りである。

これらを提供するシステムは UNIX と NetWare の 2 種類に大別される。どちらのシステムも館外からは、図書館内にあるそれぞれのサーバに telnet で接続して利用するようになっている。

UNIX では Current Contents と Compendex を提供している。前者は館内全キャンパスから利用できるが、後者は契約上理工学部内に利用が限定されている。検索用のソフトウェアはどちらも OVID で、検索結果は電子メールかまたは端末の screen capture 機能で受け取るようになっている。

NetWare では INSPEC と Science Citation

表 1 データベースの種類

(1) UNIX (検索ソフトウェアは OVID) で提供

データベース名	内 容	収録期間等	利 用 方 法
Current Contents	人文・社会、自然科学 (目次速報・抄録)	最新 6 カ月 更新／毎週	館内全キャンパス telnet で接続して利用
Compendex	工学分野 (書誌索引)	1987 更新／毎月	理工学部内 telnet で接続して利用

(2) NetWare (検索ソフトウェアは個別) で提供

データベース名	内 容	収録期間等	利 用 方 法
INSPEC	物理・電気・コンピュータ関連 (書誌索引)	1989 更新／年 4 回	理工学部内
Science Citation Index	自然科学全般 (書誌・引用索引)	1994 更新／毎月	館内の端末で検索または 館外から telnet で接続して利用する
MathSci	数学 (書誌索引)	1988 更新／年 2 回	

Index と MathSci を提供している。NetWare は理工学部内（館内または館外）からの利用のみ可能で、検索用のソフトウェアはデータベース毎に異なっている。館内で利用する場合は、検索結果を print や save の機能を用いて紙またはフロッピーディスクで入手できる。しかし館外から利用する場合は、今のところそれらの機能が使えないため、画面のハードコピーで代用してもらっている。

利用資格は、本学に所属する教職員・学生等の個人であるが、UNIX (OVID) については予め利用申請した登録者のみに利用を限定している。NetWare については利用申請等の必要はない。運用にあたり、料金は全て無料としている。

4. 利用説明会の実施

サービスの開始と同時に「CD-ROM データベース検索サービス利用説明会」を企画し、開催している。

説明会は主に研究室単位とし、予め都合の良い日時を予約してもらう方法で行っている。内容はサービスの概要と利用方法、それに 5 種類のデータベースの紹介と検索方法の説明である。特に研究分野に適したデータベースについては、キー操作の実習等も加えている。所要時間は約 1 時間 20 分。今年度はこの説明会を年間を通して実施する計画になっている。

サービスを開始する前から利用者の関心は高く、開始時期や利用方法・データベースの種類等

表 2 理工学部の説明会実施状況（学科別）

期間：1995年 6～8月

学科	機械	電気	応用 化学	計測	管理	数理	物理	化学	合計
回 数	7	6	5	4	2	1	6	0	31
参加人數	64	54	53	32	18	1	40	0	262

表 3 UNIX (OVID) の登録人数

（地区別身別 分別 単位：人）

1995年 8月末現在

地区 身分	三田	日吉	信濃町	矢上	湘南藤沢	合計
修 士	1			53	5	59
博 士				16		16
教 員	1	7	18	19	3	48
職 員	10	2	1	5	4	22
合 計	12	9	19	93	12	145

表 4 UNIX (OVID) の利用状況

（地区別身別 分別 延べ回数）

期間：1995年 6～8月

地区 身分	三田	日吉	信濃町	矢上	湘南藤沢	地区の 別なし	合計
修 士	1			140	19	—	160
博 士			2	26		—	28
教 員		4	17	46	7	—	74
職 員	—	—	—	—	—	136	136
合 計	1	4	19	212	26	136	398

（注）職員の利用統計は地区別にならっていないため「地区の別なし」とした

表 5 NetWare 利用状況（学科別身別 延べ回数）

期間：1995年 6～8月

学科 身分	機械	電気	応用 化学	計測	管理	数理	物理	化学	計算 機 学	物質 科学	生 体 工 学	その他	合 計
学 部	116	424	59	197	8	10	42	0	—	—	—	—	856
修 士	142	344	100	155	31	15	150	11	54	116	80	—	1,198
博 士	45	195	36	46	36	3	109	0	48	25	21	—	564
教 員	17	35	30	19	4	38	30	2	1	1	1	—	178
職 員	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	487	487
その 他	2	1	9	0	1	5	2	0	1	11	15	446	793
合 計	322	999	234	417	80	71	333	13	104	153	117	933	3,776

（注）各学科の身分「その他」は研究生。身分・学科共「その他」は入力ミスによるもの（統計は利用の都度の利用者本人の項目選択によっているため）

表6 1台のパソコンで利用していた時の
INSPEC の利用件数

期 間	件 数
1993年4月～1994年3月（1年間）	867
1994年4月～1995年3月（1年間）	1,623
1995年4月～6月2日（約2ヶ月）	385

についての問い合わせが多かったが、 こうした反応は説明会への参加にも表れている。理工学部の各学科別の説明会実施状況は表2の通りである。

他キャンパスからの利用は、 前述のように今のところデータベース1種類 (Current Contents) に限られているが、 利用者への説明は各地区の担当者が行っている。それらの担当者に対する説明もサービス開始前に実施された。

5. 利用申請および利用状況

UNIX (OVID) の利用申請は各キャンパスで受け付けし、 登録作業は理工学メディアセンターで行っている。登録状況は表3の通りである。

また、 UNIX (OVID) と NetWare のそれぞれの利用状況は表4、 表5の通りであるが、 参考までに、 以前の利用統計の数字を表6にした。これは1台のパソコンで利用していた時のINSPECの利用件数である。表5、 表6をみると、 利用件

数が大幅に増えてきていることが分かるが、 同時に表6の数字からは、 新しいサービスの利用を盛んにする下地がこの2年の間にできてきたことも伺える。

6. これからの文献検索

冊子形態の二次資料を丹念に調べて文献を探す時代が長く続いた。それが現在では、 文献に関する情報をさまざまな手段で入手できる。冊子形態、 CD-ROM版、 オンライン情報検索、 ネットワーク上の情報入手、 等々。そのなかでも特にCD-ROM化が盛んである。これまで冊子形態やオンラインで利用してきた主要な二次資料が次々に商品化されている。そして、 このような状況が年単位というより月単位で激しく変化している。

今後はその多様な選択肢の中から複数のものを選び、 それらを組み合わせて利用していくことになると思われる。選ぶ難しさはあるが、 今回一つの選択が新しいサービスとして実を結んだ。従来のサービスに新たに加わったこの「CD-ROMデータベース検索サービス」を利用者は非常に喜んでいる。わずか3カ月の利用実績は、 表3～表5にみられる通りである。理工学メディアセンターもこの新しいサービスの開始によって、 新しい文献検索・情報入手の時代を迎えた。

計算機利用の新制度

1995年4月より、 湘南藤沢メディアセンターを除く各地区計算室の計算機利用制度が変更となった。汎用計算機 (メインフレーム) 利用料が従量課金制から登録制に移行したことにより、 登録料を払えば汎用計算機とワークステーションが利用できる。ただし、 スーパーコンピュータについては従量課金制を継続している。パソコンは従来通り利用登録の必要はない。

1. 登録料について

登録料として、 年間 (5,000円) 又は半期 (3,000円) を支払うことにより、 汎用計算機とワークステーションの各資源を利用できる。ただし、 ワークステーションの利用登録は1名に

ついて1地区1ID (ログイン名) とする。汎用計算機は1名について複数ID (課題番号) 登録できるが、 登録料はID毎に必要となる。また、 汎用計算機の子課題制度は廃止した。

2. 計算機資源の利用上限について

※以下()内は半期登録

(1) 汎用計算機

- CPU 利用時間 4,800秒 (2,400秒) まで
- 出力プリント枚数 1,500枚 (900枚) まで
- ディスク利用量 100 TRK まで

(2) ワークステーション

- CPU 利用時間 特に制限を設けない
※稼働運用上の制限は有り
- 出力プリント枚数 600枚 (300枚) まで
- ディスク利用量 10 MB まで

CD-ROM データベース検索サービス

—検索システムとネットワークの構成—

さわ き とし ろう
沢 木 敏 郎
(理工学メディアセンター)

理工学メディアセンターでは、本年6月から、ネットワークを利用したCD-ROMデータベース検索サービスを行っています。本稿では、このサービスの仕組みを中心にCD-ROMとそのネットワーク利用について概説します。

「CD-ROMデータベース検索サービス」という名称は、大学の図書館にCD-ROMを導入する場合にその用途はほとんどがデータベース検索であることから設定しました。これは、現時点でのサービス内容は文献データベースだけですが、美術品の画像データベースや百科辞典など、さらに各種名簿や会社案内のようなものまでも含み得る「広い意味でのデータベース検索」という意味も持っています。

1. CD-ROMとは

CD-ROMという言葉は、最近では一般にも使われているようです。雑誌などの付録にCD-ROMが付いているのも特別ではなくなりました。しかし、音楽用のCDとどこが違うのか、電子ブックは大きさが違うけどCD-ROMなのか、カラオケCDや絵の出るCDは、PhotoCDやVideoCDは、カーナビゲーションシステムや家庭用ゲーム機のソフトもCD-ROMじゃないのか、などと聞かれて答えられる方は少ないのではないでしょうか。

CD-ROMのベースは1982年に登場した音楽用のCDです。ご存じの通りCDは音楽をデジタル情報として記録したものです。デジタル情報ならばコンピュータのデータ記録用にも適しているのでは、として転用したものがCD-ROMなのです。このCD-ROMには国際的に統一された規格があるので、その規格に準拠した機器やコン

ピュータであれば読み取りが可能です。このためCD-ROMは現在のところもっとも標準的な電子出版の媒体として使われています。

世界で最初に一般向けに発売されたCD-ROMによる電子出版物は、1987年にアメリカのマイクロソフト社から発売された「Microsoft Bookshelf」です。これは十種類の辞書・辞典や年鑑などを収録したものです。これ以来、特にここ数年CD-ROMによる電子出版物を発行する出版社は年々増えています。さらに最近では動画や音声などを加えたいわゆるマルチメディアタイトルが数多く発売されています。

CD-ROMは大量生産をすると非常に安価にできるため、最近のソフトウェアなどはフロッピーディスクよりも安い価格設定になっていることもあります。また、書き込み可能なCD-ROMであるCD-Rや写真屋で作ってもらえるPhotoCDなどのように一枚だけでも簡単に作成できる種類も増えてきたため、社内の保存文書や個人用データなどにも数多く利用されるようになっています。これらの理由から、月ごとや週ごとにアップデートされるデータベースの供給媒体としても大変優れています。

2. CD-ROMデータベース検索サービス

CD-ROMがデータベースの媒体として使いやすく供給も増えていることは前述した通りです。ここでは、これをネットワーク上で利用するメリットと、理工学メディアセンターのシステムの構成や現時点での問題点などについて解説します。

2.1. ネットワーク化

「CD-ROM 検索システムのネットワーク化」と言う時の「ネットワーク」という言葉には二つの異なる意味があります。一つは「専用端末以外の外部のネットワークから遠隔利用する」ことで、もう一つは「サーバにある一つのデータを複数の端末で共有する」ことです。

前者のメリットは簡単です。自分の席に座ったまま検索ができるので図書館まで歩いて行かなくて済む、さらには自宅などから学校まで出掛けで行かなくて済むということです。

では後者のメリットは何でしょうか。これまでのスタンドアローンでの利用方法と比較して、なぜネットワーク化が必要なのかを考えてみます。一枚の CD-ROM を一台のコンピュータで検索する方法には、

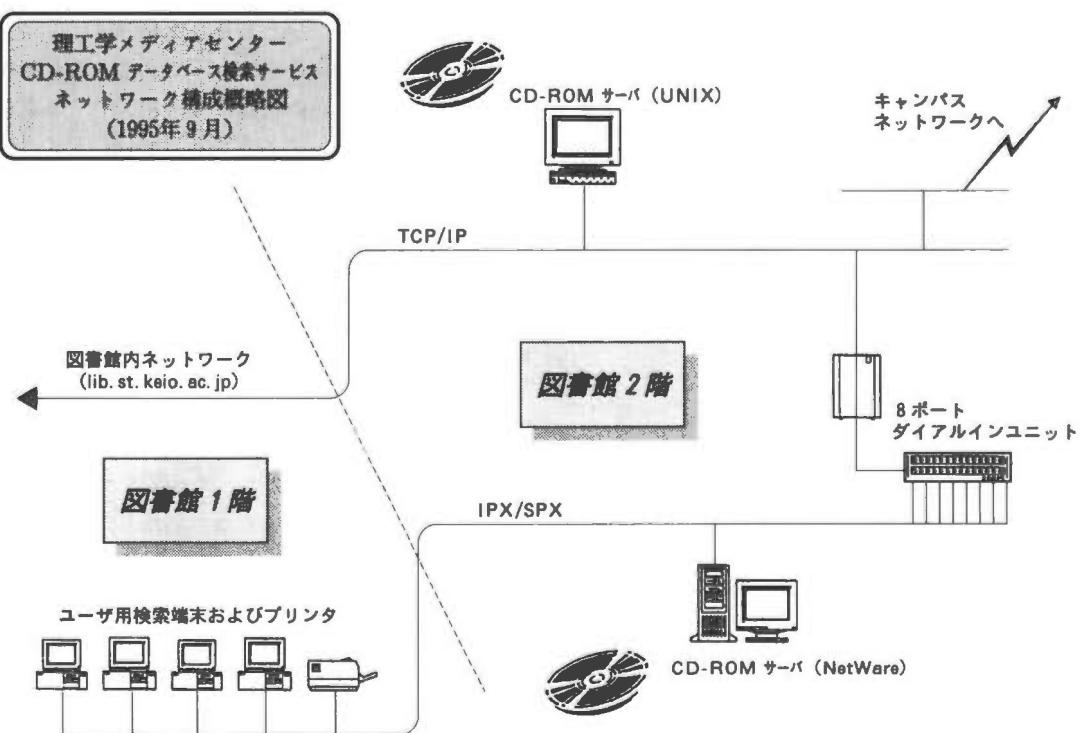
- ・一度に一人しか利用できない（当然）
 - ・一度に一枚の CD-ROM しか利用できない
 - ・コンピュータの台数分 CD-ROM が必要
- などのような欠点があります。

ところが、CD-ROM の種類が増えてきたこと

や、一つのデータベースで複数枚の CD-ROM を必要とするものが出てきたために、一台のコンピュータに複数の CD-ROM ドライブを接続したり CD チェンジャーを使用したりするようになりました。これにより上記の二番目の欠点は解消されましたが、その他は不可能なまま残されています。

これらの問題を解決するために登場したのが、複数の CD-ROM ドライブを持つコンピュータをサーバとし、各検索用端末からはそれらが自分のドライブであるように見えるようなネットワークシステムと LAN 対応の検索ソフトの組み合わせです。

これを導入することにより、スタンドアローン方式の欠点が解消されるだけではなく、CD-ROM の管理や端末のメンテナンスなども集中的に行えるので手間が省けるようになりました。また、データベースを端末台数分購入するよりもネットワーク利用の契約をする方が通常はライセンス料が安くなるというメリットもあります。



2.2. システム構成

理工学メディアセンターのシステムは、検索ソフトの動作プラットフォームによって二系統に分かれます。一方は UNIX ワークステーションを使用するもので、もう一方は MS-DOS/Windows パソコンを NetWare サーバにつないだものです。(図)

UNIX ワークステーションを使用するデータベースは外部から telnet 接続することによって利用します(図書館内のパソコンからも専用の検索ソフトによって利用できるようにしたいのですが、ライセンス上の問題が未決であるため現在は不可能です)。利用者側で用意するものは、図書館内にあるサーバに telnet できる VT100 相当の表示能力を持つ端末だけです。一般的のパソコンとネットワークソフトの組み合わせや、X-Windows の kterm などさえあればいいので、ネットワークのつながっているところでは特別な準備をしなくても利用できます。また、ユーザは検索結果を電子メールによって受け取ることができます。

NetWare を使用するデータベースは、主に図書館内の端末から専用の検索ソフトによって利用します。検索結果はフロッピーディスクにセーブするかネットワークプリンタに出力することができます。外部からこのデータベースを検索する時は、UNIX ベースのシステムと同様の端末から接続します。ただし NetWare はネットワークプロトコルが異なるため、利用者は直接接続できません。このために、ダイアルインユニットという、利用者からの telnet 接続を中継・変換して NetWare サーバに接続する装置を使います。これにより利用者は館内の専用端末とほぼ同様の検索を行えるようになります。

2.3. 問題点など

本システムにおいて未解決の問題点等をいくつか挙げておきます。

まず、技術的な問題として、telnet による外部からの利用時に、

- ・日本語を使用することができない
- ・画像など文字以外の情報を利用不可

- ・キー操作が面倒で覚えにくい
- ・表示速度が非常に遅い

という点が挙げられます。

外部ネットワークからの利用は「telnet ができれば特別の検索ソフトが不要である」という汎用性が特徴なのですが、このために操作性などが犠牲になることがあります。上記の問題はどれも、専用の検索ソフトを使用する館内の端末では生じない不都合です。

また、今後しばらくは CD-ROM で供給されるデータベースが増え続けると思われますが、現在のシステムでは一台のサーバに接続できる CD-ROM ドライブの台数に限界があるため、近い将来サーバの構築方法かネットワークの運用方針を考え直す必要があります。

データベースごとにライセンス形態が異なっているのもシステム構築を難しくしている原因の一つです。全塾から利用してよいデータベースとキャンパス内からだけしか利用できないデータベースが同じサーバ上にある場合に、外部から接続してくるユーザがどれを使うのかによって接続の可否を決める手段が無いからです。そもそも「ネットワーク利用」を技術的にどう解釈しているかもベンダによってまちまちであるのが現状です。

技術面以外の問題としては、専門の知識を持った職員が少ないために、トラブルやユーザからの技術的な質問や要望に対処しきれないという事が挙げられます。特にネットワーク利用をしているユーザは、電子メールや電子ニュースを始めとするさまざまな電子メディアを使用して質問や要求などをしますから、サポートする図書館側が不慣れで対応しきれなかったり、気がつかなかったりすることもあり得るでしょう。

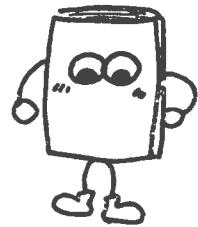
3. 終わりに

本サービスを開始して以来、ユーザから、「図書館が検索サービスをネットワーク化したと聞いたが、なぜ OPAC も研究室から検索できるようにならないのか」「なぜオンラインでのアンケートや利用説明が無いのか」「電子ニュースや電子メールでのサポートは無いのか」「図書館に行か

ずにオンラインでユーザ登録ができるようにはならないのか」「WWWの図書館のページから検索へのリンクが無いのはなぜか」「検索ソフトの出来が悪いので、生データを入手できないか」「サーバクライアントモデルになる予定は無いのか」などの質問を受けました。これらの要求は、いわゆるインターネット上で生活している者にとっては（特に理工学部ではなおさら）きわめて自然なものです。彼らは「すべての情報をネットワーク経由で」得たいと思っているため、まだまだ便利にはなっていないと思っているようです。それに対して現時点で我々が行っているのは、せ

いぜい限られたCD-ROMデータベースを共有・遠隔利用することに過ぎません。つまり図書館が持っている多種多様で膨大な情報のほんの一部だけをネットワーク上に供給し始めたばかりだということです。

今後、良きインフォメーションサプライヤとしてより手の掛かるサービスを行う為には、高度情報化社会の到来に先立って、ネットワーク的な諸問題や技術的な諸問題を謙虚な姿勢でスタッフが身に付ける努力をすることが急務であると思います。



Feel-Plus

外国雑誌一括納入システム

◇集荷方法： 海外集荷基地（ニューヨーク、ロンドン）において集荷し、エアカーゴにて東京配達センターに集中集荷します。

◇自動クレーム： コンピュータへのデータ入力により入荷、欠号、遅延状況を把握し、到着が遅れているものは自動クレームします。

◇取扱商品： 全ての逐次刊行物（1納品先につき50誌以上お願いします）

◇納品方法： 毎週1回

◇納品書： 書誌事項を記載した納品書を添付します。（お客様の指定する雑誌管理コードも掲載可能です。）

◇価格： 納品管理手数料を申し受けします。

◇受注期限： 10月末頃迄

お問い合わせ先

ユサコ.株式会社

本社 ● 105 東京都港区新橋1丁目13番12号 虹ビル
Tel. (03) 3502-6471㈹ Fax. (03) 3593-2709

大阪 ● 530 大阪市北区堂島1丁目2番2号 日昭ビル
Tel. (06) 344-6624㈹ Fax. (06) 341-5291

名古屋 ● 461 名古屋市東区栄木町3丁目63番地
Tel. (052) 931-2601㈹ Fax. (052) 931-9833

筑波 ● 300 土浦市富士見1丁目7番21号 和光ビル
Tel. (0298) 23-1773㈹ Fax. (0298) 24-7087

コンピュータとのつき合い

吉野直行

コンピュータとつき合い初めてから約20年になる。最初に大型コンピュータを使い始めたのは1975年の秋である。大学院生であった私は、計量経済学の演習問題で、コンピュータを用いて計算した結果を出すという宿題を出された。まず、プログラムをパンチカードに打って、100枚以上のカードを手に持ちながら計算機室のカード機に読み込ませる。パンチカードに打ち込む時に一つでも間違いがあると結果は出力されず、いつも薄い表紙とエラーメッセージだけが出てくる。アメリカの大学では、夜のコンピュータ使用料金が安かったので、夜11時以後から大型コンピュータの使用を始めたが、うまくプログラムが動かさず、夜中になってしまい、外に出て夜空の星をよく眺めたものである。どうも私にはコンピュータは向いていないようと思われ、博士論文ではマクロ理論に専念し、紙とエンピツで解ける理論経済学を選んで論文を完成させた。

大学院を終え、助教授として初めて就職した1979年頃から、TSPと呼ばれる私でも容易に利用できる計量経済プログラムが大学に導入された。大型コンピュータを使っていたため、ここでも学生が使わない講義の終わった夜か、土・日曜に計算を実行した。以前よりは楽に計算結果が出力されるようになり、モニター画面を見ながら、何度も修正を加えることができ、大型コンピュータを用いて初めて専門の論文を完成させることができた。帰国後も大型コンピュータを使った研究を続けたが、この時代は、データや計算が複雑になると記憶容量を越えてしまい、コンピュータが止まってしまう難点に遭遇した。

1984年から、論文を書くためにもパソコンを頻繁

に使うようになった。ここで初めてNECから出された小さなパソコンを購入した。しかし、メモリーが小さく、書いている論文の枚数が増えるとパソコン本体の記憶容量を越えてしまうために苦労が続いた。しばらくして東芝から初代ダイナブック（現在よりは機械は大きく重かった）が発売され、持ち運びが自由で、計量経済分析と手紙・論文などの作成との両方が一台のパソコンで出来るようになった。これは、私の生活スタイルも大きく変えてくれた。というのは、自宅において、いつでも仕事ができるようになつたからであり、データを用いた計量分析も容易にしてくれたからである。10年前には苦労していた計算も短時間で結果が得られるようになった。

今年から、インターネットを通じた通信にもパソコンを活用している。海外の学者との共同研究で、私の書いた文書を海外に瞬時に送ることが出来る。共同研究者は、私から送られた論文と計量分析の結果を読んで、修正したものを私に送り返してくれる。アメリカと日本では約13時間の時差があるため、翌朝大学でパソコンを開くと、共同研究者が加えてくれた改訂論文を私の手元で読むことができる。しばらく前には、手紙のやりとりで2週間が必要であったが、今では夜寝ている間に共同論文が一步進んでいるのである。また、ヨーロッパ・カナダ・アメリカなどの海外からも頻繁に電子メールが送られ、経済データも即時に海外から得ることが出来る。

パソコンのサイズも小さくなり、最近ではサブノートを持ち歩いている。初代ダイナブックと比べると格段に軽くなり、記憶容量・計算スピードも増している。出張先で文書を書いて送ることが出来るし、学会での論点・コメントなどを忘れないうちにパソコンに入れることも可能である。最近は、パソコンの前に座らなければ、文章が書けないほどになってしまった。学生向けにパソコンを使いながら計量分析が勉強できるプログラムも作り、講義・演習で利用している。20年前には自分には向かないと思ったコンピュータとのつき合いも、技術進歩のお陰で、今では必要不可欠な道具となっている。

（経済学部教授）

イギリス NACSIS-CAT プロジェクト

せき
関

ひで
秀

ゆき
行

(三田メディアセンター係主任)

1. はじめに

1993年10月から半年間、イギリスでの海外図書館研修の機会を得た。過去に慶應から派遣された海外研修のほとんどは、研修先の図書館での日本語図書の整理に尽力する事でギブ・アンド・ティクの関係を築いてきている。筆者の場合も日本語図書の目録作成を手伝うかたわらの研修であった。

イギリス[内]の日本語資料はこれまで個々の図書館が個別に収集・管理してきた。また、その目録もカード媒体がほとんどで、記述は日本語であっても、アクセスポイントは著者名、書名の読みのローマ字に限られているところが多かった。各図書館とも目録のOPAC化、それもできれば日本語による検索・結果表示が可能なOPACを持ちたいという望みを持ち続けていたが、様々な財政的・技術的困難のため実現できなかった。

しかし1990年頃から、OPACの実現を目指すべく日本語図書の総合目録を作成するためのプロジェクトが始まった。目録のリソースとして使われているのは、OCLCやRLINのCJKシステムではなく日本の学術情報センター総合目録（以下、NACSIS-CAT）である。本稿では、海外の図書館における日本語図書目録の機械化の事例としてこのプロジェクトの紹介をしたい。

2. イギリス日本語図書総合目録プロジェクト

イギリス日本語図書総合目録プロジェクト（UK Union Catalogue of Japanese Books Project。以下、NACSIS-CAT プロジェクト）とは、日本語資料を有するイギリス[内]の学術図書館が共同して総合目録データベースを作成しようとするものである。同時に、このプロジェクトは参加館に

おけるローカルOPACを始めとする業務機械化の促進も視野においている。

プロジェクトに参加しているのは大学図書館を中心である。1995年8月現在で、次の6つの図書館が参加している。

Cambridge University Library（ケンブリッジ大学図書館）

Bodleian Japanese Library, University of Oxford（オックスフォード大学ボドリアン附属日本研究図書館）

East Asian Studies Library, University of Sheffield（シェフィールド大学東アジア研究図書館）

Library, University of Stirling（スターリング大学図書館）

Oriental and India Office Collections, British Library（英国図書館東洋・インドオフィスコレクション。以下、BL）

Library, School of Oriental and African Studies, University of London（ロンドン大学アフリカ東洋学部図書館。以下、SOAS）

日本語図書を収集している図書館はこの他にもあるが、蔵書規模・経常予算・専門図書の有無などの理由から現段階ではこの6館となっている。

3. なぜ NACSIS-CAT か？

イギリスへのNACSIS-CATの接続は、1989年から英米で展開していたIRサービスに続く学術情報センター（以下、学情）の新たな国際事業展開の一つである。イギリス側は、日本語目録の機械化推進のために、豊富なデータ量、データ収録の早さ、かつ低コストという条件を備えた目録ソースを必要としていた。特に、日本語図書担当

のライブラリアンが日本語を母国語とする人とは限らないため、目録作成に当たってはできるだけオリジナル目録作業を少なくすることが望まれた。そういう意味で NACSIS-CAT はこのニーズを満たすものであり、イギリスへの接続に伴う学情からの支援がなければプロジェクトの実現は難しかったであろう。

NACSIS-CAT を使ってどのように機械化していくか？その方法は日本の参加館と同じである。つまり、一参加館として NACSIS-CAT に書誌・所蔵データを登録していくことを通じてデータを得る方法である。

4. 三つの総合目録

このプロジェクトでは次の三種類の OPAC システムによる総合目録を目指している。

- (1) ケンブリッジ OPAC を用いた総合目録
- (2) 学情提供の個別版 CD-ROM 目録
- (3) Novell サーバー上の日本語 OPAC

(1) ケンブリッジ OPAC による総合目録

これは、ケンブリッジ大学の図書館システムである “CATS” の中の一つとして目録データを蓄積し、ケンブリッジ OPAC のメニューの一つとして利用に供するものである。ケンブリッジ大学以外の図書館からは全英的な学術ネットワーク “JANET” を通じて利用できる。CATS そのものはメインフレーム上の図書館システムであり、当然日本語表示には対応しておらず、ここで提供される目録も読みのローマ字のみで構成される。JANET を通じた図書館間での OPAC の相互利用は、私が滞在していた当時のイギリスにおいて一般的になっており、JANET に接続すればイギリス中どこからでも利用できる状況にあった。同時にそれはインターネットを通じて全世界からの利用が可能であることも意味する。

CATS へのデータの蓄積はバッチ処理による。それぞれの参加館が NACSIS-CAT に登録したデータは、学情から毎月 FTP (ネットワークを通じたファイル転送) でケンブリッジへ送られて来る。それを UK-MARC フォーマットに変換して CATS データベースにロードしている。

(2) 学情提供の CD-ROM 目録

ケンブリッジ OPAC を利用した総合目録では検索・結果表示がローマ字のみである。それを補うのが学情から検索ソフトと共に参加館に提供される個別版 CD-ROM である。このサービスは、ある図書館が登録した書誌・所蔵データを CD-ROM に収録し、検索ソフトと共に提供するものである。したがって、NACSIS-CAT にデータを登録すれば、それだけで日本語対応の OPAC が得られることになる。プロジェクト参加館が登録したデータを一枚の ROM に収めることができ、また自館のレコードのみを検索対象とするように設定できる。つまり、個別版 CD-ROM は日本語版総合目録であると同時に、各参加館にとって自館の OPAC としても利用できる。

(3) Novell サーバー上の日本語 OPAC

この形態はプロジェクト開始時点では考えられていなかった。ケンブリッジのシステム担当者のサジェスチョンに基づいて今年になって実用化したものである。個別版 CD-ROM のデータをケンブリッジ大学の Novell 社のサーバーに落としたもので、利用する側に一定の環境が整っていれば、JANET やインターネットを通じて日本語での利用ができる。

5. J-Bisc の利用

プロジェクトのメインのフェーズは NACSIS-CAT の利用であるが、実はプロジェクトの初期段階において、ケンブリッジ・BL・SOAS の3館が J-Bisc (JAPAN-MARC/CD-ROM 版) データのパソコンへのダウンロードを行っている。このデータは UK-MARC に変換され、ケンブリッジ OPAC に取り込まれるとともに、NACSIS-CAT へのバッチアップロードも行われている。

SOAS はロンドン大学の図書館システム運用方針の観点から NACSIS-CAT は使わずに J-Bisc ダウンロードのみで総合目録に参加している。したがって正確に言えば、NACSIS-CAT プロジェクトの参加館は SOAS を除いた5館である。

6. 問題点

イギリスから NACSIS-CAT に蓄積されたデー

タは1995年6月の段階で約6万3千件となっている。学情からの積極的な支援もあり、全体的に見て順調に進展しているようである。しかし個々の現場レベルでは解決すべき問題は少なくない。

(1) 日本との接続

日本との時差の関係で、NACSIS-CAT に接続可能な時間は一日3時間週4日に限定されている。また回線が細く不安定なため、接続トラブルも多く、思うように作業時間を確保できないのが現状である。日本との接続は現在専用回線を使っているが、近い将来インターネットによる接続に移行する予定である。いずれにしても、安定した回線接続は今回のプロジェクト推進の必須条件である。

(2) NACSIS-CAT データの質

プロジェクト参加館は、NACSIS-CAT に書誌があればそれに所蔵をつけてダウンロードをするという作業だけで、一定の質の目録を作っていくという考え方であった。しかし、NACSIS-CAT のオリジナルで作成された書誌データの質に関して、日本の参加館と同様の問題（データの不正確さ、件名の不備など）に直面している。

(3) 各参加館の事情

どの参加館にとってもスタッフの少なさは最大の問題である。また SOAS の NACSIS-CAT 不参加に見られるように、メインの図書館システムとの関係においてこの総合目録をどのように位置づけるかという問題を考えねばならない。オック

スフォード大学を中心に前述の三種類の OPAC とは別に、独自の日本語対応システム¹⁾の開発が進められるなど、プロジェクトに対する姿勢は参加館によって異なっている。

7. おわりに

海外で日本のシステムとデータが利用されているこのプロジェクトは、日本語資料に関わる協力という限られたつながりではあるが、日本図書館界の海外への貢献の数少ない例と言ってよい。今はまだ NACSIS-CAT の利用という側面がクローズアップされているが、将来的には、イギリスに存在する貴重な日本語資料の総合目録として日本にとっても有用なものとなっていくであろう。

注

1) オックスフォード大学では、ドイツで開発されたパソコンベースの図書館システム “Allegro”（アレグロ）の中国語バージョンを独自に開発した。そして、この Allegro の日本語バージョンの開発にも成功している。

参考文献

- 関秀行 “イギリス図書館海外研修報告” MediaNet, No.2, p.45-47 (1994).
ユーユン・ブラウン “イギリスにおける日本語図書の収集と利用” 専門図書館, No.149, p.1-12 (1994).
“個別版 CD-ROM の開発” 学術情報センターニュース, No.25, p.7-9 (1993).

三田メディアセンター資料研究会

平成5年度

第2回（平成6年3月18日）

「ケンブリッジのスクラップ・ブック 供給者の論理と利用者の見方」

講師 藤井弥太郎（商学部教授）

第3回（平成7年1月25日）

「法学研究者の研究スタイルと法律資料」

講師 安富 潔（法学部教授）

第4回（平成7年3月2日）

「議会資料を中心としたイギリスの一次資料

について

講師 松村 高夫（経済学部教授）

平成6年度

第5回（平成7年4月6日）

「歴史家の研究スタイルと図書館」

講師 矢野 久（経済学部助教授）

第6回（平成7年7月21日）

「イギリス議会資料・パート2」

講師 石黒 敦子（日吉メディアセンター）

目録情報の遡及状況

遡及事業室

1. はじめに

目録情報の遡及とは、カード目録をデジタル化してオンライン目録に置き換えるプロセスを指す用語として使われることが一般的である。

慶應義塾においても、図書館トータルシステム（KOSMOS）の稼働を契機として、目録作業のオンライン化以前の目録情報の遡及を実施し、利用環境を整えることを計画した。

現在、その事業計画はほぼ八合目まで到達し、平成8年度末をもって終了の段取りとなっている。これにより、蔵書の主要部分の遡及が完成する。

以下、遡及入力の計画の現状と問題点を紹介する。

2. 外部ユーティリティに蓄積した目録情報のKOSMOS搭載

過去にLCカード、国会カードを利用していた流れもあり、三田では、JAPANMARC（1983～）、TRCMARC（1984～）等の磁気テープを入手し必要分の目録カードを作成していた。学情情報センターのサービス開始と共に、学情入力したデータを元に、目録カードの作成も行なっていた。

こうして、目録のデジタル化情報が蓄積されるに従い、目録のカードレス化（OPAC）の検討が三田で始まった。利用者のアクセスが少ない（必要台数端末の用意が容易）こともあり、まず洋書からデジタル化を行なうことになった。この遡及にはOCLCを利用し、約15万冊分の目録カードをコピーして、OCLCへ送付入力、データを磁気テープで取り寄せるという作業を行なった。

このような背景の中、KOSMOS計画が開始され、全地区を対象とした目録情報のデジタル化の

計画が検討されていった。KOSMOS稼働開始時に、三田と信濃町地区の学情和・洋書データ約7万件、藤沢をのぞく4地区の雑誌データ約2万件、OCLCデータ約15万件のデジタル化情報が蓄積されていたことになる。

それらは、JAPANMARC、TRCMARC等のソースと同様、KOSMOSの簡易書誌と置き換える形で搭載された。両MARCはISBN、JP-no.等をキーにして置き換えを行なった。ここでいう簡易書誌とは、KOSMOS以前に各地区的閲覧システムで使用していた書誌データのことであり、これは、所蔵データとともに最初にKOSMOSに搭載された。

この際の問題点としては、階層を持たないOCLCのデータの階層化が複雑で、階層化の実現を断念したことがある。他のソースについても同様の問題はあったが、和書の遡及事業の終盤化に伴い整備が行なわれている。

3. 雑誌製本データの遡及

雑誌目録は、書誌、一括所蔵（物理的所蔵形態を捨象した1タイトルに関するすべての所蔵記録）、カレント所蔵（チェックインデータ）、製本所蔵の4要素で構成される。慶應においてはKOSMOS稼働以前に製本されたすべてのデータの遡及を実施した。シェルフリストをコピーし、外部委託で遡及したデータは、約37,000タイトル60万冊分であった。（注：後発の藤沢地区だけは、外部委託とせず、KOSMOSでオンライン遡及入力を行なった）

その際、書誌は学情データのロード（学情内で書誌一所蔵のリンクが保たれている慶應データ）という手法をとった。この手法は次の点で問題を残している。ひとつは学情の雑誌書誌データの粗

さをそのまま許容したこと、もう一つは誌名変遷リンクを KOSMOS 内で構築する関係で所蔵のない書誌も搭載されたことである。

また、この選及において、おおむね全データが選及されたが、三田については問題が残されている。まず、学総目に無く書誌の複雑なもの、所蔵情報の複雑なもの、中国語、韓国語等の特殊言語のものが、外部に委託できずに残ったこと、さらに所蔵タイトル数が多すぎて、また、上記のような人文・社会系に特有の複雑さもあり、選及以後のオンラインによる全件入力が日常的に追いつかなかったことも問題である。

特集号のタイトル等、チェックインファイルでは維持できた情報を KOSMOS に反映しきれなかったことも解決できていない。

4. 和図書目録カードからの選及

三田の洋書目録のカードレス化から始まった目録の選及計画も本格化し、和図書については平成4年度より、選及入力事業室を設置し、カード目録からの選及を行なっている。

三田（図書館）分を初めに、日吉（図書館）、矢上（図書館）、日吉（研究室）分を進め、平成7年8月現在、三田（研究室）分を手掛けている。当初は、現物からの選及が先行して行われていた早稲田大学の WINE のデータを利用した。WINE を利用できなかった分については、学情に向かってオンライン入力を行なった。三田分、目録作業の KOSMOS 化以降入力分等、KOSMOS 内にデータが増えたこと、また、それらとの重複が予想されることなどを考慮して、日吉分からはすべて学情に向かって選及することとなった。

内容としては、KOSMOS に向かっての重複調査—重複のない書誌の学情登録—磁気テープでの取り寄せ—KOSMOS アップロード—KOSMOS 内でのオンラインによる階層処理、というプロセスをとっている。KOSMOS アップロードの際には、著者リンク、書誌階層リンク付けを行なった。ただし、著者典拠については、KOSMOS 著者名典拠にヒットしなかったもの、および団体名はリンクされていない。

目録カードを利用した選及は、カードの記述の

貧弱さのため、書誌の同定が困難で、現物確認せざるを得ないケースも少なくなかった。また、同定判断ミスが原因の書誌の重複等の問題も生じた。

和図書選及終了は、平成8年9月頃を予定しているが、その時点でも全地区の和漢書すべてが選及されるわけではない。非図書・中国語・韓国語図書は選及対象外である。また、表2でわかるように、地区によっては受入れ年の古い図書は対象となっていない。

5. 洋図書目録の選及

選及計画による和書の主要部分の選及完了、過去の OCLC 調達分、学情入力洋書データの搭載とともに、利用者に OPAC の利用が浸透してきたこともあり、すべてのデータが OPAC で検索できる状況が期待されるようになった。そこで残りの洋書の選及計画を実施する運びとなった。

平成7年度末より着手、同8年度中の完了を予定し、計画、実施案を策定中である。

表1 年度別図書・雑誌選及計画
(1992年時計画)

年 度	図書処理総数 1,138,000 冊				和洋雑誌 製本単位	
	和書 630,000 冊		洋書 508,000 冊			
	地区	処理冊数	地区	処理冊数		
平成元年			三田	40,000		
平成2年			三田	99,710	517,038	
平成3年	三田		三田	22,531	127,292	
平成4年	三田	106,000	三田	6,612		
平成5年	三田					
	日吉	182,000				
	矢上					
平成6年	日吉	210,000				
	矢上					
平成7年	日吉		日吉	85,000		
	矢上		矢上			
平成8年	三田	132,000	三田	132,000		
			日吉			
平成9年			三田	122,000		

表2 遷及対象・範囲

地 区	和 書	洋 書
三 田	1962年以降受入の図書館図書 233,000 冊 研究室図書（1970年以降受入分） 97,000 冊 (計画に含まない中・韓の数を含む)	1962年以降受入の図書館図書 濟 160,000 冊 研究室図書（1970年以降受入分） 190,000 冊 (計画に含まない特殊言語の数を含む)
日 吉	253,000 冊 (中・韓の数は含まない)	148,000 冊
矢 上	47,000 冊	28,000 冊
四 谷	25,000 冊	23,000 冊
藤 沢	66,000 冊 (DOBIS で作成したものを KOSMOS へ搭載)	60,000 冊 (DOBIS で作成したものを KOSMOS へ搭載)

表3 既存 MARC データ

地 区	和 書	洋 書
三 田	52,000 (50,000) () 内は書名40バイトの簡易書誌	208,000 (0)
日 吉	104,000 (104,000) () 内は日販 MARC またはオリジナルによる固定長データ	0 (0)
矢 上	0 (0)	0 (0)
四 谷	17,000 (14,000) () はオリジナル受入データ。半角カタカナ	18,000 (14,000) () はオリジナル受入データ
藤 沢	66,000 (66,000) () は学情またはオリジナルによる DOBIS	60,000 (60,000) () は学情またはオリジナルによる DOBIS

() 内は不完全データ（地区によって意味が異なる）

これに対し、完全データとは、学情、JPMARC、TRCMARC、OCLC、DOBIS 等を指す）



<スタッフルーム>

振り返れば……

たま じら ふみ こ
玉 村 文 子

振り返ればあっという間の10数年だった。三田で過ごした約10年間。私が就職した当時の三田情報センターは、新研究室棟に、収書課、整理課、第二閲覧課、法学部資料室、経商資料室等があった。私は1階の収書課で、和書の受入れ登録をしており、登録の済んだ図書は整理課へ、雑誌は新研究室棟と旧図書館を結ぶ連絡橋をガラガラと、ブックトラックを押して持って行った。

旧図書館の古いニレベーターを降りると、まるで狭い迷路

か、あなぐらのような感じがするとともに、歴史の重みを感じた。有名な Calamus Gladio Fortior (ペンは剣よりも強し) と書かれた、ステンドグラスのある階段を上り下りする時、そのすばらしさにうっとりするとともに、その感はますます強く感じた。あの様な歴史ある建物の中で働けて幸せだった。しかし、当時はまだ冷房装置はなく、汗をかきながら働く健康的といえば健康的な夏の日々だった。

そして、近代的な新図書館への引っ越し。引っ越し作業中、館内に流れるラジオから、突然、ジャンボジェット機が羽田沖に墜落したというニュース速報。天候も穏やかで、ぽかぽかと暖かい日なのにどうして……。パイロットの心身症が原因だった。その後しばらく心身症という病名が世の中の話題になった。



地下5階、地上6階の近代的な図書館の六階が、整理課、収書課になった。新研究室棟一階の北向きの部屋から六階の南西の部屋に移り、外をみると、まるで温室から箱庭を見ているようで、最初の頃は感動した。が、しかし、作業は勿論、機械化されたKOSMOSによるものではなく、目録カードとタイプライターのお世話になり、カードのファイリング作業も人海戦術に拠るものだった。

その後、矢上の理工学情報センターに異動となった。六月初旬の矢上に初出勤の日、センターの前に咲いた藤の花はみごとだった。日吉駅から矢上への、徒歩10分位の谷を越える道は、四季折々の花が咲き、バードウォッチングも楽しめ、春には図書館の土手にふきのとうやつくしが芽を出し、秋にはスキが銀色に輝き、そして夜になると、時々狸も現れる。

理工学情報センターはスタッフ約20名で、私は数年間雑誌担当となり、その後図書担当となり、雑誌は、受入から製本、配架まで3名で行い、仕事の細分化はされていないので、雑誌の動きもよくわかり、おもし

ろかった。図書の仕事はスタッフ2名とアルバイトの方1名で行い、これまた発注、受入、整理、配架まで一貫して行うおもしろさがあった。

その後、KOSMOSが稼働し、作業が機械化されてカードレス時代の到来となり、図書館業務も、大幅に変化した。

昨年6月に、日吉メディアセンターの資料マネジメント担当に異動となり、図書の整理をしている現在である。日吉では、三田に統いて、10月より「ちょいす君」という新たなシステムが導入され、少しでも速く利用者の手元に現物が届く様に、さらなる整理業務のスピードアップをめざしている。

初任当時から振り返ってみると、図書館の進展には日覚ましいものがあると、しみじみ思うものである。

(日吉メディアセンター)

米国の大規模における情報処理環境

たか はし ゆき ひさ
高 橋 幸 久

(三田メディアセンター課長)

1. はじめに

21世紀初頭（2010年頃）には日本の各家庭が光ファイバで結ばれるらしい。我々もその足音を感じてきている。高度なネットワークといろいろなメディア（文字、図形、音声、動画等）を利用したマルチメディア社会の到来である。このような状況の中で大学も確実に変化しつつある。いつでもどこでも大学教育が受けられる「遠隔教育」が米国で実験されている。また、僻地の医療をネットワークを使い、画像や音声を送って行う「遠隔医療」の構想も注目を集めている。ネットワーク整備は、今後、重要な鍵となり、この中心的役割はインターネット（世界規模で普及している相互接続ネットワーク）である。インターネットの普及が大学の情報処理環境を変化させたといつても過言ではない。インターネット先進国である米国の大規模における情報処理環境がどのように変化しているか、今回の研修において特に注意をはらい、次の大学を訪問した。

西部地区

カリフォルニア大学バークレイ校

カリフォルニア大学デービス校

スタンフォード大学

中部地区

ミネソタ大学

シカゴ大学

ノースウェスタン大学

東部地区

カーネギーメロン大学

ピッツバーグ大学

ハーバード大学

イエール大学

以下にいくつか気がついたことを取り上げる。

2. メインフレームとネットワーク

カリフォルニア大学バークレイ校（学生数約32,000人）は、16,000台のパソコンやワークステーション等がネットワークに接続され、学内関係施設の85%をカバーしている。組織的にもネットワーク中心型に移行しており、大学全体の情報システムを管理しているIS & T（Information System & Technology）においては、スタッフ350人中約80人がネットワーク管理に従事している。

ノースウェスタン大学（学生数約8,000人）はキャンパスが市街地（住宅街）に点在しているため、ネットワーク敷設には市当局との連携が必要であり、地域社会との繋がりも大切な要素となっている。

訪問した大学すべてにメインフレーム（汎用大型計算機）利用の有無を質問したところ、ほとんど分散型のクライアント・サーバ型にコンピュータシステム（事務システムを含む）を移行したとの返事であった。高速演算用のスーパーコンピュータ、図書館システム用等にメインフレームは一部残ってはいるが、米国の大学の情報処理環



カリフォルニア大学バークレイ校

境においてはネットワーク環境がシステムの中心的役割を果たしている。このことについては、現在日本の大学における情報処理環境も例外ではない。

3. 電子メール

個人主義が確立されている米国では、大学スタッフは一人1台のパソコンは言うまでもなく、朝一番の仕事として事務連絡、研究レポートから私的な手紙まで電子メールを読むことから始まる。日本ではワープロ専用に近いパソコンが、米国ではほとんどインターネットとの接続が可能になっている。今回研修で友人となった大学のスタッフは、2週間の旅行から戻ると600通の電子メールが届いていたという話である。米国の大学では電子メールが文化として定着していることは事実である。

カリフォルニア大学バークレイ校において特別な配慮で大学スタッフと同じ環境でコンピュータ登録が出来た。このことは、現地においていろいろな活動を可能にした。日本との事務連絡、訪問大学関係者との連絡に電子メールは大変役立ち、特にスタンフォード大学訪問では、日本からの予約ではなく、訪問1週間前の何度かの電子メールのやり取りにより、それまで一度も会ったことのないシステム関係者と会う約束が可能となった。電子メールを利用すると、送った日、又は、翌日に必ず返事があり非常に便利であった。このこと



スタンフォード大学

は、英語での手紙の苦労と一緒に、思い出に残るものであった。

4. 新テクノロジーの展開

カリフォルニア大学デービス校（学生数約21,000人）のシステム管理組織IT（Information Technology）では、新テクノロジーを紹介するセクションが設置されていた。最新のハード（AV機器、画像処理機器等）、および、ソフトを取りそろえ、学生、教職員に対し積極的に紹介を行っている。このことはこの大学に限らず、今回、研修で訪問した多くの大学に、名称と、スタッフ数は多少違うが、よく似た組織が必ず存在した。このような組織のシステム担当者に、昨今日本のマスコミに多く登場する「マルチメディア技術」に関して質問してみると、必ずシンプルな答えが返ってくる。テキスト、絵（動画、静止画）等のデータベース化およびCD-ROMのネットワーク化等がマルチメディアを利用しているとの答えである。マルチメディアに関して大騒ぎの日本と違いインターネットの普及やネットワークの整備が自然発生的にマルチメディアの要素を取り入れているためと思われる。

5. 学生とパソコン

米国の大学の特徴として、学生数の割りにパソコン教室が以外と少ないように思つた。あつたとしても20人規模程度のものが数教室である。このことは大学が学生にパソコン購入を積極的に薦めているからであろう。パソコンを持っていれば学生が自宅からネットワーク接続でいろいろなコンピュータを利用できるメリットもある。

ミネソタ大学（学生数約20,000人、インターネット上の分散型電子掲示板システムGopher発祥の大学）では大学がハードウェア、ソフトウェアのメーカーとタイアップして大幅な割引価格で学生にパソコンを提供している。大学構内に大学がメーカーに対して場所を提供し、その場所には、各種パソコンがならび、大学のシステムスタッフが学生、教職員の利用、および、購入相談

等を受けていた。また、パソコン教室では学生、大学院生のインストラクタを配置し、それらの学生がシステムスタッフとして有効に機能していた。

6. 24時間体制のパソコン教室

カーネギーメロン大学（学生数約6,800人）では産学共同で企業と大学の提携を通じ、ハードウェアおよびソフトウェア（ライセンス等）が無償で利用できるような効果的な導入を行っている。この大学はネットワークのシステムでは先進的大学であり、以下のとおりの特徴がある。

- ① 電話よりネットワークの情報コンセントが多い。
- ② ネットワークの情報コンセントからのIPアドレス（ネットワーク上のアドレス）を意識せずにパソコンを接続できる。
- ③ Andrewシステム（世界的に有名なネットワーク管理システム）は第四世代目であり、システムメンテナンスに重要度を置き、遠隔的にメンテナンスできる。
- ④ クラスタ（パソコン室）の一部を24時間オーブンしている。

なお、システム担当者から聞いたところでは、インターネット等のネットワークは5年後にはフリーマーケットの時代となり、例えば、地元の電話会社から使用権を購入する等の有料化への見解があり注目される。



ミネソタ大学

治安の問題がとかく話題となる米国において24時間利用できるパソコン教室は不思議な感じではあるが、カーネギーメロン大学では深夜運行のスクールバスもあり通学に便宜をはかっている。

7. おわりに

米国の大学における情報処理環境は日本の大学において参考となるポイント（ヒント）が数多くある。しかし、社会制度や物理的な大学キャンパスの広さ等の違いから見ると検討の余地もある。米国の大学と比較し、良い所は取り入れ、さらには日本の大学の特徴を生かしたきめ細かい情報処理環境が必要となるであろう。本大学で最新、最適の情報処理環境が実現した後にも、利用者側のニーズを十分把握し、学生、研究者にとって「最適のデータベース環境か」、「利用し易いネットワーク環境か」等を常に意識する必要があるであろう。今後は、高度なネットワーク環境が日本の大学の情報処理環境を変化させ、既存の組織（古い体質の組織）を変えて行くと思われる。米国においては、システム関連の組織は既に再編成を行って高度情報化に着実に備えている。

この研修において数多くの大学スタッフと会うことが出来たが、皆とてもフレンドリーに接してくれた。その一例として、カーネギーメロン大学ではシステム担当副学長に会うことが出来た。多くのシステム担当者との面会から見学に至るまできめ細かな対応は印象的であった。気さくな感じからかその場ではあまり意識しなかったが、後で名刺を確認して副学長という偉い人だったのかと驚いた次第である。米国の大学における情報処理環境がユーザフレンドリーなのはこのあたりから起因しているのかも知れないと思った。帰国後に訪問したすべての大学関係者に、お礼を兼ねた電子メール（米国の大学関係者の名刺には必ずメールアドレスが入っている）を出した返事の中で、この副学長は別の大学へ引き抜かれていたと聞くにあたり、いかにも米国的な話だと深く感銘した次第である。

資料 I =

メディアネット・メディアセンターに関する書誌 1994.8~1995.7

“慶應大が新大学院開設「政策・メディア研究科」教員と院生がチーム組み新研究” 産経新聞 1994.5.28 p.24

相畠秀夫、村岡洋一（対談）“学術情報の発言めざす慶應大 SFC〔湘南藤沢キャンパス〕のメディアセンター” 電気学会誌 Vol.114, No.9 p.541-544 (1994.8)

“進む情報サービス、大学図書館、変身本モノ？一人材育成はこれから” 日本経済新聞・夕刊 1994.8.6 p.10

“通産省が「電子図書館」着工へ 行政資料など家庭から検索” 産経新聞・夕刊 1994.9.29 p.1

“京大工学部教授長尾真氏—実用性高い電子図書館（直談論）” 日経産業新聞 1994.12.6 p.4

“〔大月隆寛の無茶修行〕慶應大学” 電脳キャンバス “果たして、どんなものなのか” 毎日新聞 1994.12.7 p.6

亀井昭宏 “「未来からの留学生」の知的好奇心と「自ら学ぶ」意欲への積極的対応をめざす新しい大学教育の姿—慶應義塾大学・SFC（マーケティング・エクセルンスを求めて）” 季刊マーケティング・ジャーナル Vol.14, No.3 p.61-70 (1995.1)

“パソコンで文献情報検索 「電子図書館」実用化へ／通産省” 東京競売新聞 1995.2.3 p.9

“私の蔵書海外でお役に、30校、11万冊一冊などに寄贈「日本研究に」” 日本経済新聞 1995.2.27 p.34

宮下啓三 “小山内薫が見たヨーロッパ演劇” 學鏡 Vol.92, No.5 p.22-27

資料 II =

スタッフによる論文発表・研究発表 1994.8~1995.7

〔論文発表〕

〔三 田〕

浅野玲子 “私の外国語学習法” 医学図書館 Vol.41, No.3 p.271-272 (1994.9)

東田全義 “「教祖」と「エントロピー」” 日本農学図書館協議会会報 No.97 p.45-46 (1995.3)

廣田とし子 “「大学図書館研究」に求めるもの” 大学図書館研究 No.46 p.14-16 (1995.4)

加藤好郎 “社中交歓 大掃除” 三田評論 No.964 p.88 (1994.12)

加藤好郎 “慶應義塾図書館の公開について” 三田評論 No.968 p.106 (1995.4)

風間茂彦 “資料保存—古くて新しい課題” 設監局紀要 No.20 p.29-33 (1994.10)

風間茂彦 “慶應義塾大学三田情報センターにおける資料保存政策の現状について” 図書館と資料保存—酸

性紙問題からの10年の歩み 1995.1 p.408-418

風間茂彦 “三田情報センターにおける新刊和書 pH 値測定結果” 図書館と資料保存—酸性紙問題からの10年の歩み 1995.1 p.99-102

風間茂彦 “二つの保存の狭間で” びぶろす Vol.46, No.3 p.17-18 (1995.3)

宮崎康子 “旅の思いで” 三田評論 No.966 p.47 (1995.2)

森園 繁 “横浜写真帳” 墓 No.187 p.3 (1994.10)

渋川雅俊 “図解近世職人百科” 墓 Vol.32, No.4 裏表紙 (1994.8)

渋川雅俊 “現職教育の重要性とこれからの図書館情報学教育” 21世紀に向けて図書館職員を考える—JLA 大学図書館部会研究集会記録所収 日本図書館協会 1994 p.37-55

渋川雅俊 “慶應義塾大学の今後の高度情報化政策につ

- いて” 私情協ジャーナル Vol.3, No.4 p.2-4 (1995.3)
- 渋川雅俊 “私立大学図書館協会国際協力事業について” NHK 国際放送 コラム 1995.4.28 放送
- 渋川雅俊 “選書から蔵書構築、そしてコレクションマネジメントへ—資料提供準備の終わりなき課業” 私立大学図書館協会会報 No.104 p.57-66 (1995.6)
- 白石 克 “江戸名所の楽しみ方” 別冊歴史読本 No.77 p.146-153 (1994.12)
- 徳永澄香 “三田山上から四谷を眺めて” 医学部病院ニュース No.143 p.12 (1994.12)
- 山下光雄 “Dr. 大西と尚子の Mac で臨床栄養” 臨床栄養 1-6 Vol.86, No.1 p.73-79 (1994), No.2 p.185-191 (1994), No.3 p.297-303 (1994), No.4 p.409-415 (1995), No.5 p.513-519 (1995), No.7 p.837-843 (1995)
- 山下光雄 “日本古典料理の研究(ハ)「包丁譜の調味抄について」” 梅花短期大学紀要 No.43, p.53-73 (1994.11)
- 山下光雄 “ダイエットデザインのためのマニュアル” 栄養・輸液ニュース Vol.12, No.11 p.5-8 (1994.11), No.12 p.5-8 (1994.12), Vol.13, No.1 p.13-20 (1995.1), No.2 p.5-8 (1995.2), No.3 p.5-8 (1995.3), No.4 p.5-8 (1995.4)
- 山下光雄 “室町時代の包丁譜” 塊 Vol.34, No.7 裏表紙 (1995.2)
- 山下光雄 “新しい栄養指導教材の開発(韓国語)” 国民栄養 Vol.95, No.3 p.2 13 (1995.3)
- 梁瀬三千代 “NACESIS-IR を利用して” 情報の科学と技術 Vol.44, No.8 p.434-441 (1994.8)
- 梁瀬三千代 “三田メディアセンター” 塊監局紀要 No.21 p.84-85 (1995.10)
- [II] 吉
- 石黒敦子ほか編著 海外 ILL ハンドブック 日本図書館協会 1994.11
- 石黒敦子 “業務マニュアルの維持・管理” 図書館雑誌 Vol.89, No.2 p.106-108 (1995.2)
- 石黒敦子 “図書館から” 三色旗 No.567 p.10-13 (1995.6)
- 木下和彦 “大学図書館における視聴覚サービス” 私立大学図書館協会会報 No.104 p.76-81 (1995.6)
- 宮崎貞治 “実習生の感想からみた図書館実習 慶應義塾大学医学メディアセンターの事例” 専門図書館 No.152 p.7-11 (1995.2)
- [矢上]
- 大賀 裕 “慶應義塾大学キャンパス LAN の変化” 私情協ジャーナル Vol.3, No.2 p.11-13 (1994.10)
- 安田 博 “図書館が変わるとき大学が変わる” Ci No.32 p.4-11 (1995.3)
- [四谷]
- 長谷川博子 “四谷の思い出作り” Keio 医学部病院ニュース No.141 (1994.10)
- 長谷川博子 “let me introduce... 慶應義塾看護短期大学図書室” 看護図書館協議会会報 Vol.4, No.3 p.15 (1994.12)
- 市古みどり “医学関連情報へのアクセス方法” Medical MacMook No.5 p.49-54 (1995.2)
- 市古みどり “書評「インターネットで情報探索」” 情報の科学と技術 Vol.45, No.6 p.298 (1995.6)
- 市古みどり “Why a Japanese version of the metathesaurus is needed” Health information for the global village /ed. Eve Marie Lacroix. Washington DC: Local Organizing Committee 7th International Congress on Medical Librarianship, 1995. p339-344
- 酒井由紀子 “第5回早慶図書館員合同合宿研修グループ討議報告” 菁 No.102 p.6-7 (1994.11)
- 酒井由紀子 “角館で「解体観書」と出会う” 医学図書館 Vol.42, No.1 p.102-103 (1995.3)
- 酒井由紀子 “Facilitating access to Japanese medical monographies” Health information for the global village /ed. Eve Marie Lacroix. Washington DC: Local Organizing Committee 7th International Congress on Medical Librarianship, 1995. p321-325
- 佐久間公子 “医学図書館と患者への医療情報サービス” カレントアウエアネス No.187 p.4-5 (1995.3)
- 和田幸一 “第三の開国：インターネットの衝撃(書評)” 医学図書館 Vol.42, No.1 p.113-114 (1995.3)
- [研究発表]
- [三田]
- 東田全義 “インクナブラとしてのパチョーリ『スママ』” 日本パチョーリ協会フォーラム 1995.3.25 於千葉商科大学瑞穂会館
- 廣田とし子 “大学図書館の OPAC における大学院生の主題検索行動” 1994年度三田図書館・情報学会研究

大会 1994.10 於 慶應義塾大学 (三田)
廣田とし子 “インターネットを利用した情報検索” 平成6年度(第80回)全国図書館大会 第6分科会専門図書館 1994.10 於 鳥取白兎会館
廣田とし子 “Internetを介した図書館サービスの可能性” 音楽図書館協議会1994年度研究集会 1994.11 於 広島ガーデンパレス
廣田とし子 “インターネット事始め—大学図書館レンズにおける経験から” TULA (Tsurumi Univ. Librarians Association) 研修会 1995.6 於 鶴見大学図書館
加藤好郎 “ケース・スタディーを用いた図書館員教育の有効性” 私立大学図書館協会東地区研究部, パブリックサービス分科会 1994.8.29 於 文化女子大学
加藤好郎 “大学図書館における利用者教育の展開” 私立大学図書館協会東地区研究部, パブリックサービス分科会 1994.8.30 於 文化女子大学
加藤好郎 “大学図書館からの報告—国際サービスについて—” 国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会 1994.11.25 於 国立国会図書館
風間茂彦 “山中資料センターの運用：二つの図書館の事例報告” 私立大学図書館協会東地区研究部, 1994年度第2回研究部会 1994.12.8 於 慶應義塾大学(日吉)
風間茂彦 “これから資料保存を展望する” Yushodo Forum 1994 「図書館文書館における資料保存・資料

保存10年の歩みと今後の課題」 1995.1.27
渋川雅俊 “「稀観本とマルチメディア」” 稀観書展(理性の夢文学と図版で読むフランス18世紀) 1995.2.2 於 日本橋丸善
山田雅子 “EU関連CD-ROMの利用状況報告” 第16回EDCセミナー 1995.6.1 於 福山大学

〔日 吉〕

天野善雄 “洋雑誌購入にかかる諸問題” 私立大学図書館協会東地区研究会 1995.6.16 於 東北学院大学
石黒敦子 “ジャム・セッション「レフランス駆け込み寺」” 専門図書館協議会・全国研究集会 1995.6.30 於 仙台国際センター
石黒敦子 “イギリスの議会資料” 三田メディアセンター資料研究会 1995.7.21 於 三田メディアセンター

〔四 谷〕

市古みどり “Why a Japanese version of the metathesaurus is needed” 7th International Congress on Medical Librarianship. 1995.5.12 Washington Hilton
酒井由紀子 “Facilitating access to Japanese medical monographs” 7th International Congress on Medical Librarianship. 1995.5.12 Washington Hilton

小展示ニュース 3

〈三田メディアセンター〉

平成6年
8月9日～10月4日
特攻五十周年
(8/18～21 有楽町マリオンに出展)
10月6日～10月20日
出口裕弘展
10月24日～11月5日
奥井復太郎展
11月14日～12月10日
写真で見るケネディの生涯
12月19日～1月14日
小山内薰と慶應義塾
平成7年
4月17日～5月6日
5月15日～5月27日

平成6年度新収稀観書展
5月8日～5月13日
飛行の歴史(向井千秋来塾に際して)
5月29日～6月10日
ちりめん(縮緬)本
6月17日～6月24日
慶應に図書館学校を
7月14日～7月27日
ペルー展(フジモリ大統領来塾に際して)
7月28日～7月31日
高校教科書に見るクラシックス
8月8日～10月11日
戦後五十周年展
8月22日～8月25日
エコノメトリック・ソサエティ世界大会

年次統計資料 <平成6年度>

I. 図書費 <平成6年度実績及7年度予算>

内訳 各メディアセンター	平成6年度実績 <単位:円>			平成7年度予算 <単位:千円>		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
三田メディアセンター	672,039,737	13,740,623	685,780,360	693,549	20,689	714,148
図書館	352,187,840	13,740,623	365,928,463	354,725	20,689	375,414
学部*	319,851,897	—	319,851,897	338,734	—	338,734
(私大研究設備相当額)	(83,305,382)	—	* *	(26,846)	—	* *
日吉メディアセンター	168,360,995	4,672,753	173,033,748	172,453	5,087	177,540
図書館	65,114,995	2,619,755	67,734,750	66,110	5,087	71,197
学部*	103,246,000	2,052,998	105,298,998	106,343	—	106,343
(私大研究設備相当額)	(8,003,481)	—	* *	(6,938)	—	* *
医学メディアセンター	152,639,885	7,021,497	159,661,382	157,210	10,470	167,680
”	152,639,885	7,021,497	159,661,382	157,210	10,470	167,680
理工学メディアセンター	170,388,349	3,679,501	174,067,850	172,010	3,820	175,830
”	166,888,349	3,679,501	170,567,850	172,010	3,820	175,830
指定寄付金	3,500,000		3,500,000	—	—	* *
(私大研究設備相当額)	(1,500,000)	—	* *	(1,500)	—	* *
湘南藤沢 メディアセンター	180,016,127	15,504,336	195,520,463	180,000	26,491	206,491
”	180,016,127	15,504,336	195,520,463	180,000	26,491	206,491
合計	1,342,945,093	45,118,710	1,388,063,803	1,375,132	66,557	1,441,689

注) * 特別図書費は含まず。

** () 内は合計欄に加算せず。

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時に手当したもの。

II-1 蔵書統計 <年間受入及び所蔵冊数>

内記 各メディアセンター		単行本			製本雑誌			非図書資料	合計
		和	洋	計	和	洋	計		
年間受入冊数	三田メディアセンター	16,680	23,145	39,825	5,634	5,678	11,312	7,320	58,457
	図書館	(9,945)	(13,735)	(23,680)	(3,638)	(2,109)	(5,747)	(3,362)	(32,789)
	学部	(6,735)	(9,410)	(16,145)	(1,966)	(3,569)	(5,565)	(3,976)	(25,668)
	日吉メディアセンター	11,177	6,288	17,465	2,639	1,810	4,449	1,334	23,248
	図書館	(8,484)	(986)	(9,470)	(1,811)	(198)	(2,009)	(536)	(12,015)
	学部	(2,693)	(5,302)	(7,995)	(828)	(1,612)	(2,440)	(798)	(11,233)
所蔵冊累計	医学メディアセンター	1,661	1,582	3,243	2,349	5,628	7,977	478	11,698
	理工学メディアセンター	3,348	1,000	4,348	1,230	3,404	4,634	233	9,215
	湘南藤沢 メディアセンター	12,625	6,933	19,558	4,058	3,549	7,607	1,850	29,015
	合計	45,491	38,948	84,439	15,910	20,069	35,979	11,215	131,633
	三田メディアセンター	716,111	771,000	1,487,111	191,684	192,988	384,672	86,592	1,958,375
	図書館	(500,599)	(441,437)	(942,036)	(116,594)	(71,549)	(188,143)	(51,742)	(1,181,921)
所蔵冊累計	学部	(215,512)	(329,563)	(545,075)	(75,090)	(121,439)	(196,529)	(34,850)	(776,454)
	日吉メディアセンター	310,288	160,703	470,991	40,556	50,198	90,754	15,946	577,691
	図書館	(229,173)	(25,257)	(254,430)	(26,400)	(1,915)	(28,315)	(5,584)	(288,329)
	学部	(81,115)	(135,446)	(216,561)	(14,156)	(48,283)	(62,439)	(10,362)	(289,362)
	医学メディアセンター	38,108	40,473	78,581	58,718	121,821	180,539	4,734	263,854
	理工学メディアセンター	57,383	33,443	90,826	41,509	117,549	159,058	1,300	251,184
所蔵冊累計	湘南藤沢 メディアセンター	78,063	63,114	141,177	18,086	13,492	31,578	11,559	184,314
	合計	1,199,953	1,068,733	2,268,686	350,553	496,048	846,601	120,131	3,235,418

注) 三田メディアセンター・学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。

II-2 岐書統計 <逐次刊行物: タイトル数>

種別	カ レ ン ト			ノンカレント			カレント・ノンカレント合計
	和	洋	計	和	洋	計	
各メディアセンター							
三田メディアセンター	5,783	4,516	10,299	5,559	3,258	8,817	19,116
図書館学部	(2,509)	(1,106)	(3,615)	(3,440)	(1,695)	(5,135)	(8,750)
	(3,274)	(3,410)	(6,684)	(2,119)	(1,563)	(3,682)	(10,366)
日吉メディアセンター	1,093	906	1,999	680	1,080	1,760	3,759
図書館学部	(657)	(86)	(743)	(286)	(26)	(312)	(1,055)
	(436)	(820)	(1,256)	(394)	(1,054)	(1,448)	(2,704)
医学メディアセンター	1,547	1,863	3,410	1,016	1,565	2,581	5,991
理工学メディアセンター	1,171	1,606	2,777	3,033	5,245	8,278	11,955
湘南藤沢メディアセンター	987	1,205	2,192	378	220	598	2,790
合 計	10,581	10,096	20,677	10,666	11,368	22,034	42,711

参考データ：非図書資料

内訳 各メディアセンター	種別	マイクロ資料 CD-ROM		合計
		タイトル数	A-V資料	
年間新規累計	三田メディアセンター	143	185	328
	簡数	6,828	492	7,320
	日吉メディアセンター	76	211	287
	簡数	740	594	1,334
	医学メディアセンター	3	123	126
	簡数	8	470	478
	理工学メディアセンター	78	65	143
	簡数	168	65	233
	湘南藤沢メディアセンター	89	236	325
	簡数	1,508	342	1,850
年間新規累計	三田メディアセンター	1,730	8,028	9,758
	簡数	72,374	14,218	86,592
	日吉メディアセンター	634	3,316	3,950
	簡数	8,680	7,266	15,946
	医学メディアセンター	36	1,422	1,458
	簡数	1,039	3,695	4,734
	理工学メディアセンター	99	138	237
	簡数	996	304	1,300
	湘南藤沢メディアセンター	440	1,591	2,013
	簡数	9,031	2,528	11,559

III-1 利用統計 <貸出及び閲覧冊数>

内訳 各メディアセンター	館外貸出				館内閲覧		前年度比 館外貸出(計)
	教職員	学生	その他	計	一般図書	貴重書	
三田メディアセンター	17,897	165,962	11,742	195,601	*	1,205	1.03
日吉メディアセンター	8,248	129,611	6,569	144,428	*	—	1.07
医学メディアセンター	58,495	23,704	36	82,235	*	—	1.09
理工学メディアセンター	2,515	48,859	12	51,386	*	—	0.96
湘南藤沢メディアセンター	2,525	58,833	467	61,825	*	—	0.84
合 計	89,680	426,969	18,826	535,475	*	1,205	1.05

* 開架のため実数不明。

III-2 利用統計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

内訳 各メディアセンター	依頼をうけた(貸)			依頼した(借)			合 計
	国 内	国 外	計	国 内	国 外	計	
三田メディアセンター	4,488	15	4,503	1,086	284	1,370	5,873
日吉メディアセンター	630	0	630	229	68	297	927
医学メディアセンター	19,040	409	19,449	3,448	78	3,526	22,975
理工学メディアセンター	24,860	15	24,875	1,463	18	1,481	26,356
湘南藤沢メディアセンター	236	0	236	117	0	117	353
合 計	49,254	439	49,693	6,343	448	6,791	56,484

参考データ：早慶ILL

内訳 各メディアセンター	貸	借
三田メディアセンター	896	311
日吉メディアセンター	54	54
医学メディアセンター	607	3
理工学メディアセンター	570	396
湘南藤沢メディアセンター	25	18
合 計	2,152	782

III-3 利用統計 <複写サービス>

内訳 各メディアセンター	種別	学内		学外		合計	
		件数	枚数	件数	枚数	件数	枚数
三田メディアセンター	電子コピー (オペレーター付)	4,538	63,295	2,962	45,315	7,500	108,610
	簡易印刷	161	140,745	0	0	161	140,745
	OHP・スライド作製	13	32	1	2	14	34
	電子コピー (セルフ式)	—	—	—	—	—	3,578,318
	マイクロフィルム	5	973	12	1,352	17	2,325
日吉メディアセンター	電子コピー (セルフ式)	—	573,360	—	—	—	573,360
	マイクロフィルム	38	883	—	—	38	883
医学メディアセンター	電子コピー (オペレーター付)	55,452	340,505	84,936	476,201	139,848	816,706
	OHP・スライド作製	680	3,755	—	—	680	3,755
理工学メディアセンター	電子コピー (オペレーター付)	2	82	24,848	226,522	24,850	226,604
	OHP	603	2,315	—	—	603	2,315
	電子コピー (セルフ式)	38,007	694,490	673	19,474	38,680	713,964
	マイクロフィルム	72	1,011	6	73	78	1,084
湘南藤沢 メディアセンター	電子コピー (オペレーター付)	105	849	206	1,299	311	2,148
	簡易印刷	1,205	1,631,107	0	0	1,205	1,631,107
	OHP・スライド作製	10	2,298	0	0	10	2,298
	電子コピー (セルフ式)	—	632,383	0	0	—	632,383
	マイクロフィルム	—	1,447	0	0	—	1,447

参考データ：電子コピー枚数

内訳 各メディアセンター	オペレーター付	セルフ式	合計
三田メディアセンター	108,610	3,578,318	3,686,928
日吉メディアセンター	—	573,360	573,360
医学メディアセンター	816,706	—	816,706
理工学メディアセンター	226,604	713,964	940,568
湘南藤沢メディアセンター	2,148	632,383	634,531
合計	1,154,068	5,498,025	6,652,093

III-4 利用統計 <レファレンス・サービス>

利用者別

種別 各メディアセンター	学 内 者		学 外 者	合 計
	教 職 員	学 生		
三田メディアセンター	1,666	7,993	5,157	14,816
日吉メディアセンター	2,441	4,785	367	7,593
医学メディアセンター	2,277	483	3,999	6,759
理工学メディアセンター	1,067	4,117	2,921	8,105
湘南藤沢メディアセンター	135	2,636	37	2,808
合 計	7,586	20,014	12,481	40,081

業務内容別

種別 各メディアセンター	文 献 所 在 調 査	事 項 調 査	利 用 指 導	そ の 他	合 計
三田メディアセンター	9,477	336	4,927	76	14,816
日吉メディアセンター	1,958	721	4,912	2	7,593
医学メディアセンター	3,351	889	2,519	0	6,759
理工学メディアセンター	4,462	453	3,041	149	8,105
湘南藤沢メディアセンター	93	16	2,694	5	2,808
合 計	19,341	2,415	18,093	232	40,081

IV-1 計算機利用統計 <情報システムサービス>

(1) 利用課題数

区分	M-1700/10 (三田)		ワークステーション系 (三田)		M-1600/8 (日吉)		ワークステーション系 (日吉)		ワークステーション系 (矢上)		CNS-ワークステーション系 (SFC)		合計	
	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	学生
文学部	85	248	12	206	32	52	2	13	—	—	9	9	140	528
経済学部	68	512	13	202	50	308	10	65	—	—	6	13	147	1,100
法学部	35	214	10	234	30	48	3	48	—	—	10	5	88	549
商学部	83	2	13	101	28	54	1	35	—	—	1	2	126	194
医学部	22	—	—	—	81	44	1	2	—	—	9	3	113	49
理工学部	55	—	1	23	311	319	3	76	6	48	5	11	381	477
総合政策学部	—	—	2	51	3	4	—	8	2	—	59	1,967	66	2,030
環境情報学部	—	—	—	36	—	—	—	12	4	—	114	1,860	118	1,908
政策・メディア研究科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	177	—	177
経営管理研究科	—	—	—	—	14	20	3	3	—	—	—	—	17	23
通信教育部	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	3
諸研究所	38	7	14	—	21	—	1	—	—	—	5	1	79	8
理工実習	—	—	—	—	—	151	—	—	—	—	—	—	—	151
設置講座	—	1	—	—	—	543	—	—	—	—	—	—	—	544
諸学校	—	2	3	—	21	1	5	20	—	—	26	—	55	23
業務	502	—	19	—	318	—	4	—	—	—	54	8	897	8
情報システムサービス	118	—	8	—	94	25	15	—	—	—	2	115	237	140
外部	14	—	7	—	7	—	—	—	—	—	—	—	28	—
その他	107	32	1	116	74	83	—	4	6	13	—	12	188	260
合計	1,127	1,018	103	969	1,084	1,655	48	286	18	61	300	4,183	2,680	8,172

※日吉は平成7年1月現在、三田・矢上・SFCは3月現在

(2) JOB 件数

月	M-1700/10 (三田)	M-1600/8 (日吉)	VPX-220/10 (日吉)
4	16,802	2,752	53
5	17,287	4,200	202
6	17,558	6,203	52
7	16,668	3,853	86
8	12,696	1,437	46
9	19,622	1,873	136
10	20,786	3,020	377
11	17,235	5,645	610
12	19,796	5,168	729
1	12,797	3,163	1,061
2	12,113	2,748	214
3	15,056	3,336	249
計	198,416	43,398	3,815

※M-1700/10・M-1600/8 はバッチと TSS の合計, VPX-220/10は
NOS ジョブのみ

(3) CPU 時間

月	M-1700/10 (三田)	M-1600/8 (日吉)	VPX-220/10 (日吉)
4	27.8	78.7	27.0
5	25.9	55.5	58.1
6	28.2	65.0	87.2
7	20.7	43.8	40.6
8	7.0	5.0	22.6
9	11.2	29.5	38.1
10	12.4	98.6	66.1
11	11.9	96.7	164.4
12	10.1	120.8	372.4
1	7.9	55.8	387.8
2	6.7	21.1	101.7
3	10.7	70.2	166.7
計	180.5	740.7	1532.7

IV-2 計算機利用説明会 <情報システムサービス>

課題	期日	場所	参加人数
OPAC ガイダンス	4/15~4/22	S F C	15名
パソコンセミナー	4/21・4/25・4/27	日吉	16名
三田計算室利用セミナー	5/10・5/12・5/17	三田	10名
TSS 利用説明会(初級者)	5/11・6/6・10/20 5/24	三田 日吉	35名 5名
パソコン利用説明会・表計算とグラフ (Lotus 1-2-3)	5/12・5/19・5/23・5/25・10/27 6/9	三田 日吉	59名 11名
パソコン利用説明会・日本語ワープロ (FM-OASYS)	5/13 4/26・6/8	三田 日吉	6名 17名
日経ニューステレコン説明会	5/13・5/31 11/28	三田 日吉	6名 6名
電話回線からのパソコン等の接続	5/13	日吉	8名
TSS 利用説明会(中級者)	5/16・10/21	三田	16名
JCL (ジョブ制御言語)	5/18・10/25	三田	23名
BITNET 利用説明会	5/20	三田	20名
日吉地区のパソコン・計算機の利用法(教職員対象)	5/20	日吉	3名
SAS システム支援ソフト説明会	5/26・5/30	三田	48名
新パソコン室利用ガイダンス	5/30	三田	29名
スーパーコンピュータ (VPX220/10)	6/3	日吉	5名
パソコン利用説明会・カード型データベース(情報俱楽部)	6/10	日吉	5名
CNS 利用説明会(職員対象)	6/13・6/14	S F C	14名
ラップトップコンピュータ CNS 接続説明会	7/1・7/6	S F C	10名
日吉計算室のワークステーション利用法	10/20	日吉	35名
UNIX エディタ利用法 (Emacs)	10/21	日吉	20名
日経 NEEDS 検索システム説明会	10/24	三田	10名
Windows 利用説明会(初級者)	10/26	三田	11名
UNIX メール利用法 (mnews 編)	10/27・11/10	日吉	26名
電話回線からのホストコンピュータ利用法(ワークステーション編)	10/31	日吉	7名
UNIX メール利用法 (mh-e 編)	11/1・11/7 5/11・6/14・10/28・11/11	三田 日吉	60名 47名
UNIX ワークステーション入門	11/2・11/8 5/10・6/13・11/7	三田 日吉	57名 42名
電話回線からのホストコンピュータ利用法(メインフレーム編)	11/14	日吉	4名
SPSS (R 4.1) 説明会	11/9	三田	11名

IV-3 通信教育部生へのコンピュータ講習会 <情報システムサービス>

課題	期日	場所	参加人数
日本語ワープロ (FM-OASYS 入門)	7/25・8/2	日吉	28名
表計算とグラフ (Lotus 1-2-3 入門)	7/26・8/3	日吉	37名
パソコン利用オリエンテーション	8/11・8/12	三田	61名

昨年第2号で、稼働間もない山中資料センターを「速報」という形で報告した。本号では、1年を経過したセンターの運用状況を、各地区の視点で、特集としてまとめてみた。山中資料センターへの資料移管を契機に、各メディアセンターで出てきている蔵書構成見直しの動きも、読み取っていただけると思う。

1995年から、慶應義塾では塾をあげて、情報スーパーハイウェイを構築することになり、現在、この基盤整備の配線工事が各地区ですすめられている。その過程と構想は、大賀の記事に詳しい。全塾を1つのネットワークで結ぶ、こうした機運は、メディアネットの従来の利用者サービスの方法や形態にも多大な影響を及ぼしている。

WWWを用いた利用案内のためのホームページ作り、理工学メディアセンターで開始したCD-ROM検索サービス、また、実験的にサービス開始する写真データベース、今回記事やニュースとして取り上げたこれらのサービスもこうした基盤整備により、ますます需要も、サービスの質も高

まることが予想される。

「オリエンテーションの新しい試み」をメディアネットレポートとして掲載したが、次々新しい利用者サービスが展開されるにつれ、図書館のオリエンテーションのメニューも変化を余儀なくされている。年々新しい試みがなされることになるだろう。新しいサービスを支える全地区的コンピュータ環境も、メディアネットレポートとしてまとめてみた。

一方、KOSMOSへの目録情報の週及計画もかなり進み、OPACで検索できる蔵書の割合も大きくなっている。そこで、週及作業の経過を簡単な報告でまとめるとともに、学情情報センターの目録データベース、KOSMOS業務検索、KOSMOS-OPACのINDEXINGを比較してみることにした。目録作業に直接携わらないと、正確に把握しにくいが、メディアネットの職員としては、あらゆる場で利用するKOSMOSである。INDEXの特徴を知って、是非業務に生かしてもらいたい。

(石黒 敦子)

展示会 予告

広重「東海道五十三次」錦絵展

—出世作保永堂版に続く六種—

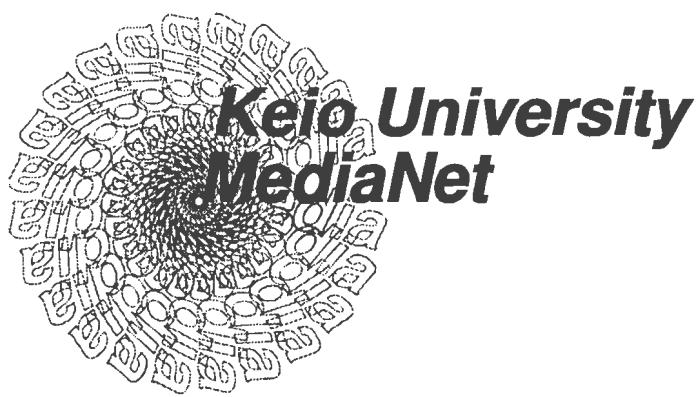
平成8年1月29日(月)～2月3日(土) 10:00～19:00(最終日は17:00まで)

於 丸善 日本橋店4F ギャラリー

歌川広重というと、東海道錦絵が浮かぶほど五十三次のシリーズは有名である。小題に記した通り、最初にヒットした保永堂版が知られ過ぎたせいか、東海道のシリーズが他に20種類以上もあることは案外知られていない。役者でいえば当たり役の東海道があるので、広重は中年から晩年まで出版社の注文に応じて、度々描か

せられたわけでもある。本塾には故高橋誠一郎名誉教授の、保永堂版など全7種類の東海道シリーズを所蔵している。今回は、日頃、目に触れる事の少ない6種類のシリーズから110点を選び展示する。こうしたシリーズの中にも名品の多いことを、この機会に是非実見して頂きたい。

編集長 日吉メディアセンター 石黒敦子*編集員 三田メディアセンター 小沢ゆかり 藤井康子
持田裕人*日吉メディアセンター 宮国彰郎 木下和彦*理工学メディアセンター 清野早苗*医学メ
ディアセンター 平吹佳世子*湘南藤沢メディアセンター 吉沢亜季子



Mita Media Center

Hiyoshi Media Center

Medical Information and Media Center

Information and Media Center for Science/Technology

Shonan Fujisawa Media Center